前沢・臼ヶ原・臼ヶ原西
臼ヶ原南遺跡

平成10年度

県営圃場整備事業原村西部地区

に先立つ緊急発掘調査報告書

1999.3

長野県原村教育委員会

前沢(まえざわ)・臼ヶ原(うすっぱら)・臼ヶ原西(うすっぱらにし)

臼ヶ原南(うすっぱらみなみ) 遺跡

平成10年度

県営圃場整備事業原村西部地区

に先立つ緊急発掘調査報告書

1999. 3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の１　○印が前沢・白ヶ原・白ヶ原西・白ヶ原南遺跡

序

八ヶ岳山麓に位置する原村では、村の基幹産業たる農業の合理化と生産性向上が求められており、これにともなう県営圃場整備事業が大規模に進められております。また当地を含めた八ヶ岳西南麓は遺跡の宝庫・縄文のふるさととして全国的にも著名であり、古くから注目を集めて来ました。

今回報告する前沢・臼ケ原・臼ケ原西・臼ケ原南の４遺跡は「平成10年度県営圃場整備事業　原村西部地区」内に存在しており、諏訪地方事務所の委託と国・県からの補助金の交付を受けて原村教育委員会が緊急発掘調査を実施したものであります。なかでも臼ケ原遺跡は昭和53年度の村道改良にともなう調査に続く２次調査であり、１次調査と同様に縄文時代の陥し穴が列をなして発見されました。この発見は今後当地方の縄文時代解明にむけての好資料を提示することになったと思われます。

今回の調査にあたり、諏訪地方事務所土地改良課各位、柏木地区及び同地区実行委員会各位、地元地権者の方々のご理解・ご協力、長野県教育委員会のご指導、長野県埋蔵文化財センターをはじめ発掘にかかわる多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では、長野県埋蔵文化財センター 調査研究員 田中正治郎氏の多大のご助力、そして炎天下でご苦労された作業員の皆様により、失われていく貴重な資料を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申しあげ、序といたします。

平成11年３月

原村教育委員会
教育長　大館　宏

例　　言

1　本書は「平成10年度県営圃場整備事業　原村西部地区」にともなって実施した長野県諏訪郡原村柏木に所在する前沢・臼ケ原・臼ケ原西・臼ケ原南遺跡の緊急発掘調査報告書である。

臼ケ原南遺跡は当初臼ケ原遺跡南尾根地区としていたが、後に独立した遺跡とした。

2　本調査は諏訪地方事務所の委託を受けた原村教育委員会が国庫および県費から発掘調査費補助金の交付を受けて平成10年5月1日から同年9月30日まで実施した。整理作業は平成10年12月20日から平成11年3月24日まで行った。

3　現場の発掘調査における遺構等の実測・記録は田中の指導のもと、林史子、津金喜美子、進藤郁代、小林りえが行い、写真撮影は田中が行った。空中写真については（株）写真測図研究所に委託した。遺物・図面の整理は津金、進藤、小林、清水正進が、原稿の執筆は田中が行ったが、一部遺構については写真測図研究所に、出土した石器については（株）アルカの角張淳一氏に製図・原稿を依頼した。

4　出土品・諸記録は原村教育委員会が保管している。なお本調査関係の資料に付した原村遺跡番号は次のとおりである。12 前沢、17 臼ケ原、98 臼ケ原西、101 臼ケ原南

5　発掘調査から報告書作成にいたる過程で長野県教育委員会文化財保護課原　明芳、長野県埋蔵文化財センター　広瀬昭弘はじめとする多くの方々からご教示、ご指導を賜った。記して感謝申し上げる。

目　　次

序
例　　言
目　　次
写図目次

I　発掘調査の経過 …… 1
　1. 発掘調査に至る経過 …… 1
　2. 調 査 組 織 …… 1
　3. 発掘調査の経過　調査日誌 …… 4

II　調 査 方 法 …… 7
　1. 調査区の設定 …… 7
　2. 調査の方法 …… 7
　3. 調査の概要 …… 7

III　前 沢 遺 跡 …… 10
　1. 位置と環境 …… 10
　2. 土　　層 …… 10
　3. 遺構と遺物 …… 13
　4. ま と め …… 13

IV　臼ケ原遺跡 …… 14
　1. 位置と環境 …… 14
　2. 土　　層 …… 14
　3. 遺構と遺物 …… 19
　　(1) 陥 し 穴 …… 19
　　(2) 小 竪 穴 …… 49
　　(3) 集石状遺構 …… 55
　　(4) 遺　　物 …… 67
　4. 小 考 察 …… 69

(1) 陥し穴 …… 69
(2) 集石状遺構 …… 76

V 臼ケ原西遺跡 …… 80
1. 位地と環境 …… 80
2. 土　　層 …… 80
3. 遺構と遺物 …… 82
4. まとめ …… 82

VI 臼ケ原南遺跡 …… 84
1. 位置と環境 …… 84
2. 土　　層 …… 84
3. 遺構と遺物 …… 84
4. まとめ …… 87

VII 結　　語 …… 88

写真図版

図 版 目 次

第１図　原村域の地形断面模式図（赤岳－前沢・臼ケ原・臼ケ原西・臼ケ原南遺跡－宮川ライン）…… 1
第２図　前沢・臼ケ原・臼ケ原西・臼ケ原南遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第３図　前沢・臼ケ原・臼ケ原西・臼ケ原南遺跡発掘調査区域図 …… 8
第４図　前沢遺跡全体図 …… 11・12
第５図　臼ケ原遺跡東部地区全体図 …… 15・16
第６図　臼ケ原遺跡西部地区全体図 …… 17・18
第７図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (1) …… 20
第８図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (2) …… 22
第９図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (3) …… 24
第10図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (4) …… 26
第11図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (5) …… 28
第12図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (6) …… 30
第13図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (7) …… 32
第14図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (8) …… 34
第15図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (9) …… 36
第16図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (10) …… 38
第17図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (11) …… 40
第18図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (12) …… 42
第19図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (13) …… 44
第20図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (14) …… 46
第21図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (15) …… 47
第22図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 (16) …… 48
第23図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 小竪穴 (1) …… 50
第24図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 小竪穴 (2) …… 52
第25図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 小竪穴 (3) …… 54
第26図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 集石状遺構 (1) …… 56
第27図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 集石状遺構 (2) …… 58
第28図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 集石状遺構 (3) …… 60
第29図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 集石状遺構 (4) …… 62
第30図　臼ケ原遺跡　陥し穴実測図 集石状遺構 (5) …… 64

第31図　集石状遺構分布図（部分）…… 65・66
第32図　臼ケ原遺跡出土の石器類 …… 68
第33図　陥し穴覆土別分布図 …… 70
第34図　全陥し穴の軸方向 …… 72
第35図　列内陥し穴の軸方向 …… 72
第36図　列外陥し穴の軸方向 …… 72
第37図　底部小ピットの間隔 …… 72
第38図　陥し穴底面の規模 …… 72
第39図　陥し穴周辺の地形図 …… 73
第40図　臼ケ原西遺跡全体図 …… 81
第41図　臼ケ原西遺跡の小竪穴 …… 83
第42図　臼ケ原西遺跡の石器類 …… 83
第43図　臼ケ原南遺跡全体図 …… 85・86

表　目　次

第１表　前沢・臼ケ原・臼ケ原西・臼ケ原南遺跡と周辺の遺跡一覧 …… 3
第２表　集石状遺構 礫重量 (1) …… 78
第２表　集石状遺構 礫重量 (2) …… 79

Ⅰ　発掘調査の経過

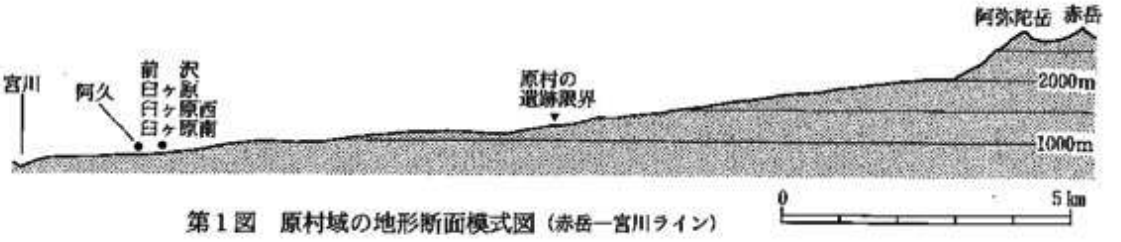
1.　発掘に至る経過

平成５年度から実施されている「県営圃場整備事業原村西部地区」も６年目をむかえた。前沢・臼ヶ原・臼ヶ原西・臼ヶ原南の４遺跡の保護については、平成９年８月22日並びに10月13日に行われた「平成10年度県営圃場整備事業原村西部地区にかかわる埋蔵文化財保護協議」で協議され、遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいことであるが、原村の農業の将来を考えると農地の整備は必要なことある上に、農業者から強い要望もあり「記録保存やむなき」との考えに落ち着いた。そして平成10年度に緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることができた。出席者は長野県教育委員会文化財保護課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の４者である。その後も協議を重ね、調査日程等の確認を行い、原村教育委員会は、国庫および県費から発掘調査補助金の交付を受け、また、また諏訪地方事務所からは緊急発掘調査の委託を受け、平成10年５月１日から９月30日にわたって緊急発掘調査を実施した。

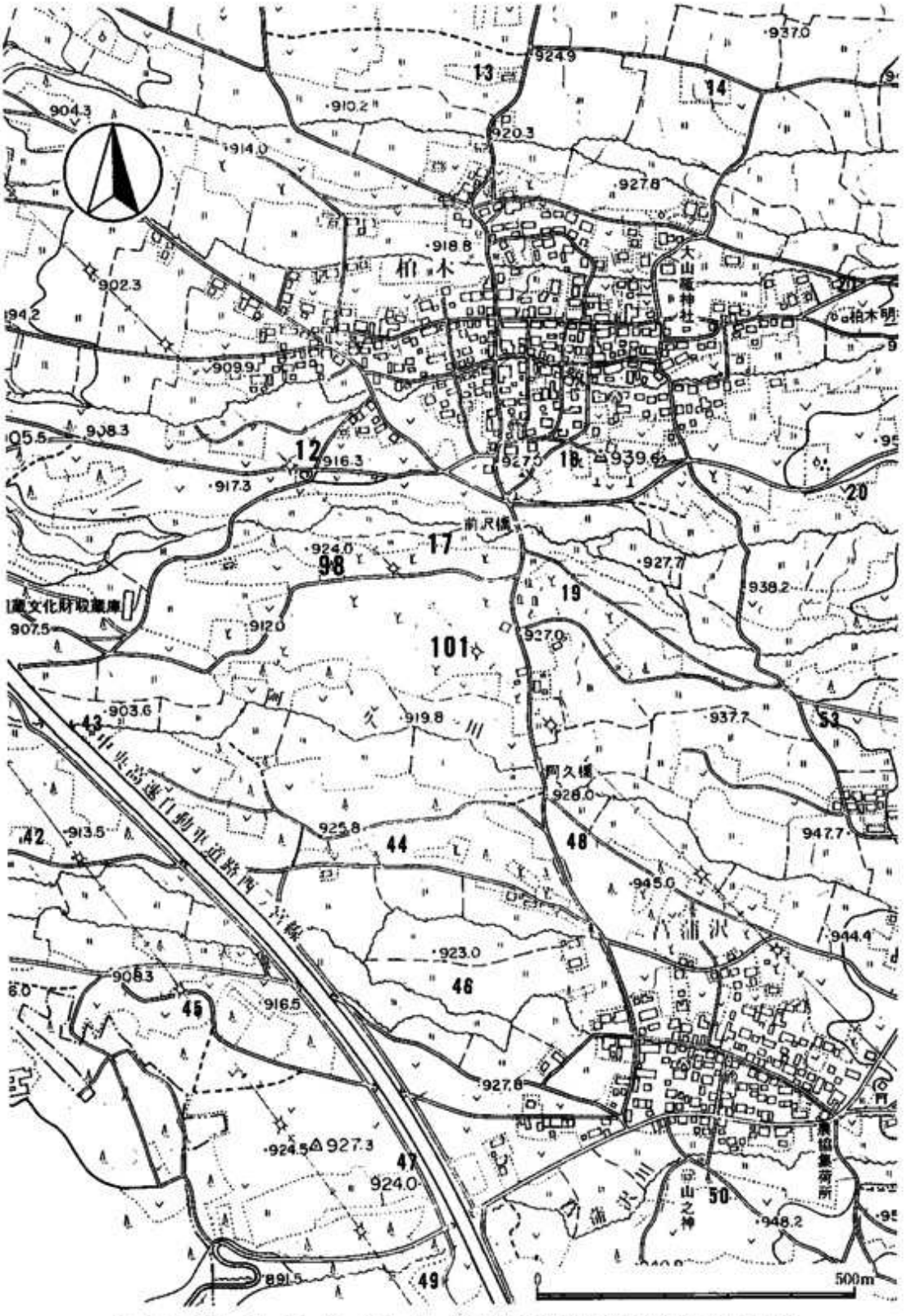
2.　調　査　組　織

前沢・臼ケ原・臼ケ原西遺跡発掘調査団名簿

団　　長	大館　宏（原村教育委員会教育長）
調査担当者	田中正治郎（長野県埋蔵文化財センター・原村派遣）
調　査　員	平出　一治（原村教育委員会）
調査参加者	清水　太助　西沢　寛人　小林　ミサ　林　史子　五味　元 五味八代江　清水　正進　小池　英男　小島　政雄　小松　弘 日達今朝江　吉川　幸子　津金喜美子　進藤　郁代　小林　りえ 田中　初一　金子　正美　久根　種則　（順不同）
事　務　局	原村教育委員会事務局　小林　銹晃（教育次長）　津金　一臣（庶務係長） 戸田　美鈴　平出　一治（文化財係長）　中村　恵子 田中正治郎（県派遣主事）



第１図　原村域の地形断面模式図（赤岳―宮川ライン）



第２図　前沢・臼ヶ原・臼ヶ原西・臼ヶ原南遺跡の位置と付近の遺跡（1：10,000）

表1　前沢・臼ケ原・臼ケ原西遺跡と付近の遺跡の一覧

○は遺物発見、◎は住居跡発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文						弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後	晩							
11	阿久			○	◎	◎	○					◎			昭和50～54年、平成5・7年度調査
12	**前沢**					◎						○		○	**昭和55・61・平成10年度調査**
13	長峰			○	○	◎	○		○			◎		○	平成3年度調査
14	裏長峰	○		○		○						◎			平成4年度調査
17	**臼ケ原**			○	○							○			**昭和53・平成10年度調査**
18	前尾根西					○									昭和51年一部破壊
19	南平			○		◎							○		平成9年度調査
20	前尾根					◎	◎					◎		○	昭和41・52～54・59・平成9年度調査
21	上居沢尾根					◎	○								平成4年調査
42	居沢尾根		○			◎	○					◎			昭和50～52・56・平成6年度調査
43	中阿久					○								○	昭和51年度調査
44	原山					○						○			昭和50年一部破壊
45	広原口向	○				○	○					○			昭和58年度調査
46	宿尻	○				◎	○					◎			平成5・6年度調査
47	ヲシキ			○	○	○						◎			昭和51・平成10年度調査
48	楡の木					○									昭和53年一部破壊
49	大石	○		○	◎	◎						◎		○	昭和50・平成4・5年度調査
50	山の神					◎	○					○			昭和54年
53	雁頭沢					◎						○		○	昭和54・57・63・平成4・5・9・10年度調査
98	**臼ケ原西**						○								**平成10年度調査**
101	**臼ケ原南**			○											**平成10年度調査**

3. 発掘調査の経過調査日誌

前沢遺跡

平成10年5月1日　発掘調査の準備を始める。

5月6日　斜面部分、重機による表土剝ぎ開始。

7日　斜面部分、表土剝ぎを続ける。

8日　近・現代の溜検出。遺物皆無。

11日　ロームマウンドを検出。

12日　尾根上平坦部、トレンチ調査。削平、攪乱が著しい。

21日　検出面清掃、写真撮影、トレンチ埋め戻し、調査終了。

白ケ原遺跡

平成10年5月11日　発掘調査の準備を始める。

13日　村道北側、重機による表土剝ぎ開始。小竪穴8基検出。縄文早期土器出土。

14日　表土剝ぎを続ける。小竪穴4基検出。

15日　小竪穴3基、中・近世の溜検出。

18日　表土剝ぎ継続。調査区東側は削平・盛り土による地形改変が顕著。小竪穴3基検出。

19日　本日より作業員投入。小竪穴の検出写真撮影。

20日　村道北側、測量基準杭打設。

21日　小竪穴掘り下げに着手。

22日　村道南側、重機による表土剝ぎ。

25日　小竪穴断面写真撮影。実測。

26日　村道北側再度検出。小竪穴多数確認。村道南側表土剝ぎを続ける。

27日　村道南側、測量基準杭打設。

28日　村道南側、集石状の遺構？を10数基準検出。

6月1日　村道北側小竪穴調査を続ける。村道南側集石状遺構？の半割に着手。

4日　村道北側小竪穴平面図実測開始。

8日　村道北側小竪穴掘り下げほぼ終了。

9日　村道南側検出を続ける。

10日　村道北側、小竪穴の平面図実測・写真撮影。排土のため午前中にて調査中止。

15日　村道南側調査範囲拡張。排土・検出を続ける。

16日　陥し穴の列状配置に気付く。

17日　村道南側排土を続ける。

24日　村道北側遺構実測、村道南側検出を続ける。

25日　村道南側、遺構の清掃を開始。

26日　村道南側遺構の清掃を続ける。雨のため午前11時にて作業中止。

29日　村道北側、実測・写真撮影を続ける。

30日　村道北側、実測・写真撮影を続ける。

7月2日　村道北側、遺構実測ほぼ終了。

3日　村道南側略測図作成。

6日　遺構清掃。草むしり。

7日　村道南側、遺構清掃・断面図作成。

8日　村道南側、集石？の調査を続ける。

9日　村道南側、集石？の調査を続ける。

13日　空中写真撮影準備。対空標識設置。

14日　ラジコンヘリによる空中写真撮影。

15日　村道南側、集石？の調査を続ける。

17日　村道北側、コンター図作成。

21日　村道北側、コンター図作成を続ける。

22日　村道南側集石状遺構？の半割を開始。

23日　村道南側、集石？の調査を続ける。

28日　村道南側調査を続ける。雨のため半日で調査中止。

29日　村道南側、集石？の断面図作成を続ける。

30日　村道南側、集石？の調査を続ける。

31日　村道南側、集石？の調査を続ける。

8月3日　村道南側調査を続ける。

4日　村道南側、集石？の調査を続ける。

5日　村道南側、集石？の調査を続ける。

6日　南尾根部分（後に臼ケ原南遺跡とする。）重機にてトレンチ調査開始。

7日　南尾根部分、検出作業開始。雨のため午前10時にて調査中止。

10日　村道南側、集石？の調査を続ける。

17日　村道南側調査を続ける。

18日　村道南側、集石？の調査を続ける。

19日　村道南側調査を続ける。南尾根、小竪穴3基検出。

20日　村道南側調査を続ける。南尾根、トレンチ調査を続ける。

21日　村道南側遺構掘り下げほぼ終了。南尾根、集石、住居跡を確認。

24日　村道南側平面図実測を続ける。南尾根、小竪穴半割。

25日　南尾根トレンチ調査範囲実測。住居跡周辺検出。

26日　南尾根調査範囲実測を続ける。雨のため午前11時にて作業中止。

9月1日　村道南側平面図実測を続ける。南尾根小竪穴断面図実測。

2日　南尾根トレンチ写真撮影のため清掃。

3日　村道南側平面図実測を続ける。

4日　南尾根小竪穴写真撮影。

8日　村道南側平面図実測を続ける。

9日　村道南側レベリング開始。

10日　南尾根住居跡床面精査。

14日　南尾根住居跡調査を続ける。

17日　南尾根住居跡土層図作成。

18日　南尾根住居跡遺物出土状況写真撮影。

30日　資材撤収。調査終了。

臼ケ原西遺跡

平成10年6月25日　重機にて抜根。

29日　重機によるトレンチ調査開始。

30日　小竪穴1基検出。

7月2日　斜面部分、重機にて表土剝ぎ。

9日　斜面部分検出。遺構発見できず。

17日　斜面部分再検出。ロームマウンドを確認。

22日　調査範囲実測。

28日　再度重機によるトレンチ調査開始。

30日　小竪穴半割。

31日　小竪穴完掘。写真撮影。

II 調 査 方 法

1. 調査区の設定

調査区は平面直角座標系（国家座標）第Ⅷ系に合わせX＝－4150、Y＝－27100（臼ケ原遺跡EA-1杭）を基準とし、50m×50mの大グリッドを設定してアルファベット順に地区を作った。（第3・5図）さらにこの大グリッド内を2m×2mの小グリッドに分割して縦に1～25、横にA～Yの符号をつけたが、これは特殊な場合のみ使用し、一般的な遺構の実測等は10m×10mの中グリッドを単位とした。

臼ケ原遺跡では上記の方法で地区を設定したが、遺構の希薄な前沢・臼ケ原西遺跡では国家座標に従った測量基準杭を打設したのみで、調査時点では特に地区設定は行わなかった。これは調査終了後、新発見遺跡とされた臼ケ原南遺跡（調査段階では臼ケ原南尾根地区）でも同様である。

2. 調 査 の 方 法

過年度調査の結果や周辺遺跡の調査から、遺構はローム層にまで掘り込まれていることが知られているため、まず重機にて表土（耕作土・黒褐色土）を剝ぎ、現れた褐色～黄褐色の漸移層を人力にて削り、検出面とした。調査の進行にともなう検出面の乾燥、汚れにより数回検出を繰り返した。

検出された遺構は基本的に半割して覆土の堆積状況観察・記録したのち掘り下げたが、一部検出困難なものに対してはサブトレンチを入れて観察したのち同様の手順をとった。

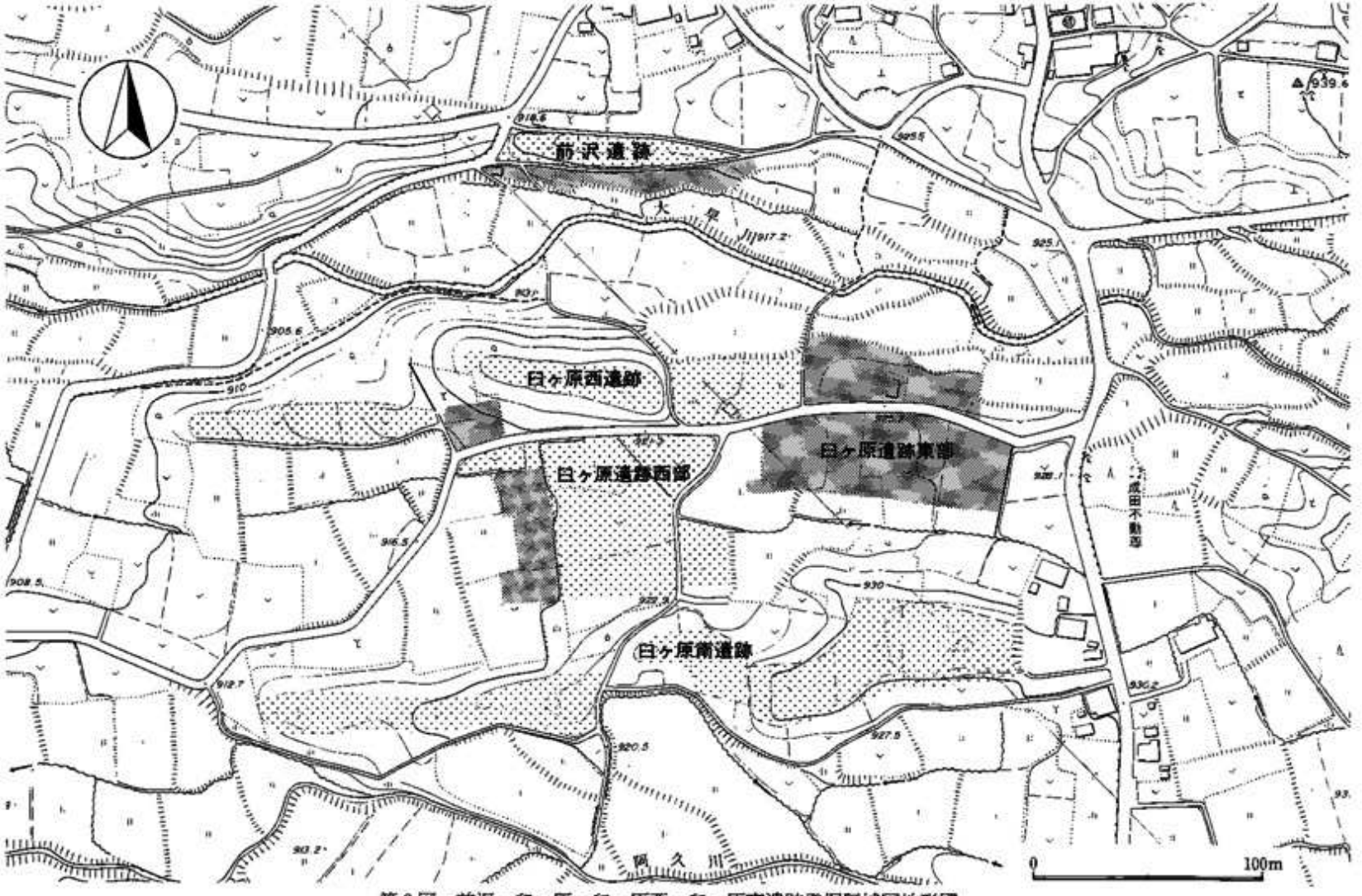
3. 調 査 の 概 要

前 沢 遺 跡

尾根部は道路改良にともなう工事でほぼ完全に削平されており、遺構・遺物ともに皆無。斜面では近・現代の溜が1基確認された。

臼 ケ 原 遺 跡

東部地区からは小竪穴が基検出され、このうち基が所謂陥し穴である。村道の南側は集石状の遺構？が多数検出されたが人為的なものと結論できない要素が多く、判断に苦しむものである。



第3図　前沢・臼ヶ原・臼ヶ原西・臼ヶ原南遺跡発掘区域図地形図
網密＝面調査　　網粗＝トレンチ調査

遺物はごく少なく陥し穴周辺では縄文時代早期の土器、特殊磨石等が少数検出された。小規模な焼土跡も確認されているが、住居跡等の明確な生活の痕跡は発見できなかった。

過年度の分布調査で灰釉陶器等が採集されている西部地区では遺構・遺物とも全く発見されなかった。

臼ケ原南遺跡（臼ケ原遺跡南尾根地区）

遺跡東端の高圧線鉄塔付近では陥し穴と考えられる小竪穴が4基発見された。遺跡中央部は遺構は検出されず、遺跡西部の阿久川右岸付近で住居跡、集石炉、小竪穴等が確認された。

臼ケ原西遺跡

尾根上では2基の小竪穴が検出されたが、遺物は原石と思われる黒曜石片が散見されたのみである。

尾根裾部では少数の縄文土器片が得られたのみで遺構は全くみられなかった。

III 前沢遺跡

1. 位置と環境

前沢遺跡（原村遺跡番号12）は柏木区の現柏木集落の西半分にあたり、中央自動車道の諏訪南南インター北西3.5kmの長野県諏訪郡原村柏木8348-3番地付近に位置する。

臼ケ原遺跡、臼ケ原西遺跡は大早川を隔てた南方約100mに、前尾根遺跡は東方約200mに所在している。

このあたりは八ヶ岳西麓に位置し、東西方向に細長く発達した大小様々な尾根状の丘陵がみられる。その一つである大早川右岸の尾根上と斜面が遺跡である。西方約300mの大早川左岸には国史跡阿久があり、さらに西約1.5km先でフォッサマグナの西縁である糸魚川－静岡構造線の断層崖に沿って流れる宮川によって断ち切られる。

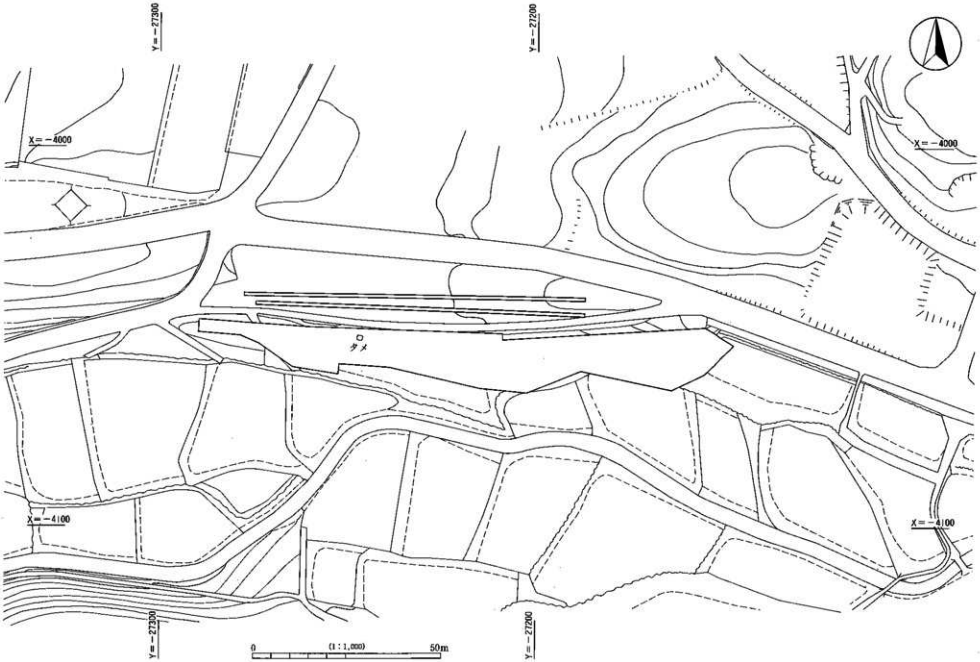
「原村の考古学的調査」（昭和43年）によると前沢遺跡からは縄文中期と思われる土器片、打製石斧、エンドスクレイパーが採集されたようである。昭和53年に行われた村道改良にともなう発掘調査では縄文中期土器、打製石斧、凹石、石鏃等を少々検出したのみで遺構を確認するまでには至らなかった。昭和61年の二次調査では縄文早期の小竪穴３基、中期住居跡１軒、近世の墓坑４基が確認され、縄文早期～中期の土器、平安時代の土器が検出されている。

発掘地点の地目は畑で集落に近接していることもあり、耕作・開発等で遺跡の保存状態はあまり良くない。標高は920m前後を測り、原村の遺跡としてはやや低所に位置している。

2. 土　　層

第４図に示したように尾根上部、斜面部をあわせて1757m²を調査したが、尾根上部は道路改良に伴う削平をうけており、表土（耕作土）下はローム層となっており、プライマリーな部分は斜面部のみであった。

尾根上部　Ⅰ層　耕作土
　　Ⅱ層　黄色土。締まりのよいローム層。
斜面部　Ⅰ層　耕作土。黒褐色土。
　　Ⅱ層　褐色土。
　　Ⅲ層　黄褐色土。礫を含むローム層。


Y=−27200
Y=−27200
X=−4000
X=−4000
タメ
X=−4100
X=−4100
Y=−27300
Y=−27200
0
(1:1,000)
50m

第4図 前沢遺跡全体図

3. 遺構と遺物

尾根上部は上記の理由により遺構はまったく発見されなかった。斜面部では近・現代の溜が1基発見されたが、これ以外には遺構はみられなかった。

4. まとめ

過年度調査の結果が示すように前沢遺跡の主体は尾根部の現柏木集落付近のようである。前沢遺跡の東側に連続する前尾根遺跡の調査例からすれば、斜面部分にも遺構が分布していることが予想されたが、縄文時代〜平安時代の遺構・遺物とも皆無であり、今後尾根上の開発に一層注意を払う必要があろう。

IV 臼ケ原遺跡

1. 位置と環境

臼ケ原遺跡（原村遺跡番号17）は柏木区の南西、中央自動車道の諏訪南インターの北東約3㎞の、長野県諏訪郡原村柏木9439-1番地付近に位置する。

臼ケ原西遺跡は西側に、臼ケ原南遺跡は南側に接しており、それぞれ地形の違いで区分されている。また前沢遺跡は大早川を隔てた対岸に位置しており、史跡阿久遺跡は大早川の下流約500mの地点にある。阿久遺跡より西は約1㎞先でフォッサマグナの西縁である糸魚川ー静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られる。

この付近は八ヶ岳西麓にあたり、東西方向に細長く発達した大小様々な尾根状の丘陵がみられる。その一つである大早川左岸の痩せ尾根にはいくつかの遺跡が分布しているが、この尾根は断続的に連なっており、臼ケ原遺跡はこの痩せ尾根がとぎれた部分に展開した段丘状の平坦面に立地している。したがって臼ケ原遺跡は付近の遺跡とはやや異なった地形上にあるということになる。発掘地点は畑として利用されており、遺構の保存状態は概ね良好であった。

臼ケ原遺跡は諏訪清陵高校地歴班による「原村の考古学的調査」では土師器時代の単純遺跡として記録されている。

昭和53年3月村道の改良工事にともなって行われた一次調査は、既存の村道を生かしたまま両側を拡幅する工法を採ったため、幅1～1.5mのトレンチを道の両側に掘り込んだかたちとなった。したがってわずかな面積を調査したにすぎないが小竪穴が8基検出され、うち7基が所謂陥し穴であった。遺物は土器片と黒耀石片が得られたのみで、陥し穴との直接の関連をうかがわせるものは出土していない。しかしながら、陥し穴単純の遺跡として原村の中でも例をみない遺跡であり、注目されてきた。

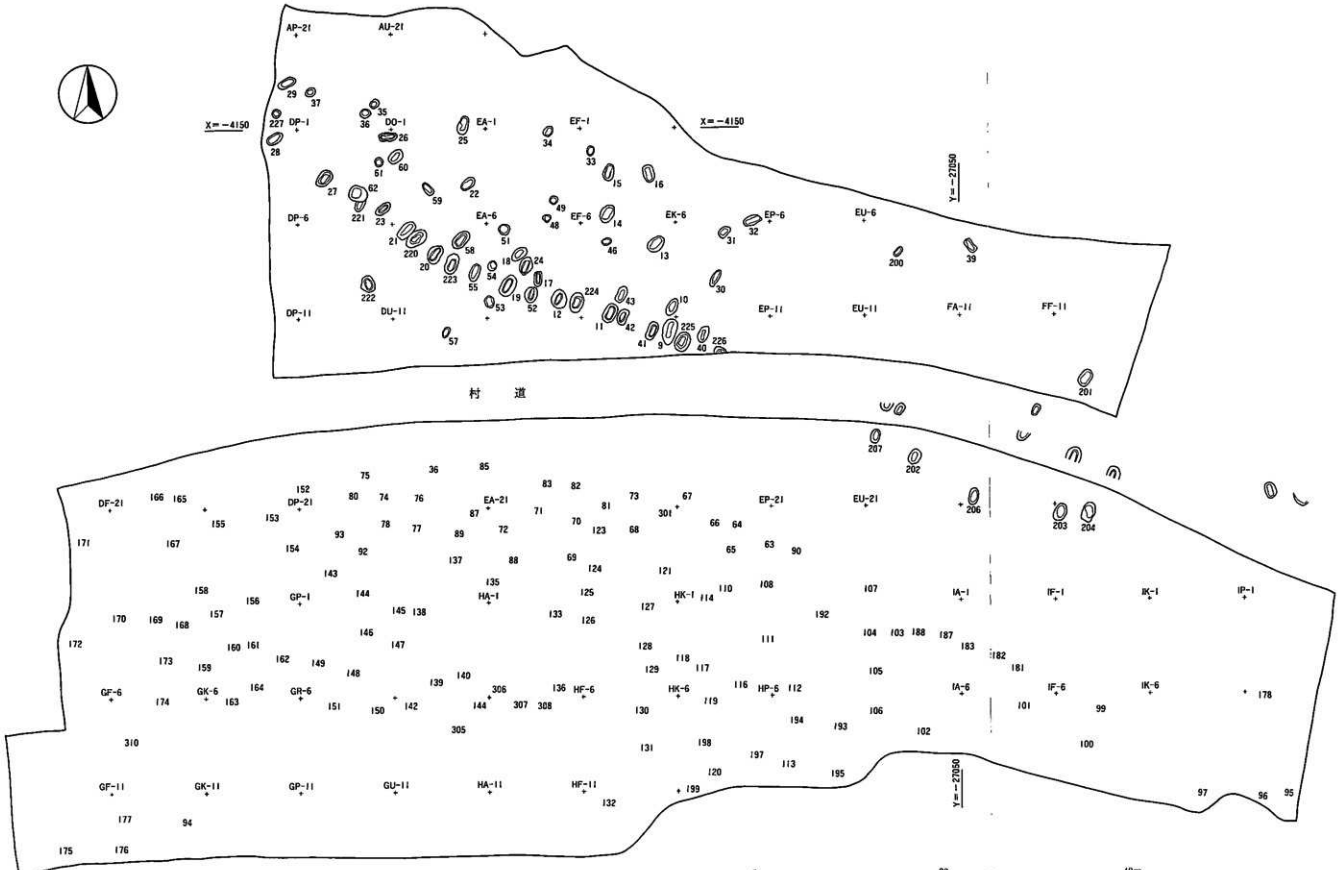
2. 層　　序

調査はローム層上面まで検出を繰り返し、部分的に深掘りをかけて下層遺構の存否を確かめた。基本的な層序は次のとおりである。

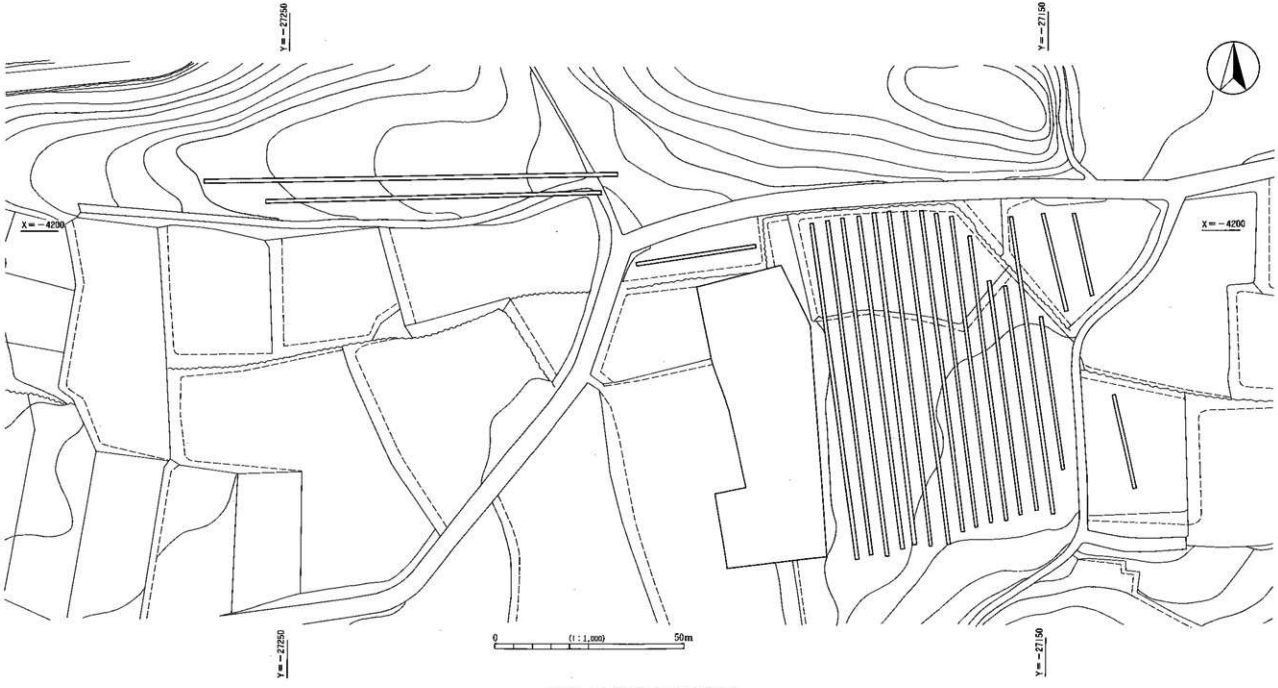
Ⅰ層　黒褐色土　　畑地耕作土。基本的にはⅡ層が耕作により淡色化したものと思われる。

Ⅱ層　黒色土　　黒ボク土。漆黒で村道北側では礫はほとんど混じらないが、南側では大小の礫が混入する。

Ⅲ層　褐色土　　Ⅱ層からⅥ層への漸移層。必ずしも明確ではないが村道北側では広く認め



第５図　臼ヶ原遺跡 東部地区全体図（1：400）



第６図　白ヶ原遺跡 西部地区全体図

られる。遺構検出面。

IV層　黄褐色土　　所謂ソフトローム層。部分的に礫が混じる。

3. 遺構と遺物

(1) 陥し穴（第7～22図）

小竪穴のなかで典型的（長径2m前後の楕円形を呈し、底面に1～4個の小ピットを持つもの）なものを陥し穴として扱うが、例外的に底面の小ピットを欠くものや、やや小型のものもこれに含めた。なお遺構番号は一次調査からの通し番号である。

小竪穴　9　（第7図）

EF－11、EK－11グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒褐色土が逆三角堆土状に観察され、自然埋没した様子が明瞭。壁は底部から25cm程は急角度で立ち上がり、その後極端に緩やかになり極めて明確な段を作る。このため底部付近は二段底状になり、細長い長方形を呈する。上面形態は長楕円形であるが、これは壁の崩落の可能性も考えられる。逆茂木を立てたとされる小ピットは底面中央に2個穿たれており、本遺跡では一般的な形態・規模である。

本竪穴は小竪穴19等とともに臼ケ原遺跡の陥し穴でもかなり大型なものに分類される。陥し穴とその用途・機能については不明な点が多いが、規模に明確な大小が存在するとすればそれは対象獣の差や時期差あるいは陥し穴を掘った集団の差となるのかも知れない。

遺物は検出されなかった。

小竪穴　10　（第7図）

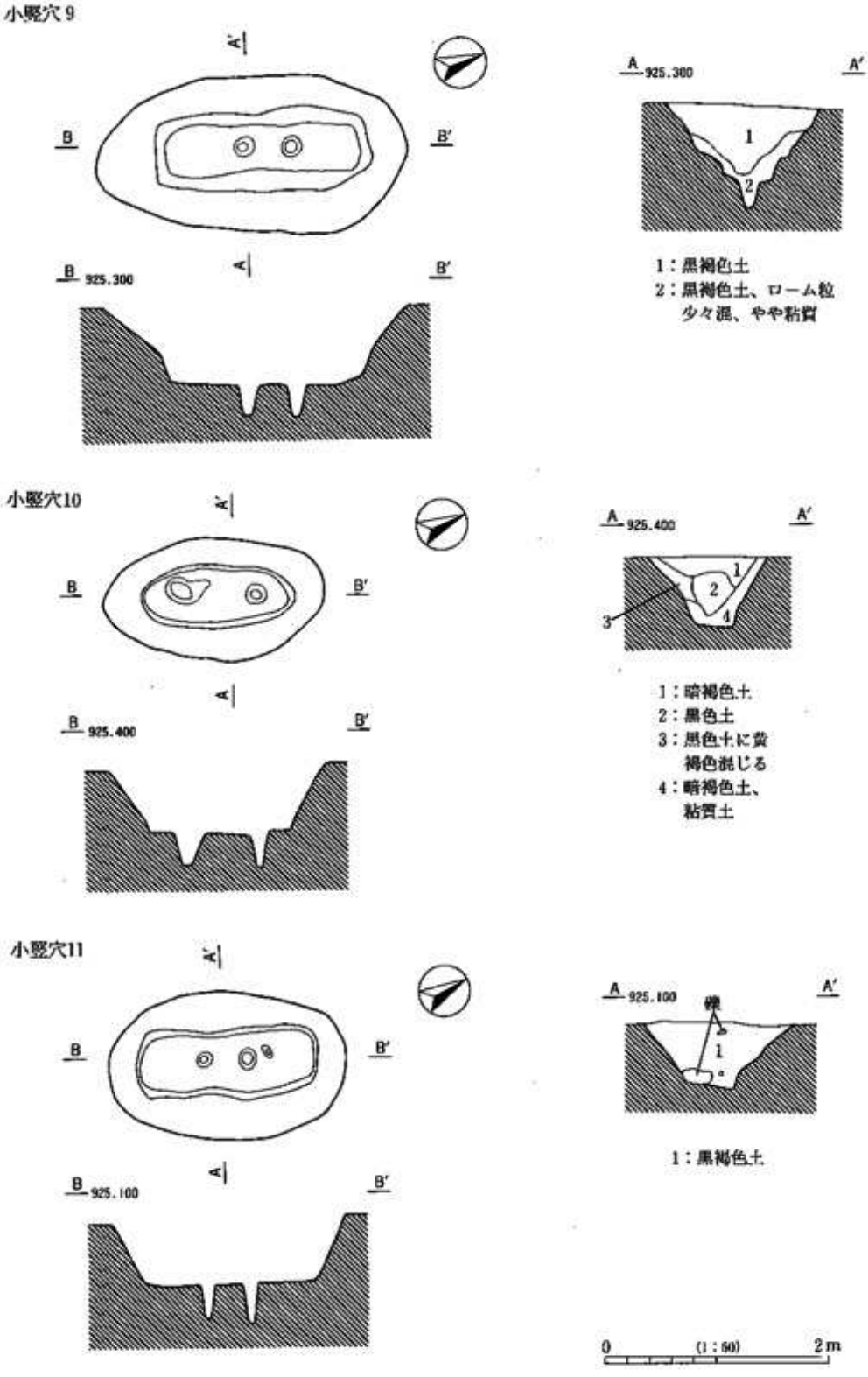
EF－6、EK－6グリッドで検出調査した。覆土は上層に暗褐色土、中層に黒色土が堆積しておりやや特異な堆積を状況を示していた。壁は底部から10cm程は急角度で立ち上がり、その後は緩やかになる。このため明確な段が観察されるが、急角度で立ち上がる部分がわずかなためか底面は整った長方形にはならない。底面の小ピットはやや間隔が広く、深さ30cmである。

本竪穴は列をなす陥し穴のなかでも北側の陥し穴がまばらな列に位置しているが、これらを形成している個々の陥し穴に共通する特徴については別に述べる。

遺物は検出されなかった。

小竪穴　11　（第7図・PL9）

EF－6、EK－11グリッドで検出調査した。覆土は黒褐色土の単層で構成されており特に層序はみられなかった。壁は底部から急角度で立ち上がり、このためか他の陥し穴にしばしば観察さ



第7図　臼ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (1)

れる二段底状の段はみられない。底部は長方形に近い形態で、小ピットは間隔、規模とも他の小竪穴と大差ない。

本竪穴は小竪穴42、43ときわめて近接しており、本竪穴を含めた3基で一つのグループを形成しているようにも見える。覆土の差からこの3基のなかでは本竪穴がもっとも新しいと思われ、この3基は掘り直しによる一連の陥し穴の可能性もある。

遺物は中越式と思われる薄手の土器が一片検出されたのみである。

小竪穴 12 (第8図・PL6)

EA－6グリッドで検出調査した。覆土は上層にきわめて均質な黒色土が逆三角堆土状にみられ、典型的な自然堆積を示していた。壁は底部から30cm程は急角度で立ち上がり、その後緩やかになる。このため明確な段が観察され、底部は胴の張った長方形に近くなる。底部の小ピットは他の陥し穴と同様の規模・間隔である。

本跡の平面形は他の陥し穴に比してかなり円形に近いが、これは単なる壁の崩落の結果と考えたい。

遺物は検出されなかった。

小竪穴 13 (第8図・PL10)

EF－6グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土が堆積しており、典型的な自然堆積を示していた。壁は底部から急角度で立ち上がり、このためか他の陥し穴にしばしば観察される明確な段はみられない。底部はややゆがんだ長方形で小ピットは間隔、規模とも他の小竪穴と大差ない。

本竪穴は列をなす陥し穴群とは離れた北側に位置しており、列をなすものとは異なった機能・用途が予想されるが形態的に大きな差異は認められず、逆になぜ列をなすものとそうでないものがあるのか疑問である。

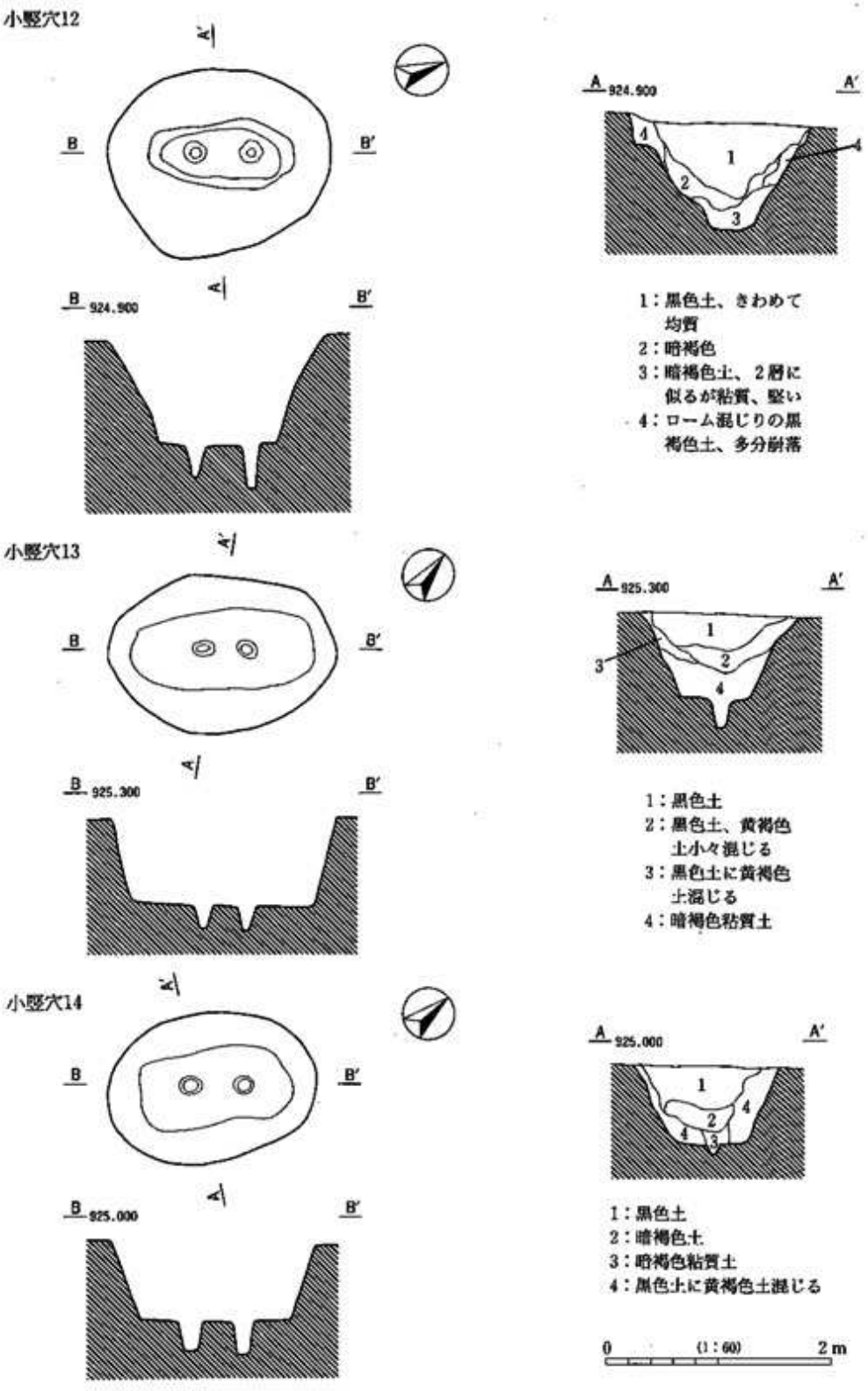
遺物は繊維を含む条痕紋系土器がややまとまって検出された。

小竪穴 14 (第8図・PL10)

EF－1グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土が堆積しており典型的な自然堆積を示していた。壁はそれほど急角度で立ち上がってはいないものの、底部付近の段ははっきりしない。底部は隅丸長方形に近く形態を呈し、小ピットは間隔、規模とも他の小竪穴と大差ない。

本竪穴も小竪穴13と同様、列からは離れた位置にあり、底部も二段底状にはならない。やや示唆的であるが、このことについては別に述べたい。

遺物は検出されなかった。



第8図　臼ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (2)

小 竪 穴　15　(第9図・PL10)

EF－1グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土が堆積しており典型的な自然堆積を示していた。このため検出はきわめて容易であった。壁は底部から急角度で立ち上がり、明確な段は部分的にしか観察されなかった。底部は隅丸長方形に近く、逆茂木を立てたとされる小ピットは間隔・規模とも他の小竪穴と大差ない。底部には他に3個ほど小ピットがみられ、逆茂木を支持するための施設ともとれるがよくわからない。本跡は他の陥し穴に比してやや短軸が長いようであるが、これは壁が崩落したものと考えたい。

遺物は青色のチャート製の楔型石器が検出されている。

小 竪 穴　16　(第9図)

EF－1グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒ボク土そのものといっても過言でない程黒い土が堆積しており、当初後世の攪乱と錯覚した。本跡は調査区北側の斜面部分に立地しており、斜面上側の壁は底部から急角度で立ち上がるが、斜面下側は掘り込みが浅いためか、やや緩やかに立ち上がる。また他の陥し穴に見られるような段は検出されなかった。底面はややくびれた長方形を呈しており、小ピットはきわめて小規模で深さもあまりないものが中央に2個穿たれていた。底面にはこのほかに3個ほど小ピットがみられたが性格等は不明である。

本竪穴は他の陥し穴に比してやや小ぶりで平面形も長方形に近い。底面の小ピットも特徴的で2個の小ピットをもつタイプよりも底面中央に1個だけ小ピットをもつ小竪穴31等との関連が予想される。

遺物は検出されなかった。

小 竪 穴　17　(第9図)

EA－6グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒褐色土が堆積しており自然埋没と思われる。壁は底部から緩やかに立ち上がるが、一部明確な段を作る。底部は長方形に近くなる。底部の小ピットは間隔、規模とも他の陥し穴と大差ない。本竪穴は他の2穴タイプの陥し穴に比較して、かなり小型の印象をうけるが底面の規模はそれほど小型ではなく、掘り込みがやや浅いため上面が相対的に小さくなっているようである。

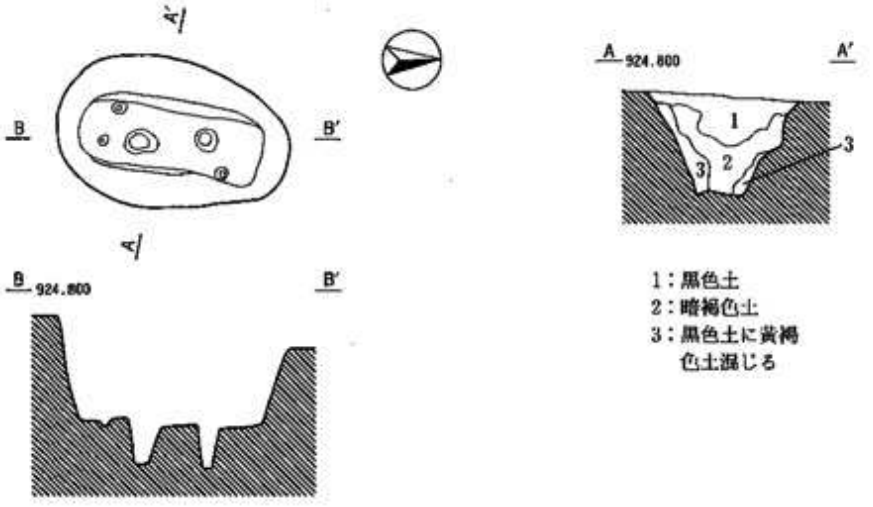
本竪穴は小竪穴52にきわめて近接しており、覆土の状況から本竪穴のほうが新しいと思われる。小竪穴52の掘り直しが本竪穴であると考えることもできるが、本竪穴周辺には多くの陥し穴が密集しており単純な位置関係だけでは判断は難しい。

遺物は中越式と思われる薄手の土器片が少量検出された。

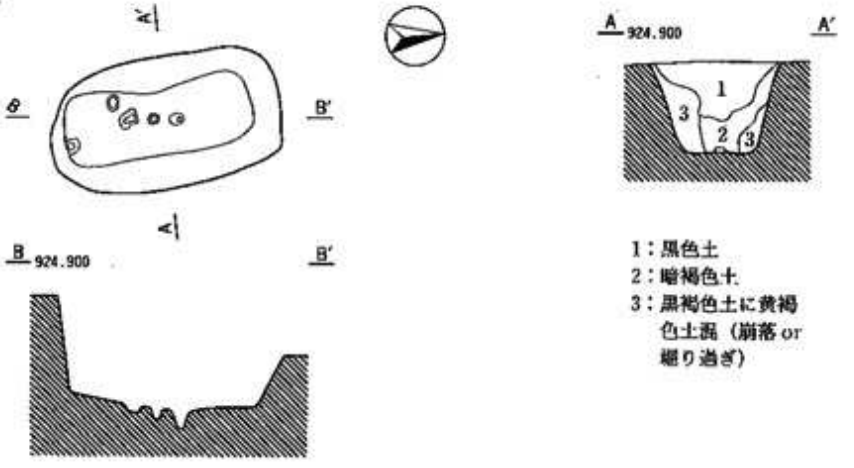
小 竪 穴　18　(第10図・PL18)

EA－6グリッドで検出調査した。覆土は上面に暗褐色土がみられ自然堆積と判断された。壁

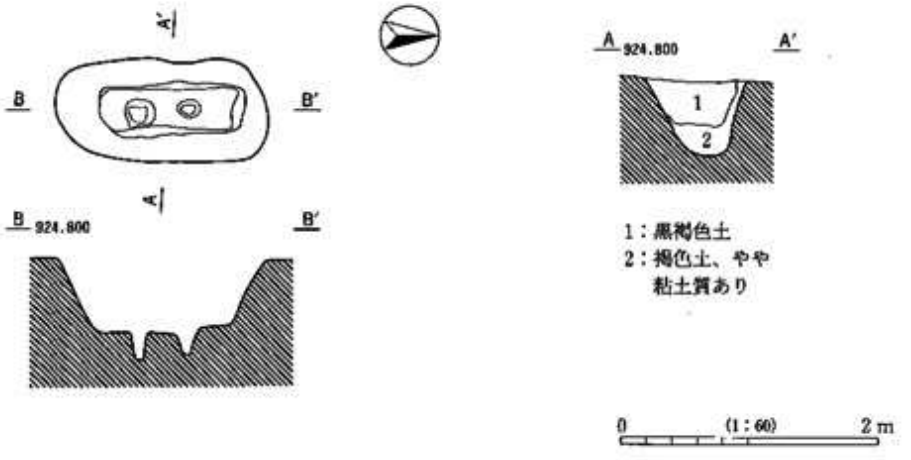
小竪穴15



小竪穴16



小竪穴17



第9図　白ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (3)

は底部からやや緩やかに立ち上がり、明確な段は観察されない。このためか底部も他の陥し穴に比してやや楕円形に近くなる。底部の小ピットは検出を繰り返したがついに確認されず、陥し穴構築途中で放棄されたものか、特殊な機能・用途を持つものなのかよくわからない。本遺跡の陥し穴のなかでもこのようなものは本跡のみで、かなり特異なものであることだけは確かである。

本竪穴は小竪穴24ときわめて近接しており、覆土の状況から本竪穴のほうがやや新しいと思われる。小竪穴24の掘り直しが本跡と考えることも可能だが即断はできない。

遺物は検出されなかった。

小 竪 穴　19　(第10図・PL19)

EA－1グリッドで検出調査した。覆土は上層に厚く黒色土が堆積しており、拳～人頭大の円礫が流れ込んだような状況で観察された。壁は底部から30cm程は急角度で立ち上がり、その後緩やかになるため明確な段が検出された。底面は隅丸長方形に近く、底部の2穴は間隔・規模とも他の陥し穴と大差ないが底面そのものはやや大きい。本竪穴や小竪穴9のように底面が細長く、やや大きいものと小竪穴10・12のようなそれほど細長くないものがあり、それぞれどのような機能・用途を持つものか興味深い。

遺物は薄手の土器片と黒曜石製の両極剥片が検出された。

小 竪 穴　20　(第10図)

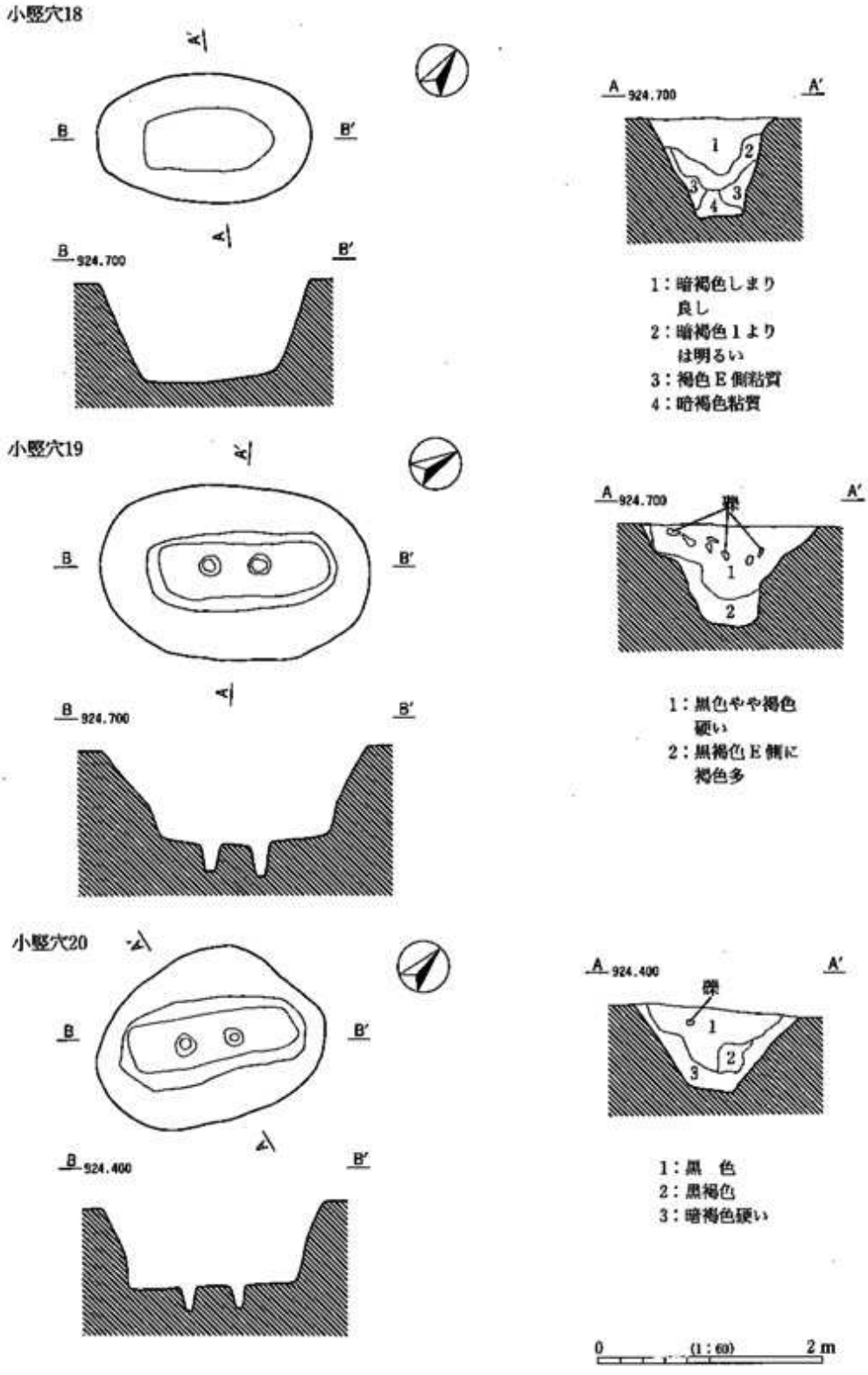
DU－6グリッドで検出調査した。覆土は黒褐色土が上層にみられ、自然埋没の状況を呈していた。壁は底部付近は急角度で立ち上がり、その後緩やかになる。エレベーション図ではやや不明確だがはっきりした段が認められた。底部は長方形に近く、底面の2穴は間隔・規模とも他の陥し穴と大差ないがやや浅い。本竪穴の上面形態はやや短軸が長いが、底面の規模は小竪穴19とほぼ同様であり、壁の崩落により変化したものと思われる。

遺物は検出されなかった。

小 竪 穴　21　(第11図・PL11)

DU－1・6グリッドで検出調査した。覆土は黒褐色土が上層に厚く堆積しており自然埋没の状況を呈していた。壁は底部からやや緩やかに立ち上がり、明確な段をは観察されなかった。底面は胴張りの細長い長方形で、小竪穴19等に比してやや長い程度であるが、小ピットが4個ほぼ等間隔に穿たれている。このピットは規模・深さともよく揃っており、他の陥し穴と同様、逆茂木を立てたものと思われるが、底部に4個のピットを持つものは本跡のみであり何故本跡だけが他の陥し穴と異なる形態をとるのか不明である。時期差とも考えられるが1基だけでは推測の域を出ない。

本竪穴は小竪穴220と殆ど接するほど近接しているが、切り合ってはいない。また覆土の在り



第10図　白ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (4)

方から本竪穴の方が新しいと思われるため、小竪穴220の掘り直しが本竪穴と考えることも可能だが小竪穴220は一般的な２穴タイプのため即断はできない。

遺物は使用痕のある黒曜石片が１点検出された。

小竪穴 22 （第11図）

DU－１グリッドで検出調査した。覆土は黒褐色土が上層に堆積しており自然埋没の状況を呈していた。壁は底部から垂直に近い角度で立ち上がり明確な段を観察されない。底面は長軸が小竪穴20等に比べやや短かいが、短軸は逆に他の陥し穴よりも長めであるためかなり幅広い印象を受ける。また底部の小ピットはやや間隔が広い。

本跡は明確に列をなす陥し穴の北側にやや離れて存在しており、幅広く太短い底面をもつことから細長い底面を持つ陥し穴とはやや異なる時期、あるいは機能・用途を予想させる。

遺物は小型の黒曜石製の楔型石器が１点検出された。

小竪穴 23 （第11図）

DU－１グリッドで検出調査した。覆土は黒褐色土が上層に逆三角堆土となっており自然埋没と思われる。壁は底部から30cm程は急角度で立ち上がり、その後緩やかになる。このため明確な段を作る。底面は細長い長方形に近く、他の陥し穴に比してやや小規模であるが、北側の隅に地山に含まれる礫が顔を出しているため、これに阻まれて狭くなった可能性もある。小ピットはやや小さめではあるが間隔・深さとも他の陥し穴とほぼ同様である。

本跡は形態・規模とも小竪穴17に類似しており、関連が予想される。

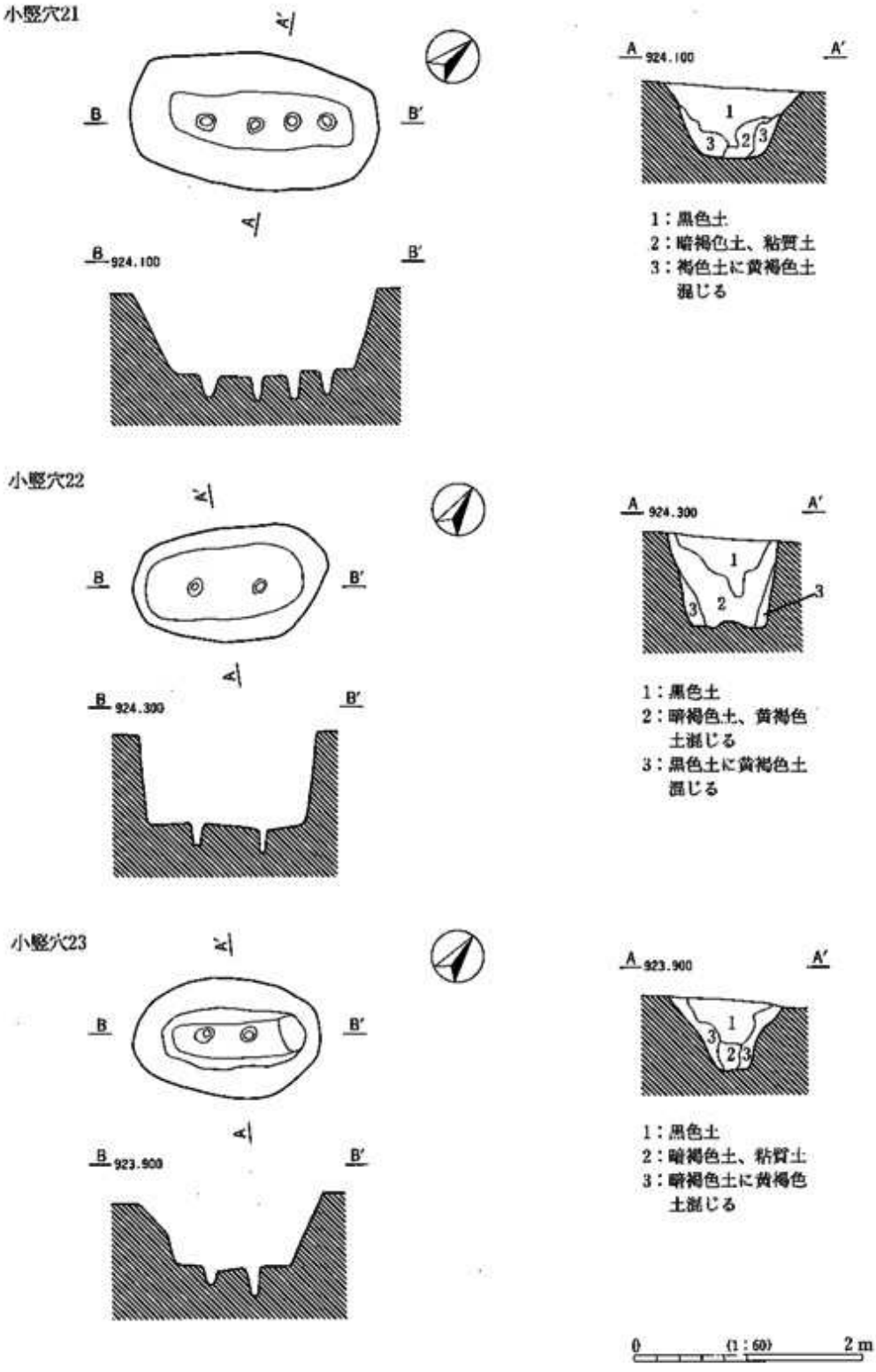
遺物は二次加工のある黒曜石が１点発見されている。

小竪穴 24 （第12図）

EA－６グリッドで検出調査した。覆土は上層に褐色～黒褐色土がみられ中層に黒色土が堆積していた。このような覆土の在り方は他に小竪穴207等でも確認されており、やや人為埋没的な雰囲気もするが判然としない。壁は底部から20cm程は急角度で立ち上がり、その後緩やかになる。このため明確な段を作るが一部はっきりしない部分もある。本竪穴の底面は他の陥し穴に比してかなり整った長方形で、本来的に陥し穴の底面は長方形に掘られていたもののようである。底部の２穴は間隔・規模とも他の陥し穴と大差ない。全体の形状は小竪穴26に近い印象を受ける。

本跡は小竪穴18と非常に近接しており、覆土の状況から本跡が古いと考えられ、本跡が何らかの理由で廃絶された後、これを補完するかたちで小竪穴18が掘られたとも思われるが現時点では全くの想像でしかない。また小竪穴18は底部にピットをもたない特異な陥し穴であり、短絡的に関連を予想すること自体危険である。

遺物は黒曜石製の楔形石器が出土している。



第11図　臼ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (5)

小 竪 穴　25　(第12図)

AU－21・DU－1グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土が堆積しており、自然埋没の状況が明らかであった。壁は緩やかに立ち上がり、明確な段はみられない。このためか底面は長方形にはならず、小ピットも中央に1基穿たれているだけである。本跡同様、底部に一基のみピットをもつものは他に幾つか認められるが平面形が細長い長方形となるものはない。その点でも本跡はやや特異である。

本跡は陥し穴列を離れた斜面部分に位置しており、覆土の状況から陥し穴の中でもやや新しく位置づけられると思われるが、列をなし底部に2個のピットを持つものと機能面でどのような差があるのか興味深い。

遺物は検出されなかった。

小 竪 穴　26　(第12図)

DP－1、DU－1グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒褐色土が堆積しており、自然埋没の状況を呈していた。壁は底部から20cm程は急角度で立ち上がり、その後緩やかになる。このためやや明確な段を作る。底部は細長い長方形に近く、小竪穴24に近い規模である。小ピットはやや小さめで一方のピットには礫が落ち込んでいた。地山のローム層内には礫がかなりみられるものの、遺構覆土には礫は殆ど混入していないため逆茂木を固定するものとも考えられるが判然としない。

本跡は長軸方向がほぼ正東西であり、多くの陥し穴とは全く異なったありかたを示している。また、他の陥し穴に比してかなり掘り込みが浅いことも特徴的である。特殊な機能・用途も予想されるが何ともいえない。

遺物は検出されなかった。

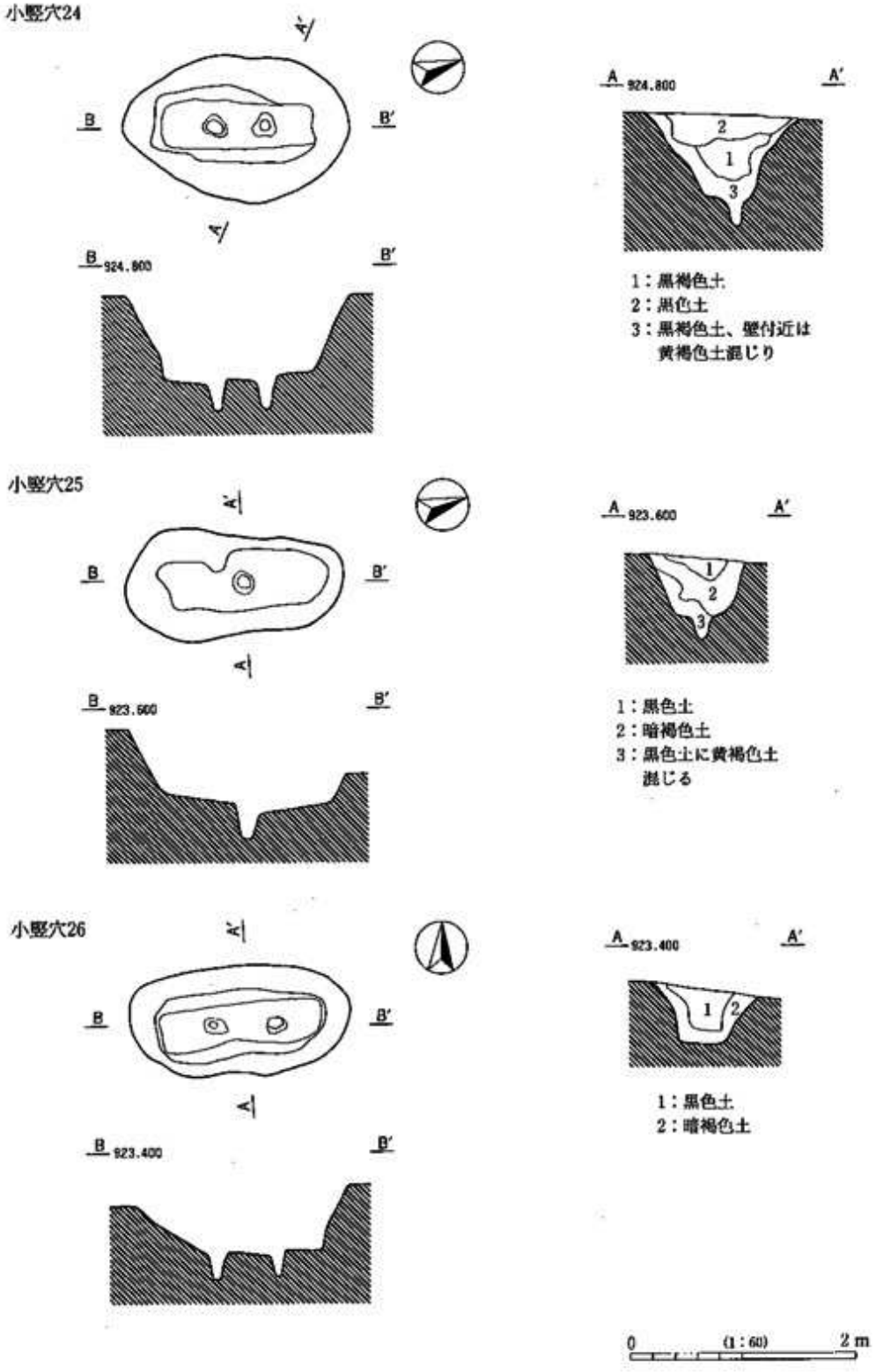
小 竪 穴　27　(第13図・PL 9)

DP－1グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土が逆三角堆土状に堆積しており自然埋没と思われる。壁は底部から30cm程はやや急角度に立ち上がり、その後緩やかになるが、地山に礫が多量に含まれているため整ったラインにはならない。このため段はあまり明確ではなく、底面もかなり不整形である。しかしながら基本的には小竪穴18に見られるような長方形の底面を意識して構築されたと考えられる。底面の小ピットは他の陥し穴と同様の間隔・規模で内部に礫がみられたが、地山に礫が多いため逆茂木固定のためのものかは判断がつかない。

遺物は検出されなかった。

小 竪 穴　28　(第13図)

DK－1グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土が厚く堆積しており自然埋没と思われ



第12図　白ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (6)

る。壁は底部から急角度で立ち上がり、明確な段は観察されなかった。底面はコーナー部がはっきりしないがやや幅広い印象を受ける。やはり長方形を意識して構築されているのであろうか。本竪穴は通常底面中央にある小ピットの位置が極端に壁側に寄っており、当初1穴タイプの陥し穴かと思われたが壁側のピットの掘り込みは非常にしっかりしているためやはり2穴タイプと考えたい。

本跡は列をなす陥し穴群の中でもっとも西に位置しており、本跡以西は小規模な崖となっている。陥し穴群形成時点での地形がどのような情況であったか詳らかでないが、現在のそれと大差ないとすれば列の最末端の小竪穴として他の陥し穴とは異なる機能を付された結果、底部のピットが壁側に作られたとも考えられる。しかし現時点では単なる推測でしかない。

遺物は検出されなかった。

小 竪 穴 29 (第13図)

AK－21グリッドで検出調査した。覆土は殆ど黒ボク土と言えるほど黒い土が上層にみられ自然堆積の状況が観察された。壁は緩やかに立ち上がり、明確な段はみられない。したがって底部もはっきりした長方形にはならない。しかし図示してはいないが地山に一抱え近い礫が顔を出しているためこれらに阻まれて形状がくずれたものと考えている。底部の小ピットは斜めに掘られているがこれも同様の理由によって斜めにならざるを得なかったと思われる。

本跡は全小竪穴のなかで最も西に位置し、陥し穴群の最末端となっているが小竪穴28のような特異な形態・施設は観察されない。覆土の情況等からは小竪穴28との明確な時期差は読み取れないものの列をなす陥し穴群とはやや離れているため、列をなすものとは異なった機能を持っていた可能性もある。

遺物は検出されなかった。

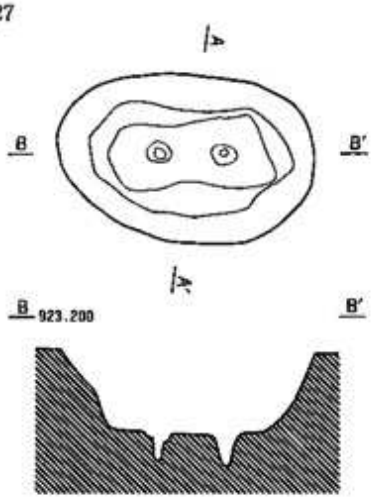
小 竪 穴 30 (第14図)

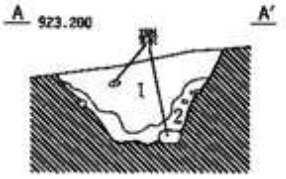
EK－6グリッドで検出調査した。覆土は黒色土が逆三角堆土状に観察されるため自然埋没と思われる。壁は底部から緩やかに立ち上がり、明確な段は観察されないがこれは本竪穴の掘り込みがかなり浅いことによるのかも知れない。底部はかなり不整形であり、小竪穴29のような地山の礫はみられないため本来的にこのような形態で構築されたとも考えられるが、掘り込みが浅いこともあり判然としない。また底部の小ピットもやや壁側に寄っており、メインの2穴以外に3個のピットが穿たれていることも特徴的である。

本竪穴のような形態・規模を持つ陥し穴は臼ケ原遺跡では他に確認されておらず、かなり特異な存在である。

遺物は検出されなかった。

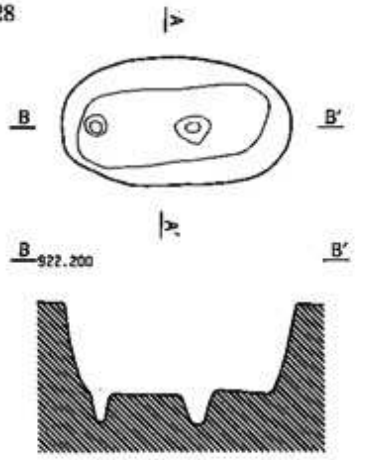
小竪穴27

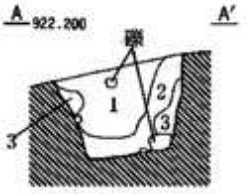




1：黒色土
2：暗褐色土

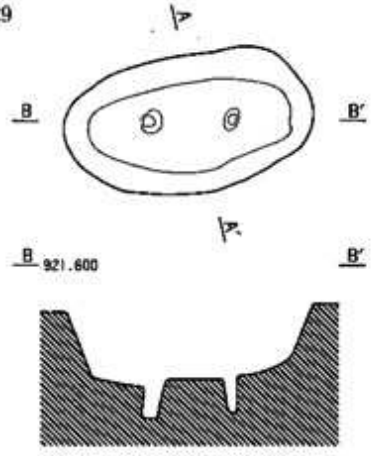
小竪穴28

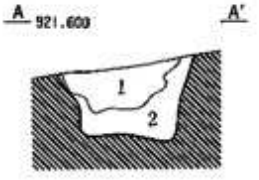




1：黒色土に黄褐色土少々混じる
2：暗褐色土
3：黒色土に黄褐色土混じる

小竪穴29





1：黒色土
2：黒褐色土（黒褐色土に黄褐色土混じる）

0 (1：60) 2 m

第13図　白ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (7)

小 竪 穴　31　(第14図)

EK－6グリッドで検出調査した。覆土は黒色土が上層にみられ自然埋没の状況が観察された。壁は底部から急角度で立ち上がり明確な段はみられない。短軸方向の長さは他の陥し穴と大差ない長さだが、長軸方向は半分程度しかなく底部の小ピットも1基のみである。また平面形がほぼ長方形であるのに伴い底面もかなりはっきりし長方形である。このため他の陥し穴に比較してサイズ・形態とも大きく異なっているが、これが機能・用途の差なのか単なる時期差なのか判然としない。しかしながら本遺跡のメインとなる列をなす陥し穴群には本跡の様なタイプは見られないため機能・用途の差を想定したほうが良さそうである。なお本跡に近い形態のものに小竪穴200等があり関連が予想される。

遺物は検出されなかった。

小 竪 穴　32　(第14図・PL 8)

EK－1・6グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土が堆積しており、自然埋没と思われるが中層に不自然なロームブロックがみられるため、人為的に底面を狭めようとした可能性もある。壁は底部からほぼ直角に立ち上がり、段はまったく観察されない。このため底部はかなり整った長方形でほぼ水平である。小ピットの間隔はやや広めであるが他の陥し穴との差は見られない。2基の小ピットの間に小ピットが1基穿たれているがあまり深くなく、逆茂木を立てたものとは思われない。

本跡は列をなす陥し穴群からは離れており、列をなすものの軸方向がかなりそろっているのに対し、本跡はやや方向が異なっている。また掘り込みがやや浅い印象を受ける。これらの特徴は列から離れた陥し穴にはいくつか観察されるが、どのような意味を持つのか興味深い。

遺物は検出されなかった。

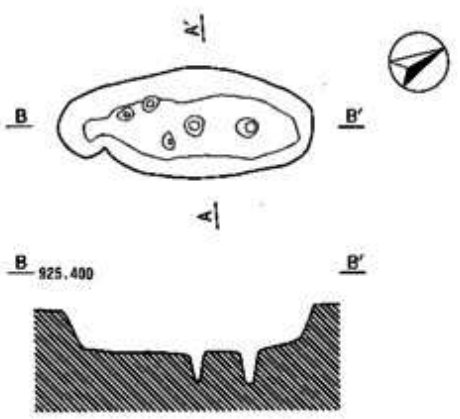
小 竪 穴　39　(第15図)

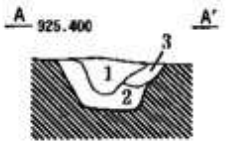
FA－6グリッドで検出調査した。覆土は黒色土が逆三角堆土状に観察されるため自然埋没と思われる。壁は底部から緩やかに立ち上がり、はっきりした段は見られないが本跡付近は地山に礫が多く含まれているため本来の形態からかなりズレている可能性が高い。また底面もかなり不整形である。したがって基本的には小竪穴18に見られるような長方形の底面と垂直にちかい壁を意識して構築されたと考えられる。底部のピットも地山の礫が多いため浅く、不定形である。

本跡は列をなす陥し穴群からは大きく隔たっており、軸方向も異なっている。またかなりの斜面に構築されているが、列をなすものとどのような差異、あるいは関連をもつものなのだろうか。

遺物は検出されなかった。

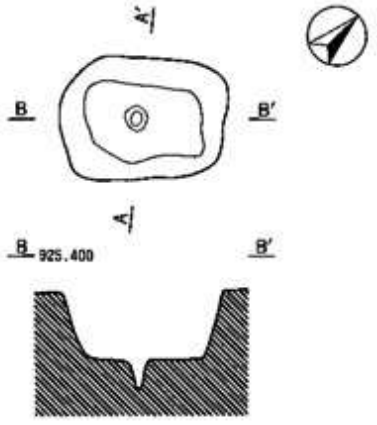
小竪穴30

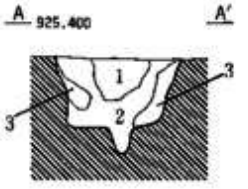




1：黒褐色土、褐色部分多い
2：暗褐色土、やや明るい
3：褐色土

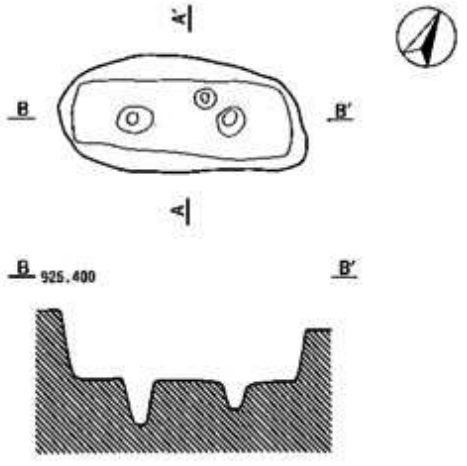
小竪穴31

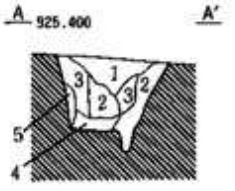




1：黒褐色土、黄色い粒少々有り
2：黒褐色土、明るい
3：明るい褐色土

小竪穴32





1：黒褐色土、黒色多め
2：黒褐色土、褐色多い
3：明るい褐色土、少し黒色有り
4：暗褐色土、硬い
5：赤　土

0 (1：60) 2 m

第14図　白ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (8)

小 竪 穴　40　(第15図)

EK－１１グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土の逆三角堆土が認められ、自然堆積が明瞭。壁は底部から30cm程は急角度で立ち上がり、その後緩やかになる。このため段はきわめて明確で、底部はやや歪んではいるものの細長い長方形となる。底面のピットは他の陥し穴とほぼ同様の間隔・規模だが片方がやや浅い。

本跡に近い規模の陥し穴に小竪穴23があり、列をなす陥し穴には底面の規模に明確な大小があるようであるが、これについては小考察の項で述べる。

遺物は検出されなかった。

小 竪 穴　41　(第15図)

EF－１グリッドで検出調査した。覆土は上層に暗褐色土が逆三角堆土状に観察され自然埋没が明瞭。壁は底部から30cm程は急角度で立ち上がり、その後緩やかになる。このため段はきわめて明確で、底部もしっかりした長方形の底面を呈している。底面のピットは間隔・規模とも他の陥し穴に比してはっきりした特徴はみあたらない。上記の小竪穴40とは形態・規模ともかなり類似しているが本跡のほうがやや大きい。しかしながら列をなす陥し穴群全体からみると明らかに小型のグループに分類される様である。

遺物は検出されなかった。

小 竪 穴　42　(第16図)

EF－６・11グリッドで検出調査した。覆土は暗褐色土の単層で下部にややローム粒が混じる程度である。壁は底部から30cm程はやや急角度で立ち上がり、その後緩やかになる。このため段は明確であるが地山に礫が多く、これにより一部段のはっきりしない部分もみられた。底部はやや不整形ながら基本的には長方形の底面を意識して構築されたと考えられる。底面のピットは他の陥し穴とほぼ同様の間隔・規模である。

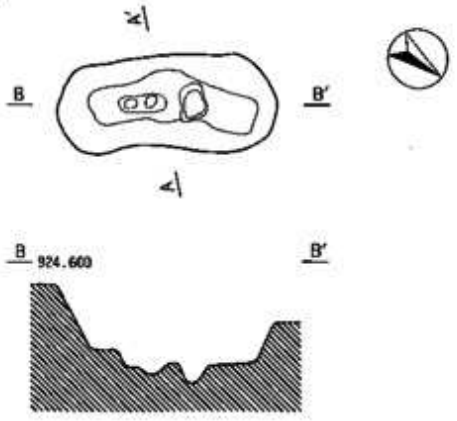
本跡は小竪穴11と切り合わんばかりに近接しているが、覆土の状況から本跡が古いと考えられる。この様な在り方は小竪穴21と220、同じく小竪穴９と226でも認められ、古くなった陥し穴の脇に新しい陥し穴を掘ったものと考えたい。このことが結果的に列状配置を形成したとも思われるが今のところ推測の域を出ない。

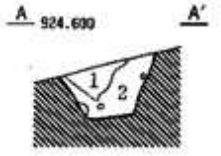
遺物は中越式と思われる薄手の土器が１点検出されている。

小 竪 穴　43　(第16図)

EF－６グリッドで検出調査した。覆土は褐色～暗褐色土が上層にみられた。壁は底部から緩やかに立ち上がり、明確な段は観察されない。このためか底面は長楕円形に近い形態となる。底面の小ピットは４個検出されたが小竪穴21でみられたような等間隔に並んだものではなく、大き

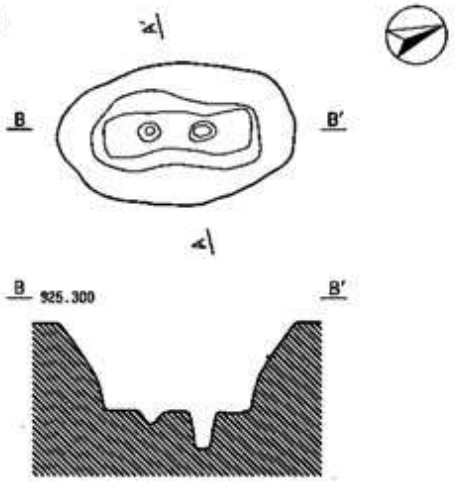
小竪穴39

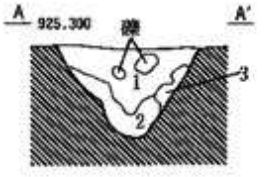




1：黒色土
2：暗褐色土に黄褐色土混じる

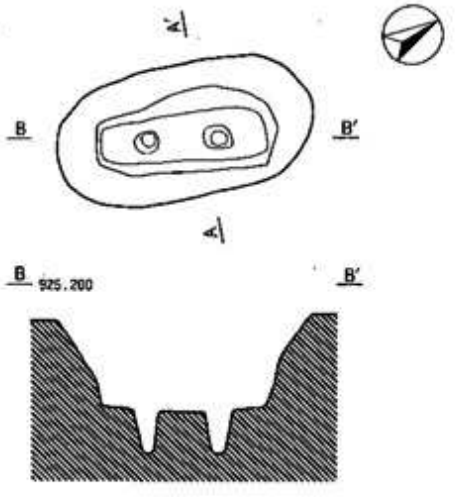
小竪穴40

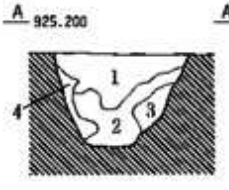




1：黒色土
2：暗褐色土に黄褐色土混じる
3：褐色土に黄褐色土混じる

小竪穴41





1：暗褐色土
2：暗褐色土に黄色土少々混じる、粘質土
3：黄褐色土
4：黄褐色土に黄色土混じる

0 (1：60) 2 m

第15図　臼ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (9)

さもそろわず、基本的な2穴タイプに別の小ピットが付属したか、小ピットの掘り直しと考えたい。

本跡は小竪穴11・42と近接しており、本跡を含めた3基でひとつのグループを形成しているようにも見える。本跡は覆土の状況から小竪穴11より古いと考えられるが、小竪穴42との時期差については明確でなく、東から小竪穴10・43・24・58がほぼ等間隔に並んでいるため、この列が基本となってより南側に陥し穴が列をなして掘られたとも思われる。

遺物は黒曜石製の楔型石器が1点発見されている。

小竪穴 52 (第16図)

EA－6グリッドで検出調査した。覆土は黒色～暗褐色の三角堆土が認められ、自然堆積が明瞭。壁は底部から30cm程は急角度で立ち上がり、その後緩やかになる。このため段はきわめて明確で、底部もしっかりした長方形を呈している。底面のピットは間隔・規模とも他の陥し穴に比してはっきりした特徴はみあたらないが、底面に対して小ピットがやや壁側に寄っている。

本跡は小竪穴17と大変近接しており、底面の形態・規模も類似しているが、掘り込みの深さがやや異なり、覆土の状況も差があるためかなりの時間差が想定される。

遺物はやや薄手の無紋土器と青色のチャート製楔形石器が少々検出された。

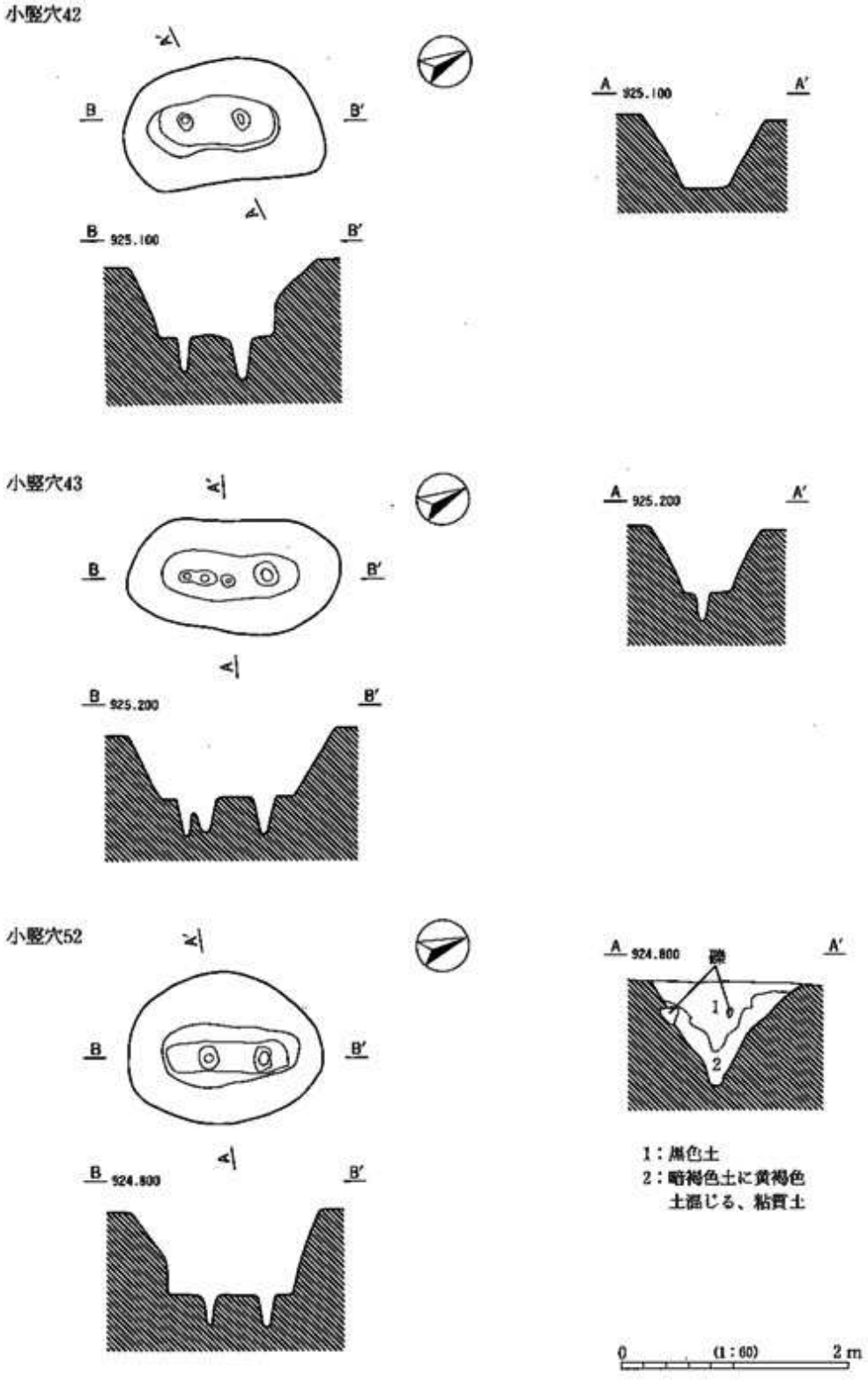
小竪穴 55 (第17図)

DU－6グリッドで検出調査した。覆土は上層に検出面の色調に近い褐色土が認められた。壁は底部から緩やかにたちあがり、段はみられない。このためか底部はくずれた長楕円形となる。底面のピットは間隔・規模とも他の陥し穴に比してはっきりした特徴はみあたらない。本跡は前述のとおり地山との色調の差がわずかなため検出がむつかしく、サブトレンチの断面観察でようやく陥し穴と確認できた。このことは本跡の掘り込みが他の陥し穴に比してやや浅いことも起因していると思われるが、やはり覆土に黒ボク土がみられる小竪穴よりも時期的に古いとも考えられる。このような検出困難な陥し穴は列をなす陥し穴の中にのみみられ、より北側の列がはっきりしない部分には全くみられない。このことは本遺跡における陥し穴展開の一端を示していると思われるが、これについては別に述べる。

遺物は検出されなかった。

小竪穴 58 (第17図)

DU－6グリッドで検出調査した。覆土は上層に検出面の色調に近い褐色土、中層に黒褐色土が分布しており小竪穴24に類似した状況であった。壁は底部から30cm程は急角度で立ち上がり、その後緩やかになる。このため段はきわめて明確で、底部もしっかりした長方形の底面を呈している。底面のピットは間隔・規模とも他の陥し穴に比してはっきりした特徴はみあたらないが3



第16図　臼ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (10)

個めのピットが南側のピットの脇に穿たれている。このピットは掘り直しまたは逆茂木の支柱と考えたい。

本跡は列をなす陥し穴の中でも北側の間隔の広い列に位置しているが、上記の小竪穴24も同様に北側列に属しており何らかの関連が予想される。

遺物は検出されなかった。

小竪穴 60 (第17図)

DF－1、DU－1グリッドで検出調査した。覆土は暗褐色土が上層に分布しており自然埋没の状況を呈していた。壁は緩やかに立ち上がり、明確な段はみられない。このためか底部は歪んだ長楕円形を底面を呈している。底面のピットは間隔・規模とも他の陥し穴とはきわめて異なり、やや間隔の広い小さなピットが西壁寄りに穿たれている。ピットの深さは他の陥し穴と大差ない。

本跡は列をなす陥し穴群とはやや離れているものの、特に異なった位置にあるわけではなく何故小ピットのあり方だけが他のそれと違うのか謎である。

遺物は検出されなかった。

小竪穴 200 (第18図)

EU－6グリッドで検出調査した。覆土は黒褐色土が上層に薄く堆積しており中層には褐色土が厚くみられ、他の陥し穴とはかなり異なったあり方である。壁は急角度で立ち上がり、明確な段はみられない。底部は隅の丸い長方形を呈し、底面のピットは底面中央に1個と壁側に1個穿たれている。双方とも同様の規模・深さであるが壁側のものはやや不整形であるため基本的には小竪穴うあ・201のような1穴タイプの小型陥し穴と考えている。

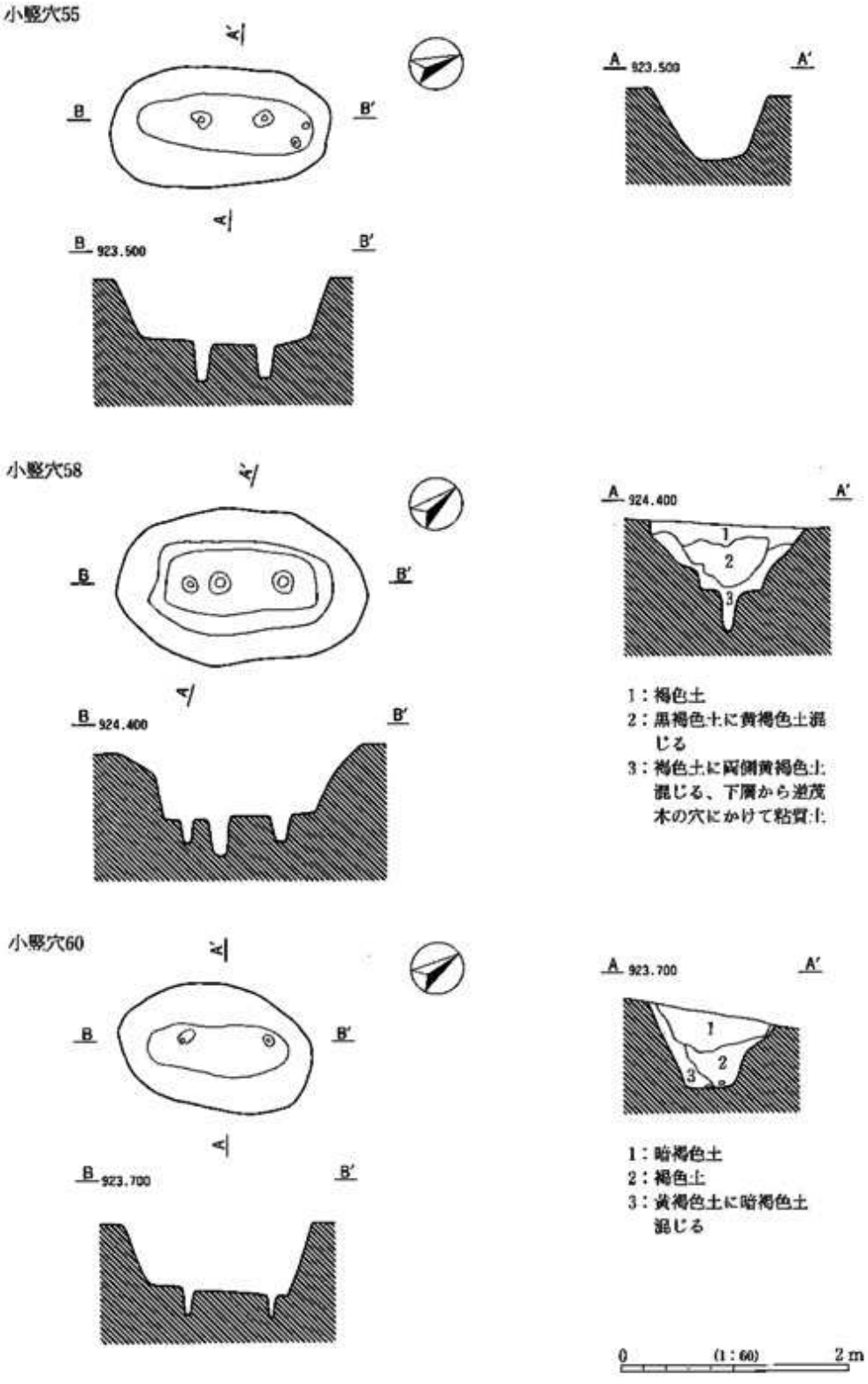
本跡が分布する遺跡東側は陥し穴そのものの数が少ないうえに村道によって未調査の部分も大きいが、列をなす陥し穴群は村道の南側に連続すると思われ、本跡は列からかなり離れた北側に分布することになる。本跡や小竪穴31のような1穴タイプの小型陥し穴は他の2穴タイプのものとどのような機能・用途を持つものか、あるいは単なる時期差なのか興味深い。

遺物は検出されなかった。

小竪穴 201 (第18図・PL11)

FF－11グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土が厚く堆積しており自然埋没と思われる。壁は緩やかに立ち上がり、明確な段はみられない。底部はやや歪んだ楕円形を呈し、底面のピットは底面中央に1個穿たれている。本跡は小竪穴31や200に比べてやや大きいが壁が緩やかな点を考えると、やはり同程度の規模であった可能性が高い。

本跡は小竪穴200に比較して、より列をなす陥し穴群に近いと言えそうであるが、直接の関連は薄いようである。



第17図　白ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (1)

遺物は検出されなかった。

小 竪 穴　202　（第18図）

EU－11グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒褐色土が堆積しており自然埋没と思われる。壁は底面から20cm程は垂直に近く、その後やや傾くが急角度で立ち上がる。このような壁の場合、かなり整った長方形の底面を持つことが本遺跡では一般的だが、本小竪穴ではややサイズが小ぶりなためか長楕円に近い形態となる。底面の小ピットはやや壁寄りに２個穿たれているが、一方のピット内には拳大の礫が数個入っていた。本跡周辺の地山には礫が少なからず含まれているが、ピット内にこれだけの礫が集中することは考えにくく、逆茂木を固定するための礫ととらえたい。

本跡が分布する村道南側は陥し穴の数が少ないが、村道北側の列をなす陥し穴の方向から本跡も列に加わるもののひとつと考えられる。しかし村道下の遺構の分布状況がやや判然としないこと、村道北側のような密集を示さないことなどから列そのものの存在も必ずしも明確でない。

遺物は検出されなかった。

小 竪 穴　203　（第19図）

FA－21、FF－21グリッドで検出調査した。覆土は黒褐色土が逆三角堆土状に観察されるため自然埋没と思われる。壁は底面から20cm程は急角度で立ち上がり、その後緩やかになる部分もあるがあまり明確でない。このため段ははっきりせず、底部の形態も歪んだ長方形となる。底面の小ピットは底面中央に１個と壁側に１個穿たれており、壁側のものはやや不整形かつ掘り込みも浅いため逆茂木を立てたものとは思われない。すると１穴タイプの陥し穴となるが小竪穴全体の形態は典型的な２穴タイプで小竪穴200のような１穴タイプとは大きく異なっている。やや近いと思われるものに小竪穴25があるがこれは斜面に位置していて形態がくずれているため直接比較することはできない。

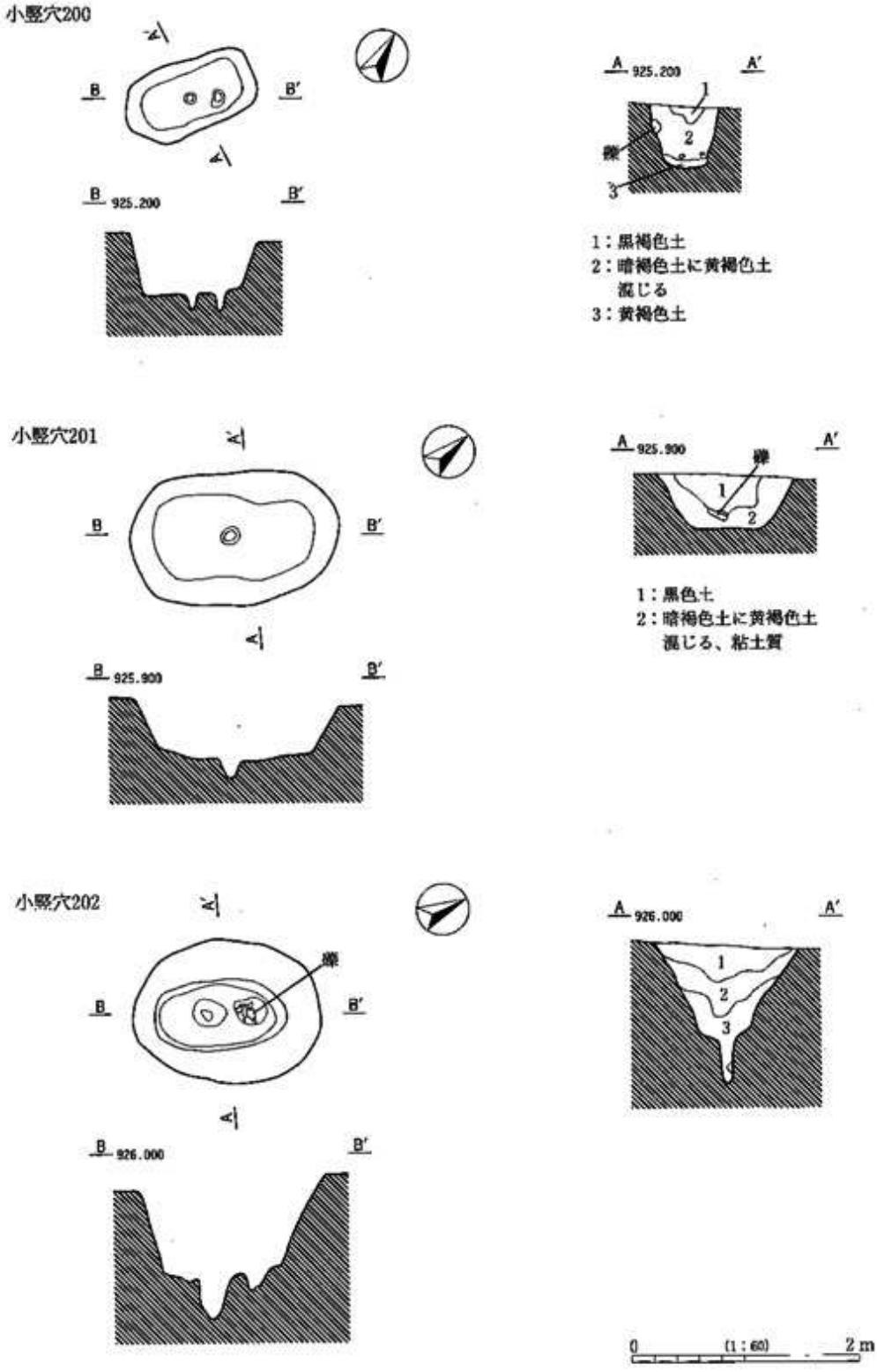
いづれにせよ楕円形タイプの陥し穴にも１穴のみのものがあるらしいということであろう。

遺物は検出されなかった。

小 竪 穴　204　（第19図）

FF－21グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土が逆三角堆土状に観察され自然埋没が明瞭。壁は底面から20cmほどはほぼ垂直に立ち上がり、その後緩やかになる。このため非常に明確な段が観察され、底部は隅の丸い長方形を呈するが地山の礫によってやや不整形な部分もある。底面のピットはやや壁寄りであるがしっかりと掘り込まれており、他の２穴タイプの陥し穴と同様の形態・規模である。

本跡は今回調査された陥し穴のなかでは最も東に位置しており、本跡東側にははっきりした遺構は分布しない。しかしながら過年度に調査された村道部分にはいくつか陥し穴がみられるため、



第18図　臼ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (12)

陥し穴の列はやや蛇行しながらさらに東に続くとも思われるが、現時点では推測の域を出ない。

遺物は明確な使用痕をもつ黒曜石片が検出されている。

小竪穴 206 (第19図)

FA－6・21グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土が逆三角堆土状に観察され、自然埋没が明瞭。壁は底面から急角度で立ち上がり、その後やや緩やかになる。このため段はあまり明確でない。底部は地山に礫が多いため不整形であるが、おおむね長楕円形を呈する。底面の小ピットは底面中央に2個と壁側に2個穿たれているが、壁側のものは浅く形態も整わないため補助的な施設と考えている。

遺物は検出されなかった。

小竪穴 207 (第20図・PL7)

EU－16グリッドで検出調査した。覆土は上層に黄褐色土がレンズ状にみられ下層に褐色土が堆積していた。壁は急角度で立ち上がり、明確な段はみられない。底部は長楕円形を呈し、底面のピットはやや壁寄りに2個穿たれている。

本跡は検出が非常に難しく、数回精査を繰り返した揚げ句ローム層まで掘り下げた後、ようやく輪郭が現れた。また覆土も上記のとおり例を見ないもので、検出段階では黄色いローム面にドーナツ状の黒褐色部分が出現するという状況であった。覆土の状況から自然埋没か人為埋没かの判断は極めて困難であり、即断は禁物であるが本跡のような例が確認されている以上、今後陥し穴の人為埋没も検討しなければならないだろう。

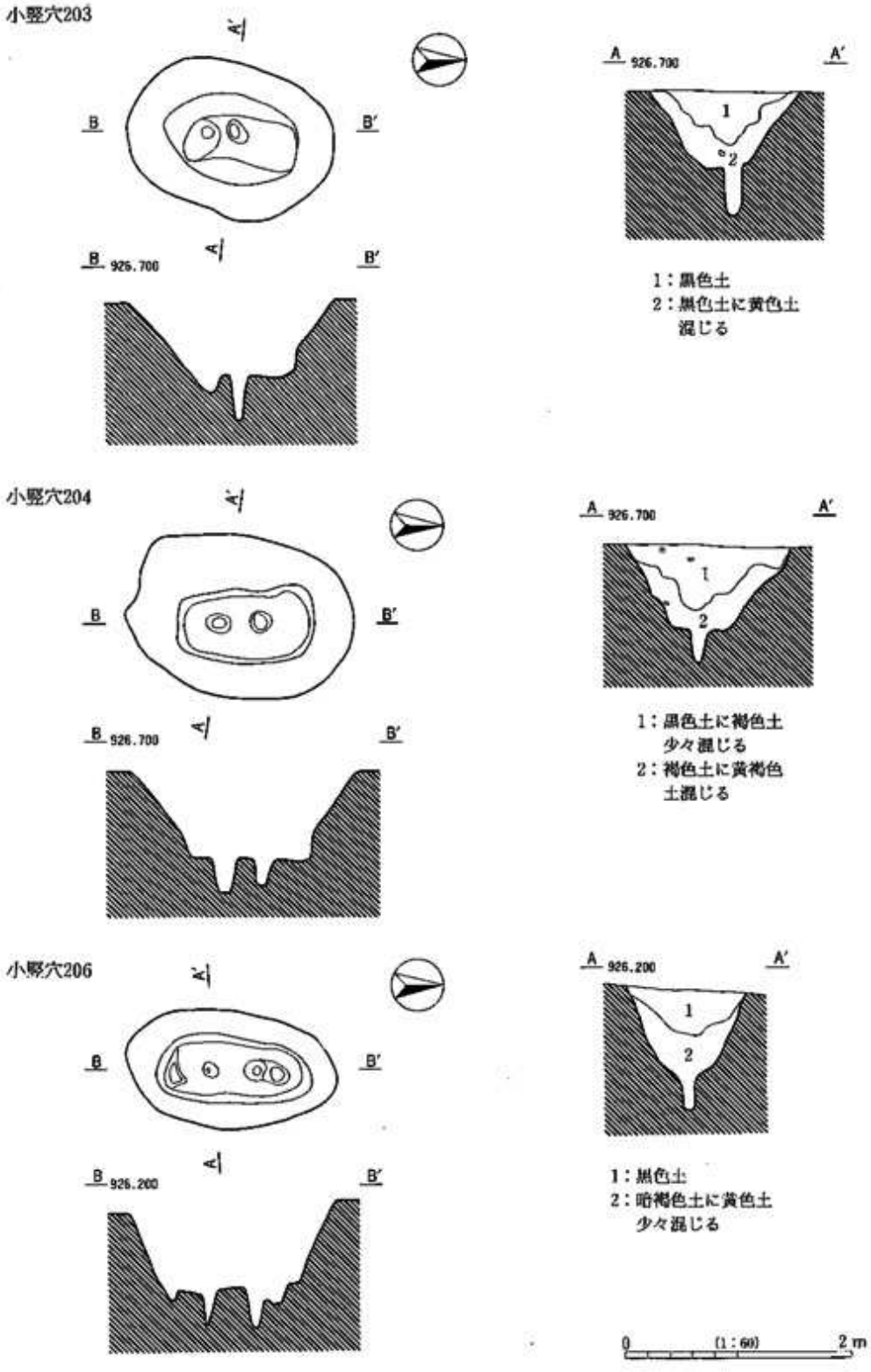
遺物は検出されなかった。

小竪穴 220 (第20図)

DU－6グリッドで検出調査した。覆土は上層に黄褐色土みられ中層に黒褐色土が厚く堆積していた。したがって前記の小竪穴207に近い状況であるが、上層の黄褐色土はややぼんやりしたもので中層との境界もはっきりしない。壁は底面から30cm程ほぼ垂直に立ち上がり、その後極端に緩やかになる。このため非常に明確な段が形成されており、結果的に上面に比べて大変小さな底面を持つことになる。底面は他の陥し穴と同様、隅の丸い長方形を呈し、ピットが2個穿たれている。

本跡は小竪穴21と切り合う寸前のように近接しているが、覆土の状況から本跡のほうが古いようである。本跡が規模の割りに小さな底面をもつことは壁が崩落した結果、上面が広がったものと考えられ隣の小竪穴21が壁に明確な段を持たないことから、本跡が長期に亙って使用されたのち放棄され、その代替として小竪穴21が本跡に接するように掘られたと考えることもできる。

遺物は検出されなかった。



第19図　円ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (13)

小 竪 穴　222　（第20図）

DP－6グリッドで検出調査した。覆土は黒褐色土が上層に堆積しており、この中に拳大の礫がみられた。壁は底面から40cm程度急角度に立ち上がり、その後緩やかに立ち上がる。このため明確な段が形成され、底部は歪んだ長方形に近い形態となる。底面のピットはやや壁寄りに2個穿たれている。

本跡は列をなす陥し穴群の南に位置する唯一の陥し穴で、その機能・用途が注目されるが形態的に特に異なった点は見当たらず、軸方向が列をなすものと違っている点が目立った所だろうか。列を離れた陥し穴には軸方向のそろわないものが多いが、それは列の北側での状況で、南側には陥し穴自体本跡以外に存在しない。列の南側がどのように利用されていたか非常に興味あるところである。

本跡から遺物は検出されなかった。

小 竪 穴　223　（第21図）

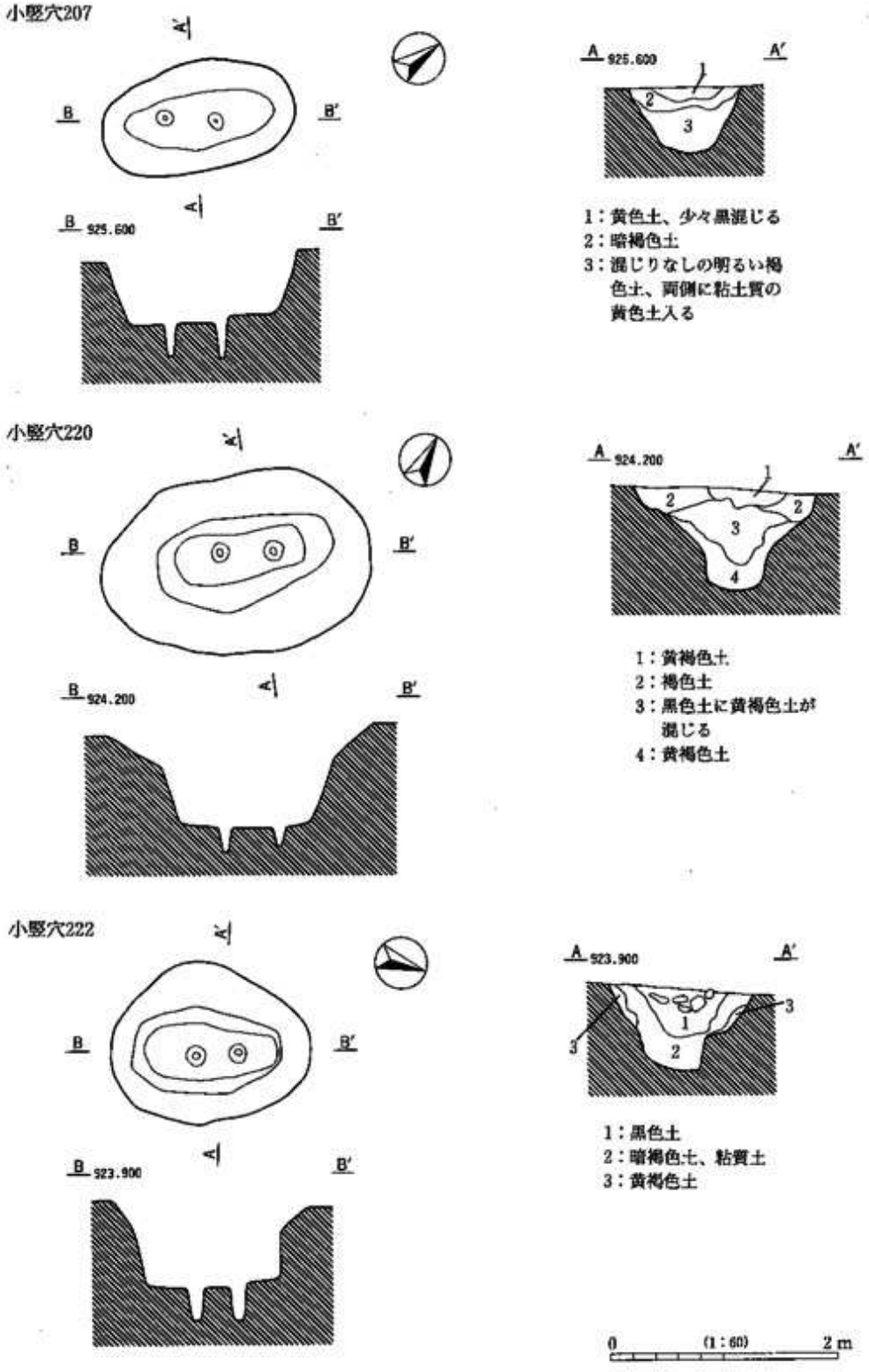
DU－6グリッドで検出調査した。覆土は上層には暗褐色土、中層には黒褐色土が堆積しており自然埋没の状況が明確だが、上層の褐色土がやや気になる。壁は底面から40cm程ほぼ垂直に立ち上がり、その後緩やかになる。このためきわめて明確な段が観察され、形態的には前記の小竪穴220に近い状況となる。底部は隅の丸い長方形を呈し、底面のピットは底面に4個確認された。しかし両端の2個は明らかに掘り込が浅いうえに底部自体あまり広くなく、小竪穴21のような4穴タイプの陥し穴とは断言できない面もある。また、北から2番目のピットに拳大の礫がみられたが、本跡付近の地山には人頭大の礫が混じることから逆茂木の固定にかかわるものかどうかは不明である。

本跡は小竪穴20および58と近接しており、本跡を含めた3基で一つのグループを形成しているようにも見える。覆土の状況から本跡が最も古く、次いで小竪穴58、さらに小竪穴20と新しくなると思われるが、これが一連の陥し穴の掘り直しによるものなのかは列の形成もからんで判然としない。

遺物は青色チャート製の楔形石器が1点検出された。

小 竪 穴　224　（第22図）

EA－6、EF－6グリッドで検出調査した。覆土は上層では検出面の色調に近い土、中層に黒褐色土が堆積しておりやや特異な在り方を示していた。壁は底面から30cm程急角度で立ち上がり、その後緩やかになる。このためかなり明確な段が認められ底面は長楕円形を呈する。底面の小ピットは2個穿たれているが、基盤に人頭大の礫が含まれているため、これに阻まれて形態ははっきりしない。双方のピットから拳大の礫が検出されており、逆茂木を固定するために入れたものとも考えられるが、上記の理由から判然としない。



第20図　白ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (10)

本跡は小竪穴12と近接しており、覆土の状況から本跡のほうが古いと考えられる。小竪穴21と220のように陥し穴の掘り直しによる近接の可能性が高いが、無論確証はない。

遺物は口縁部を折り返した薄手の土器片、黒曜石・チャート製の楔形石器が少数検出された。

小 竪 穴　225　(第22図)

EA－6、EF－11グリッドで検出調査した。覆土は検出面の色調に酷似した褐色土とやや明るい褐色土からなり自然埋没と思われる。壁は底面から30cm程急角度で立ち上がり、その後緩やかになる。このためかなり明確な段が認められ、底面は長楕円形を呈する。底面の小ピットは3個穿たれているが、壁際のものは小型で掘り込みも浅いため逆茂木を立てたものとは思われず、基本的に他の陥し穴と同様2穴タイプのものと考えたい。

本跡は小竪穴9と非常に近接しており、覆土の状況から本跡のほうが古いと考えられるが、周辺には小竪穴10・41等が分布しているため、単純な陥し穴の掘り直しによる近接とは思えない面もある。

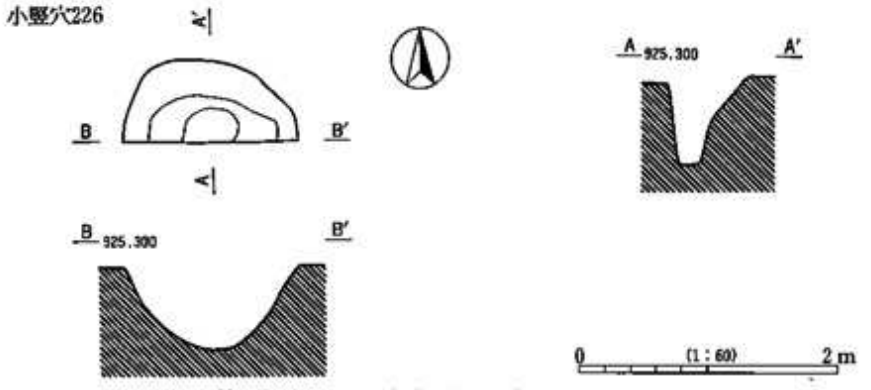
遺物は検出されなかった。

小 竪 穴　226　(第22図)

EK－11グリッドで検出調査した。覆土は暗褐色土が上面に認められたが、遺構のほとんどが村道にかかっているため下層の状況は明らかでない。壁は底面から30cm程急角度で立ち上がり、その後緩やかになる。このためかなり明確な段が認めらるが、上記の理由により底面の形態・小ピットの有無等は不明である。

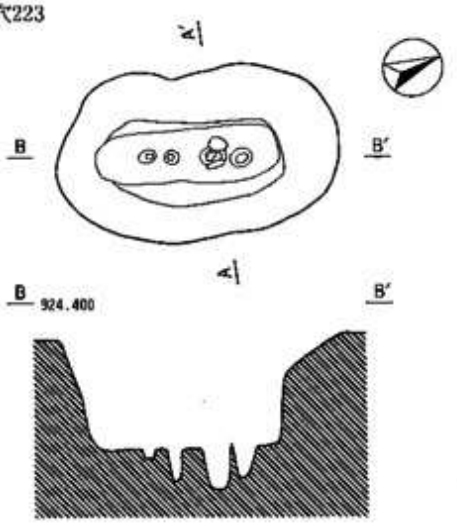
本跡の東側は村道と小建物によって破壊されており、遺構の分布状況は明らかでないが、過年度調査でも本跡に近接して連続するような陥し穴は検出されていない。また村道南側では陥し穴がみられるものの北側のような密集した在り方ではない。村道部分を調査できなかったことは残念であるが、本跡を境に陥し穴の在り方が大きく変化するように思えてならない。

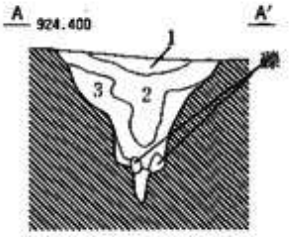
遺物は検出されなかった。



第21図　白ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (15)

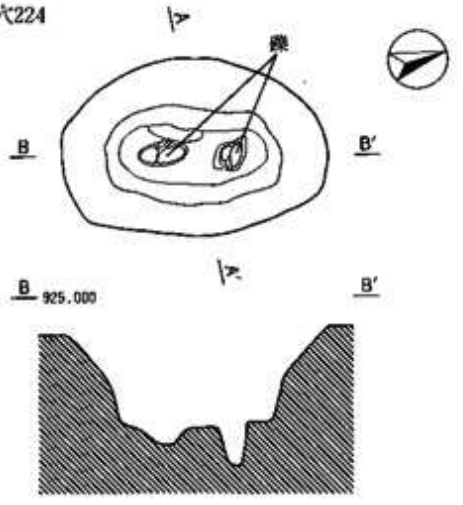
小竪穴223

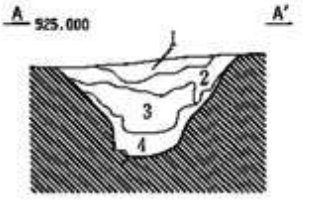




1：褐色土
2：黒褐色土、少々
　黄色土混じる
3：黄褐色土

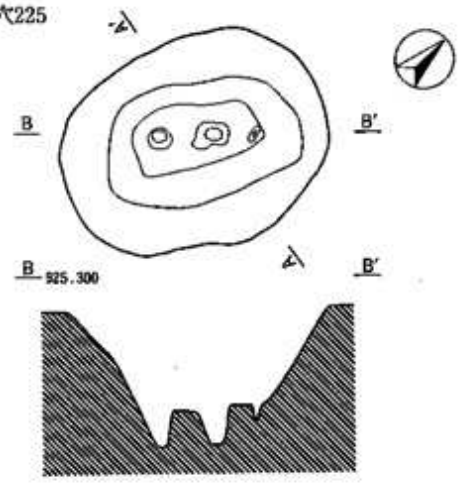
小竪穴224

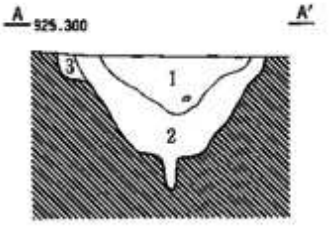




1：褐色土
2：暗褐色土
3：黒褐色土、少々
　黄色土混じり
4：茶褐色土均一

小竪穴225





1：暗褐色土
2：暗褐色土に褐色
　土混じる
3：褐色土

0　(1：60)　2 m

第22図　臼ヶ原遺跡 陥し穴実測図 (15)

(2) 小 竪 穴

検出された小竪穴のなかで陥し穴としたもの以外を本項で扱う。形態は様々で1例を除き、切り合っているものはない。覆土の色調にはややばらつきがあるが、概してはっきりと検出されるものが多い。陥し穴に比して小型で掘り込みも浅いものが殆どである。

小 竪 穴 33 (第23図)

EF－1グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土がみられるため、検出は非常に容易であった。断面形態はタライ状で底面に2個小ピットが穿たれている。このうち中央付近のものは40cm程の深さがあり注目される。

遺物は薄手の土器片と二次調整が施された黒曜石製の楔形石器が発見されている。

小 竪 穴 34 (第23図)

BA－21、EA－1グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土薄く堆積しており、検出は非常に容易であった。断面形態は深いタライ状で底面中央小ピットが穿たれている。このため陥し穴の可能性も考えられるがやや小型のため本項でとりあげた。

遺物は発見されなかった。

小 竪 穴 35、36 (第23図)

AP－21グリッドで検出調査した。双方とも覆土は上層に漆黒の黒色土がみられるため検出は非常に容易であった。断面形態は皿状で、掘り込みが浅いこともあってか底面はやや明確でない。小竪穴35・36は数10cmを隔てて隣り合っており、形態にも殆ど差はなく、一対で機能していた可能性が高い。同様の規模をもつ小竪穴は幾つか検出されているが覆土の状況・深さ等が異なっており、また対をなすものはみられない。

遺物は発見されなかった。

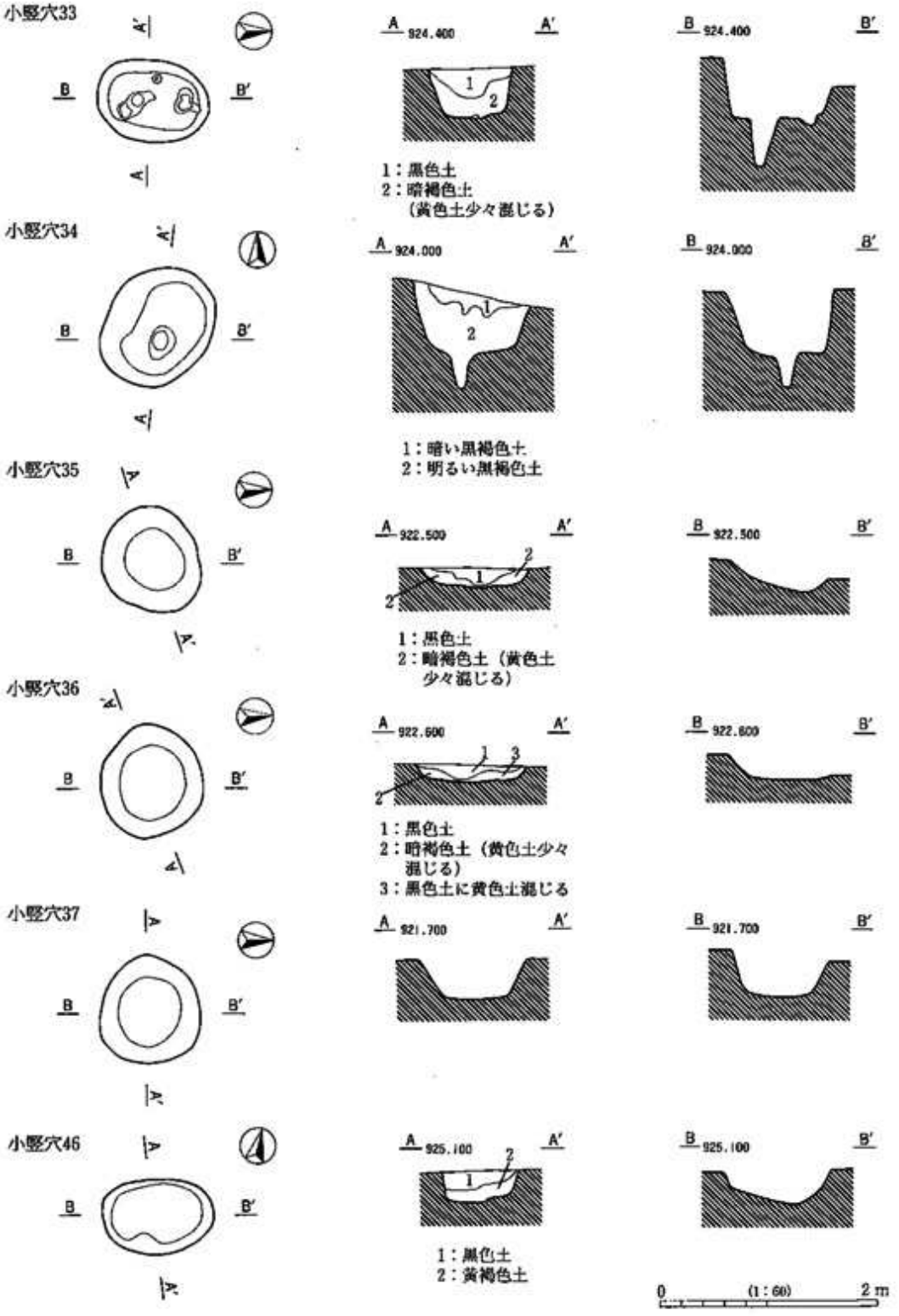
小 竪 穴 37 (第23図)

AP－21グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土がみられ、大きさも前記の小竪穴に近いため当初同様のものかと思われたが、明らかに掘り込みが深く、断面形態はタライ状となる。

遺物は発見されなかった。

小 竪 穴 46 (第23図)

EF－6グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土がみられ自然埋没と思われる。断面形



第23図　臼ヶ原遺跡 小竪穴実測図 (1)

態はタライ状を呈するが底面は水平でなく、やや輪郭も不明確である。

遺物は発見されなかった。

小 竪 穴 48 (第24図)

FA－1グリッドで検出調査した。覆土は暗褐色土の単層で輪郭はやや不鮮明であった。断面形態はタライ状だが底面等に特に施設はみられなかった。

遺物は発見されなかった。

小 竪 穴 49 (第24図)

FA－1グリッドで検出調査した。覆土は暗褐色土が上層にみられたが、規模が小さいこともあって明確でない部分が多い。断面形態はタライ状を呈すると思われるが底面の形態等は判然としない。

遺物は発見されなかった。

小 竪 穴 53 (第24図)

DU－6、EA－6グリッドで検出調査した。覆土は褐色土の単層で周辺の検出面との差が少なく、サブトレンチでもやや不明確であった。断面形態は皿状だが底面等に特に施設はみられなかった。

遺物は黒曜石の小破片が発見されている。

小 竪 穴 54 (第24図、PL12)

EA－6グリッドで検出調査した。覆土は上層に褐色土がみられたが、周辺の検出面との差が小さく非常に不明確であった。断面形態はタライ状だが底面等に特に施設はみられなかった。

遺物は発見されなかった。

小 竪 穴 57 (第24図、PL12)

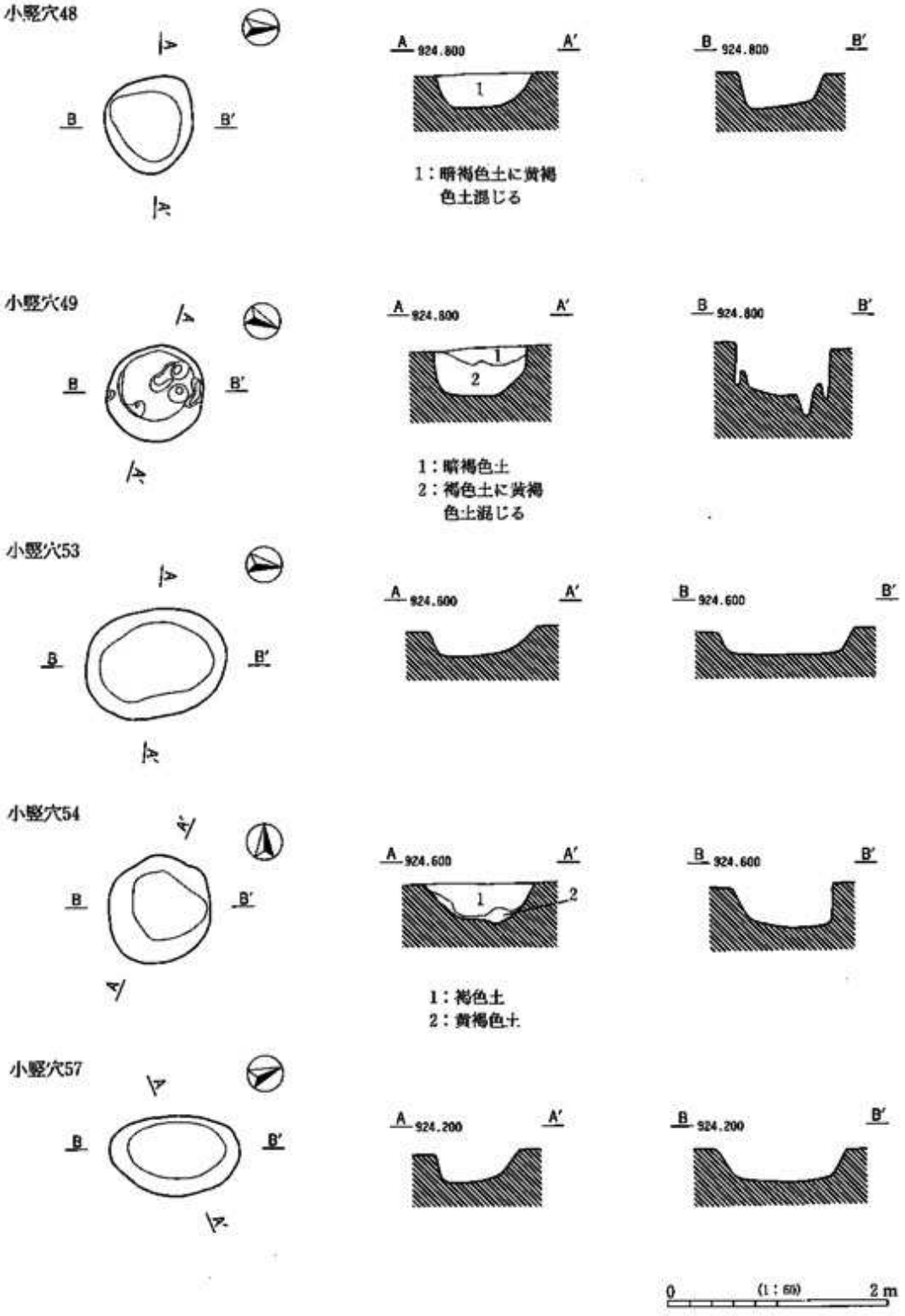
DU－11グリッドで検出調査した。覆土は褐色土の単層で、周辺の検出面との差が少なく非常に不明確であった。断面形態はタライ状だが底面等もはっきりせず、特に施設はみられなかった。

遺物は発見されなかった。

小 竪 穴 59 (第25図)

DU－1グリッドで検出調査した。暗褐色土が覆土上層にみられるため検出は容易であった。断面形態はタライ状で底面も平坦であるが水平ではなく、特に施設はみられなかった。

本竪穴は形態・覆土とも陥し穴に類似しているため陥し穴の掘削途中のものとも考えたが、確



第24図　日ヶ原遺跡 小竪穴実測図 (2)

証はなく、性格等は不明である。

遺物は発見されなかった。

小 竪 穴 61 （第25図）

DP－1グリッドで検出調査した。覆土は黒色土が上層にみられるため、検出は非常に容易であった。断面形態はタライ状で底面もほぼ水平であるが、特に施設はみられなかった。

遺物は発見されなかった。

小 竪 穴 62 （第25図、PL12）

DP－1グリッドで検出調査した。覆土は上層に黒色土が厚く堆積しており検出は非常に容易であった。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は深い皿状になる。底面はやや不整形でそれほど水平ではない。本小竪穴は他の小竪穴に比して著しく大型であり、当初は壁の崩落した陥し穴と考えていたが、底面にも特に施設は見られず、掘り込みも浅いため単なる小竪穴と判断した。

本小竪穴は列をなす陥し穴群の一角に位置しているためのこれに類似した、あるいは補助的な機能を果たしていた可能性も無いとはいえないが、出土した土器が時期的に陥し穴とは掛け離れているため関連は薄い。いづれにせよこれ程の規模をもつ小竪穴は他になく、特殊な機能・用途が予想される。

遺物は縄文中期～後期と思われる無紋の土器がややまとまって出土した。

小 竪 穴 221 （第25図）

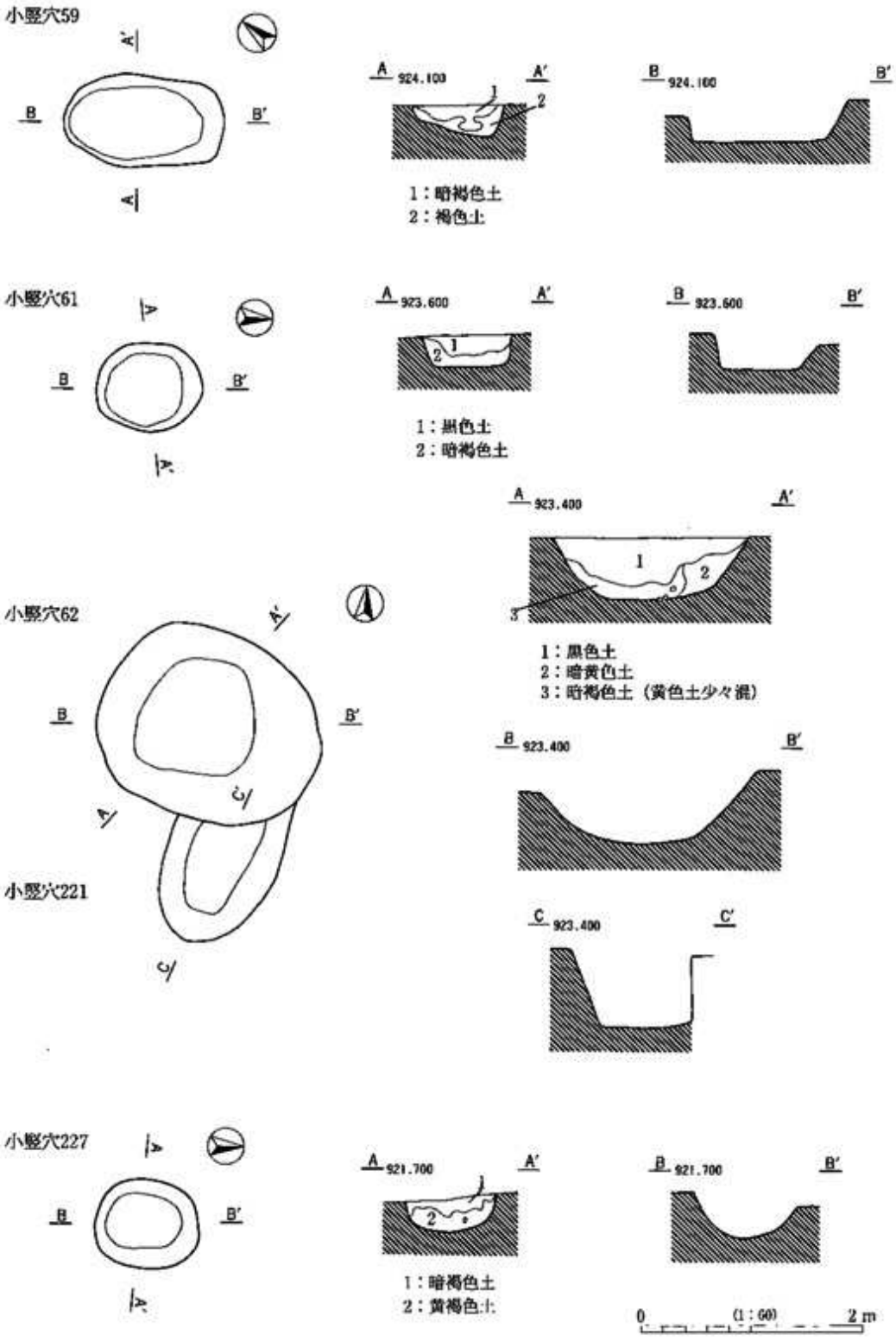
DP－1グリッドで検出調査した。覆土は暗褐色土の単層で輪郭はやや不鮮明であったが、小竪穴62の壁面では明確に検出された。このため切り合い関係は明瞭である。断面形態はやや陥し穴に近く底面もほぼ水平である。検出段階から陥し穴が予想されたが、掘り込みがやや浅く壁の状況も異なり、何より底面に全く施設がみられないため小竪穴とした。しかしながら上記の小竪穴62と同様、陥し穴列の一角に位置しており、その扱いには慎重にならざるを得ない。

遺物は発見されなかった。

小 竪 穴 227 （第25図）

AK－21グリッドで検出調査した。覆土は上層に暗褐色土が堆積しており、検出は容易であったが下層には地山と紛らわしい黄褐色土みられ、このため底面はやや不明確である。断面形態はタライ状に近いが底面は平坦ではなく、特に施設はみられなかった。

遺物は発見されなかった。



第25図　白ヶ原遺跡 小竪穴実測図 (3)

(3) 集石状遺構

村道南地点から検出された正体不明の集石を一応遺構としてとらえ、本項で扱う。検出した遺構数は125基にのぼるが、そのすべてを取り上げることは紙数の都合から無理があるため、調査区の一部に限定し、報告したいと思う。

小竪穴 104 (第26図、PL15)

HP－1、HU－1グリッドで検出調査した。上面には拳大～それ以下の礫が密集し、このなかに人頭大の礫が散在していた。断面では上層に黒色土が見られたが地山への落ち込みは小規模ではっきりしない。下層の褐色土にもやや少ないながら礫は含まれており、明確な底面は検出できなかった。

遺物は全く検出されなかった。

小竪穴 105 (第26図、PL16)

HP－1、HU－1グリッドで検出調査した。上面には拳大～それ以下の礫が密集しているが小竪穴104ほどの密度ではない。また人頭大以上の礫はほとんど含まれていない。断面では上層に黒色土が見られたが均一でなく、地山への落ち込みもはっきりしない。礫層そのものが薄いため漸移的な褐色土は部分的にしか認められない。地山の黄褐色土にも少ないながら礫は含まれており、明確な底面は検出できなかった。

遺物は全く検出されなかった。

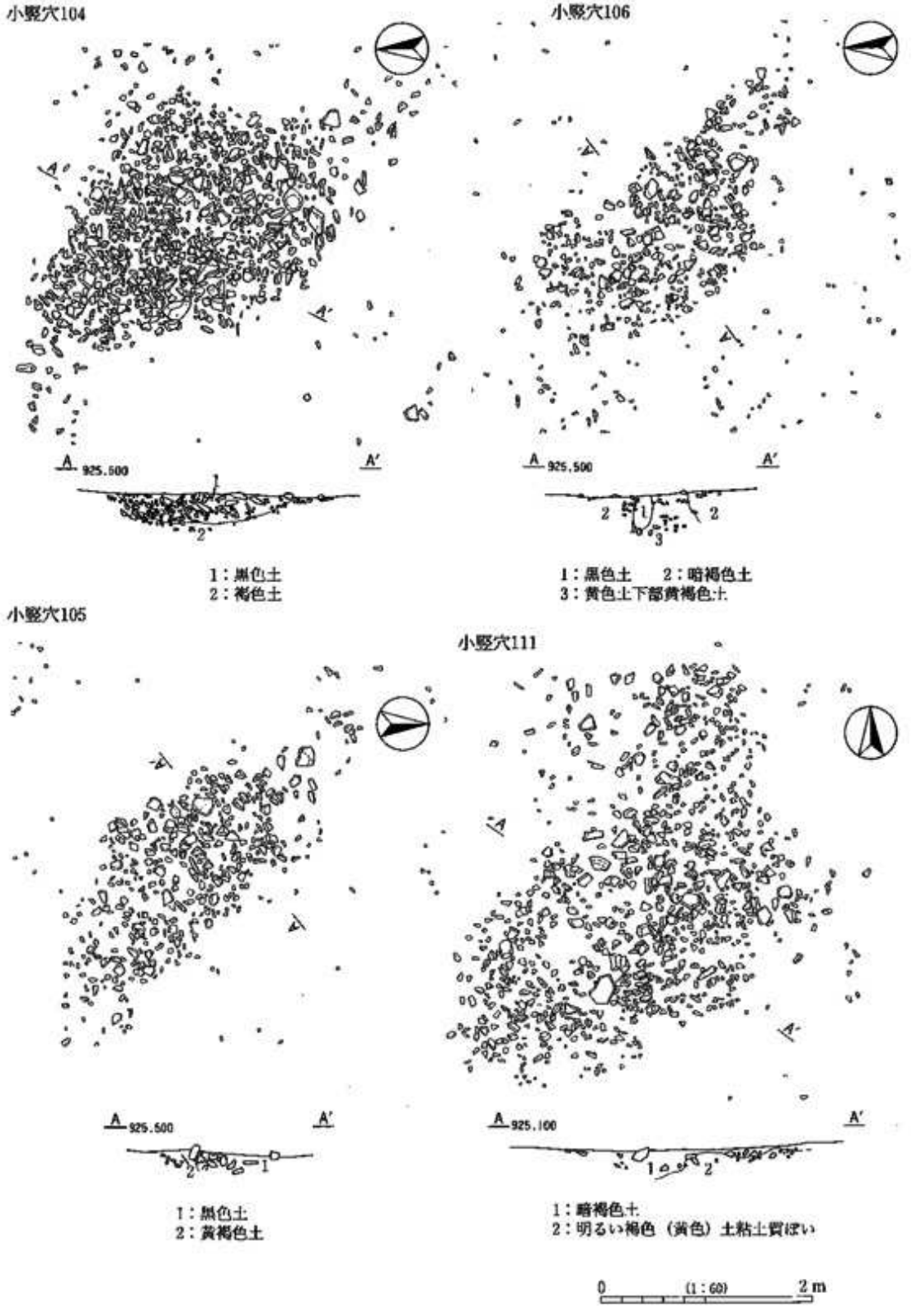
小竪穴 106 (第26図)

HP－1・6、HU－1・6グリッドで検出調査した。上面には拳大～人頭大の礫が密集しているが密度はやや低い。断面では上層の一部に黒色土が見られたが地山への落ち込みははっきりせず、むしろ植物の根が腐食した状態に類似していた。下層の褐色土～黄褐色土にも少ないながら礫は含れており、この部分を掘り下げるとアバタ状に凹凸が激しく、明確な底面は検出できなかった。

遺物は全く検出されなかった。

小竪穴 111 (第26図、PL16)

EP－21、HK－1、HP－1グリッドで検出調査した。平面形は不定形を呈し、上面には拳大～人頭大の礫が密集しているが密度はやや低い。断面では明確な黒色土は観察されず、暗褐色土が見られたがこの土層自体あまり厚くなく、地山への落ち込みははっきりしない。むしろ地表に



第26図　白ヶ原遺跡 集石状遺構 (1)

礫が散乱しているような状態であった。下層には礫は少なく、地山にも礫は含れているため明確な底面は検出できなかった。

遺物は全く検出されなかった。

小 竪 穴　112　(第27図、PL16)

HK－1、HP－1グリッドで検出調査した。上面には拳大～人頭大の礫が密集しているが密度は低い。礫そのものは周辺にもみられ、特に小竪穴116との境界付近には多いが、褐色土の分布範囲を本小竪穴の輪郭としたため結果的に遺構外に砂礫がはみ出ている状態となった。断面では上層の褐色土層から地山の黄色土層まで礫がみられ、地山への落ち込み及び明確な底面は検出できなかった。

遺物は全く検出されなかった。

小 竪 穴　113　(第27図)

HP－6グリッドで検出調査した。平面形は不定形であり遺構外にも礫が見られるが、これは遺構の輪郭を検出面の色調で確定したためである。上面には拳大～それ以下の礫が密集し、このなかに人頭大の礫がまばらに散在していた。断面では上層に黒色土が見られたが部分的であり、大半は暗褐色土で礫は上層に多く、下層には薄く分布しているにすぎない。土層の変化はきわめて漸移的で地山にも礫は含まれており、明確な落ち込みや底面は検出できなかった。

遺物は全く検出されなかった。

小 竪 穴　116　(第27図)

HK－1グリッドで検出調査した。上面には拳大の礫がみられ、このなかに人頭大の礫が散在していた。断面では部分的に黒色土の落ち込みも見られたが、この部分には礫あまり含まれておらず、むしろ周辺の褐色土や地山と思われる黄色土層の上面に礫が多かった。このためロームマウンドの可能性が高いが、ロームマウンドの性格そのものの性格がはっきりしていないため一応遺構ととらえておく。

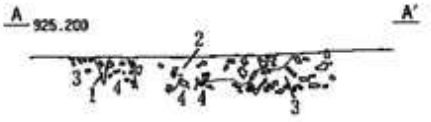
遺物は全く検出されなかった。

小 竪 穴　117　(第27図)

HK－1グリッドで検出調査した。上面には拳大～それ以下の礫がやや密集しているが、かなりの粗密があり、他の小竪穴にみられるような密度ではない。断面では上層に黒褐色土が見られたが、薄く、ぼんやりした状態で植物の根等による土色の変化と類似していた。また霜等の影響か直立したような礫が目立った。

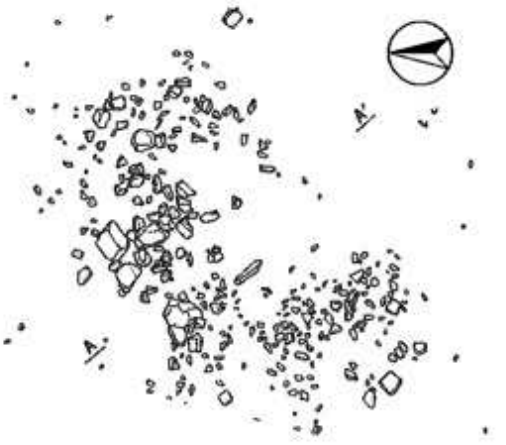
遺物は全く検出されなかった。

小竪穴112



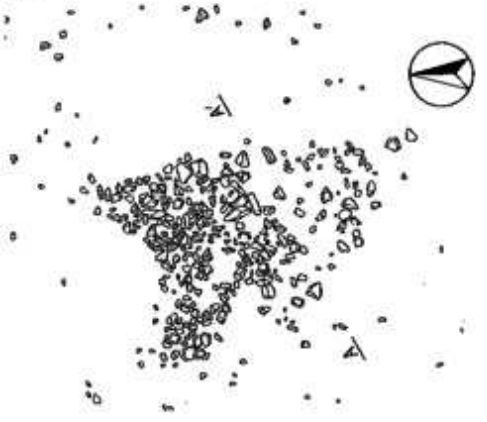
1：黒色土　2：暗褐色土
3：褐色土　4：黄色土

小竪穴116



1：黒色土　2：暗褐色土　3：黄色土

小竪穴113



1：黒色土
2：暗褐色土
3：褐色土に黄色土混じる

小竪穴117

1：暗褐色土　2：黄褐色土　3：黄色土

0　(1：60)　2 m

第27図　白ヶ原遺跡 集石状遺構 (2)

小 竪 穴　118　(第28図)

HF－1、HK－1グリッドで検出調査した。他の小竪穴に比してやや小型で上面には拳大～それ以下の礫が密集していた。断面では上層に黒色土が見られ、地山への落ち込みともとれる状況が観察されたが、下層および地山との礫の粗密にはあまり差はなく、明確な底面は検出できなかった。

遺物は全く検出されなかった。

小 竪 穴　119　(第28図)

HK－1、6グリッドで検出調査した。上面には拳大～それ以下の礫が密集し、このなかに人頭大の礫が散在していた。断面では上層に黒色土が見られたが、礫はむしろ下層の黄褐色土層に多い状態で掘り込みの等ははっきりしない。明確な底面は検出できなかった。

遺物は全く検出されなかった。

小 竪 穴　120　(第28図)

HK－6グリッドで検出調査した。上面には拳大～人頭大の礫がみられ特に中央付近に大型の礫が散在していた。断面では上層の褐色土層に礫が集中しており、上面に近いほど礫が大きくなる傾向が観察された。この褐色土層を掘り込みとらえることも可能だが、地山の黄色土にも少なからず礫は含まれており、明確な底面は検出できなかった。

遺物は全く検出されなかった。

小 竪 穴　128　(第28図、PL15)

HF－1グリッドで検出調査した。上面には拳大～人頭大の礫がやや密集していた。断面では中央部に黒色土が見られ、他の小竪穴に比して深くはっきりした落ち込みを呈していた。上面から底部付近まで礫の密度に際立った変化は観察されず、地山の黄色土層にもかなりの礫が含まれていた。

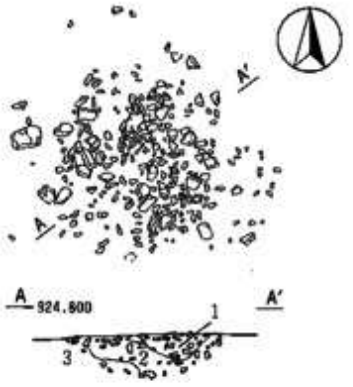
遺物は全く検出されなかった。

小 竪 穴　129　(第28図)

HF－1グリッドで検出調査した。上面には拳大～人頭大の礫が散在しており小型の礫はあまり見られなかった。断面では黒色土の落ち込みがややはっきりしており、上層に大型の礫が多く、下層に行くにつれ礫が減少し小型化するような傾向が窺え、小竪穴120に近い状況が観察された。下層の褐色土にも少ないながら礫は含まれており、地山の黄色土との境界を底面とすると球面に近い底部となってしまった。

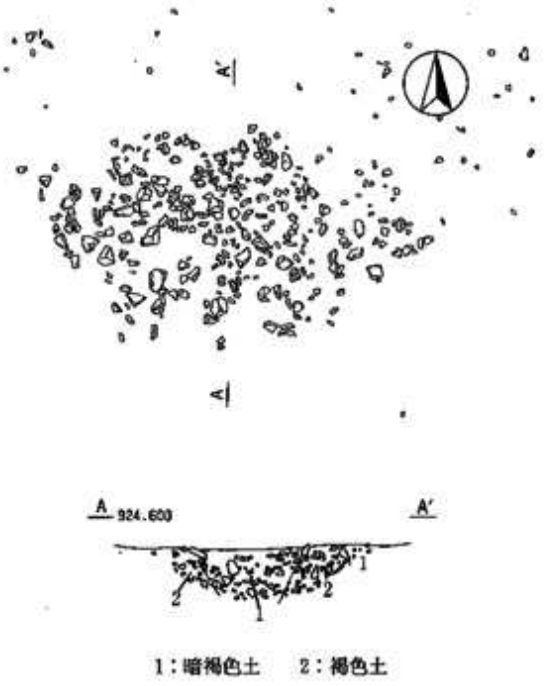
遺物は全く検出されなかった。

小竪穴118



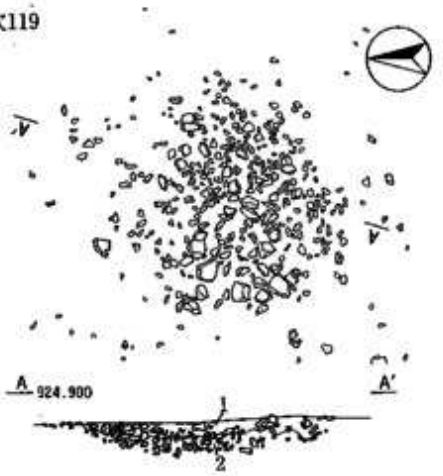
1：黒色土　2：暗褐色土
3：黄色土

小竪穴128



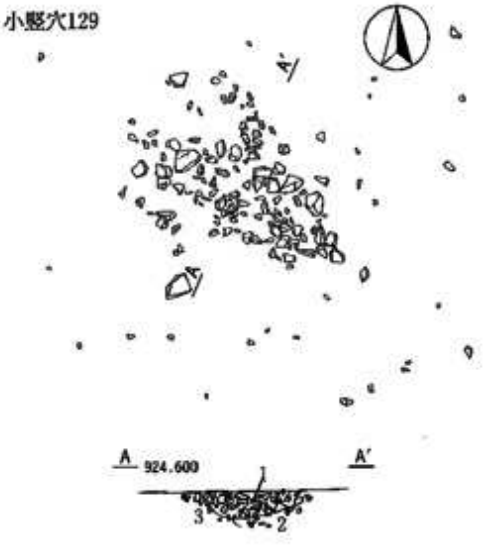
1：暗褐色土　2：褐色土

小竪穴119



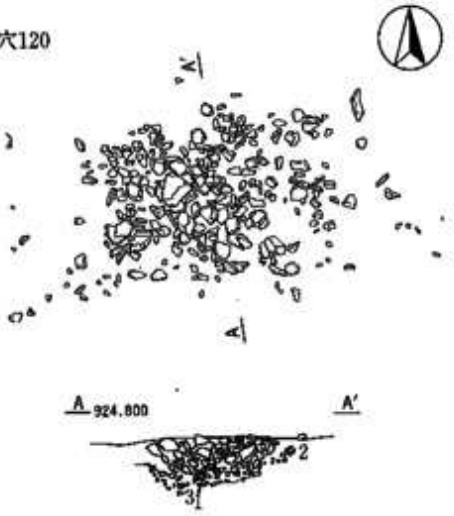
1：黒色土　2：褐色土に黄色土混じる

小竪穴129



1：黒色土　2：褐色土　3：黄色土

小竪穴120



1：黒　色　土
2：褐　色　土
3：黄　色　土

0　(1：60)　2 m

第28図　臼ヶ原遺跡 集石状遺構 (3)

小 竪 穴　130　（第29図）

HF－1・6グリッドで検出調査した。上面には拳大～人頭大以上の礫が密集し、特に中央付近に大きな砂礫が散在していた。断面では上層に黒色土が見られたが地山への落ち込みははっきりせず、褐色土・黄褐色土にも多くの礫が観察された。このため明確な底面は検出できなかった。

遺物は全く検出されなかった。

小 竪 穴　131　（第29図、PL15）

HF－6グリッドで検出調査した。上面には人頭大以上の礫が散在しており、一抱え近いようなものも見られた。断面では黒色土～褐色土の落ち込みが見られたが、礫は地山の黄色土にもかなり含まれており、底面は不明である。また上層の礫は下層のそれよりも大きいように思われた。

遺物は全く検出されなかった。

小 竪 穴　193　（第29図）

HF－6グリッドで検出調査した。上面には拳大～人頭大の礫が密集しているが中央付近は礫が少なく、一見穴があいたように観察された。断面では上層に薄く暗褐色土が見られたが、地山への落ち込みはなく、礫は上面に置かれているような状態であった。礫は少ないものの下層の黄色土にも含まれており、このため底面は全く不明である。

遺物は全く検出されなかった。

小 竪 穴　194　（第29図）

HP－6グリッドで検出調査した。上面には拳大～人頭大の礫が密集しているが、他の小竪穴に比して密度は低い。断面では上層にごく薄い黒褐色土が見られたのみで、地山への落ち込み全く観察されなかった。また礫は上面（検出面）付近にのみ存在し、前小竪穴と同様に地表に置かれたような在り方を示していた。

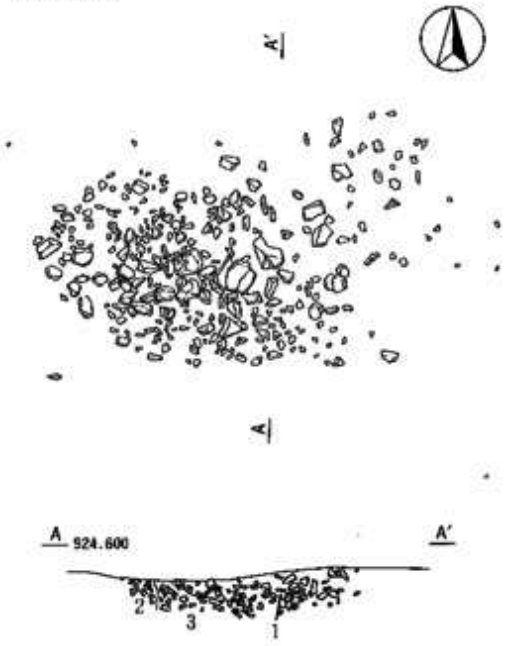
遺物は全く検出されなかった。

小 竪 穴　195　（第30図）

HP－6グリッドで検出調査した。上面には拳大前後の礫が散在し、他の小竪穴に比してかなり礫の密度は低い。また表面に黒褐色土が殆ど見られないことから、礫の大半が表土剝ぎの段階で取り去られた可能性もある。断面でも掘り込みは見られず、地山の黄色土に礫がやや集中して含まれている状態が観察されたのみである。

遺物は全く検出されなかった。

小竪穴130



1：黒色土下部褐色土
2：黒褐色土　3：黄色土

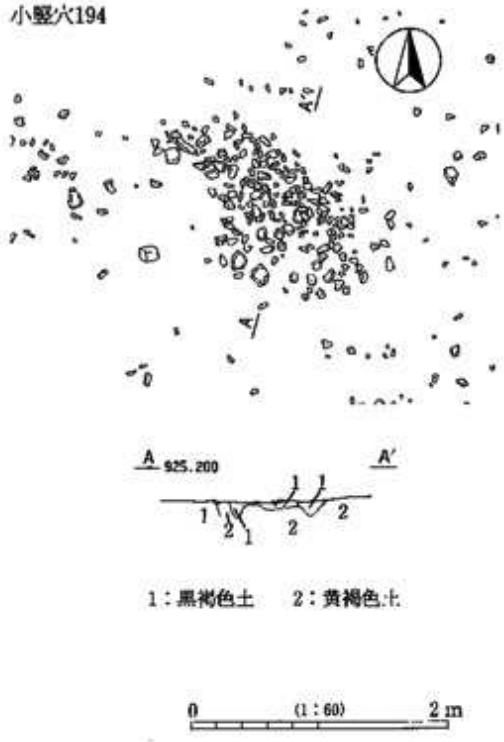
小竪穴193

1：黒色土　2：暗褐色土
3：黄褐色土

小竪穴131

1：黒色土に暗褐色土混じる
2：黄色土

小竪穴194



1：黒褐色土　2：黄褐色土

0　(1：60)　2 m

第29図　臼ヶ原遺跡 集石状遺構 (4)

小 竪 穴　197　（第30図）

HK－6グリッドで検出調査した。上面には拳大～人頭大の礫が密集しているが、前小竪穴程ではないが礫の密度は高くない。断面では上層に薄く暗褐色土が見られたのみで地山への落ち込みは殆ど観察されない。礫は周辺の検出面から比べればかなりの密度で集合しているが、地山の黄色土にもかなり含まれており、明確な底面は検出できなかった。

遺物は全く検出されなかった。

小 竪 穴　198　（第30図）

HK－6グリッドで検出調査した。上面には拳大～人頭大の礫が密集しており、やや小型の礫が多い。断面では上層に薄い暗褐色土が見られ、礫はこの上面つまり検出面付近に多く、下層では極端に少なかった。したがって小竪穴193に近い状況である。このため地山への落ち込みはごくわずかであり、明確な底面は検出できなかった。

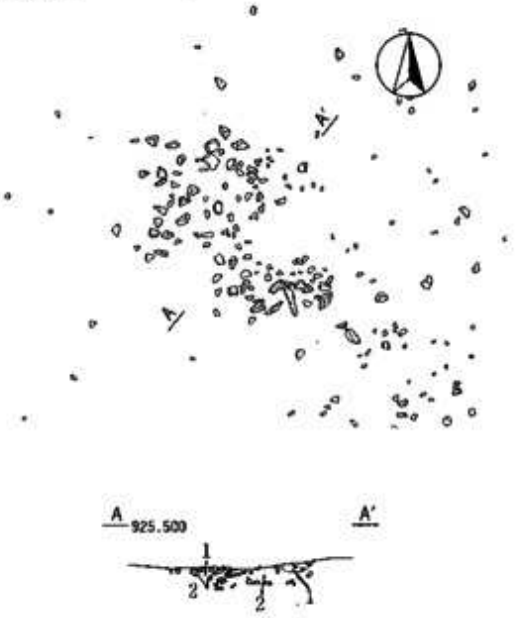
遺物は全く検出されなかった。

小 竪 穴　199　（第30図）

HK－6グリッドで検出調査した。上面には拳大の礫が密集したなかに人頭大～それ以上の礫が散在していた。断面でははっきりした暗褐色土の落ち込みが見られ、かなりの大きさの礫が上層中央部に観察された。礫は下層に進むにつれ小型化し、小竪穴129に近い状況を示していた。地山の黄色土にも礫は含まれているが密度の差が明らかで、礫を取り去ると半球状の凹地となった。

遺物は全く検出されなかった。

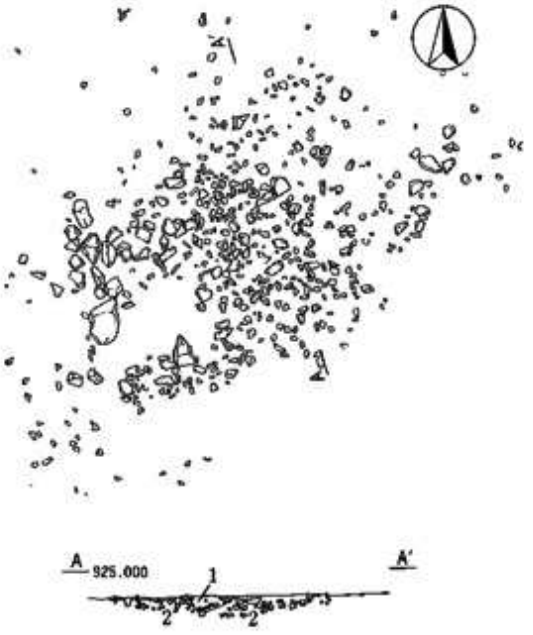
小竪穴195



小竪穴198

1：暗褐色土
2：褐色土に黄色土混じる

小竪穴197



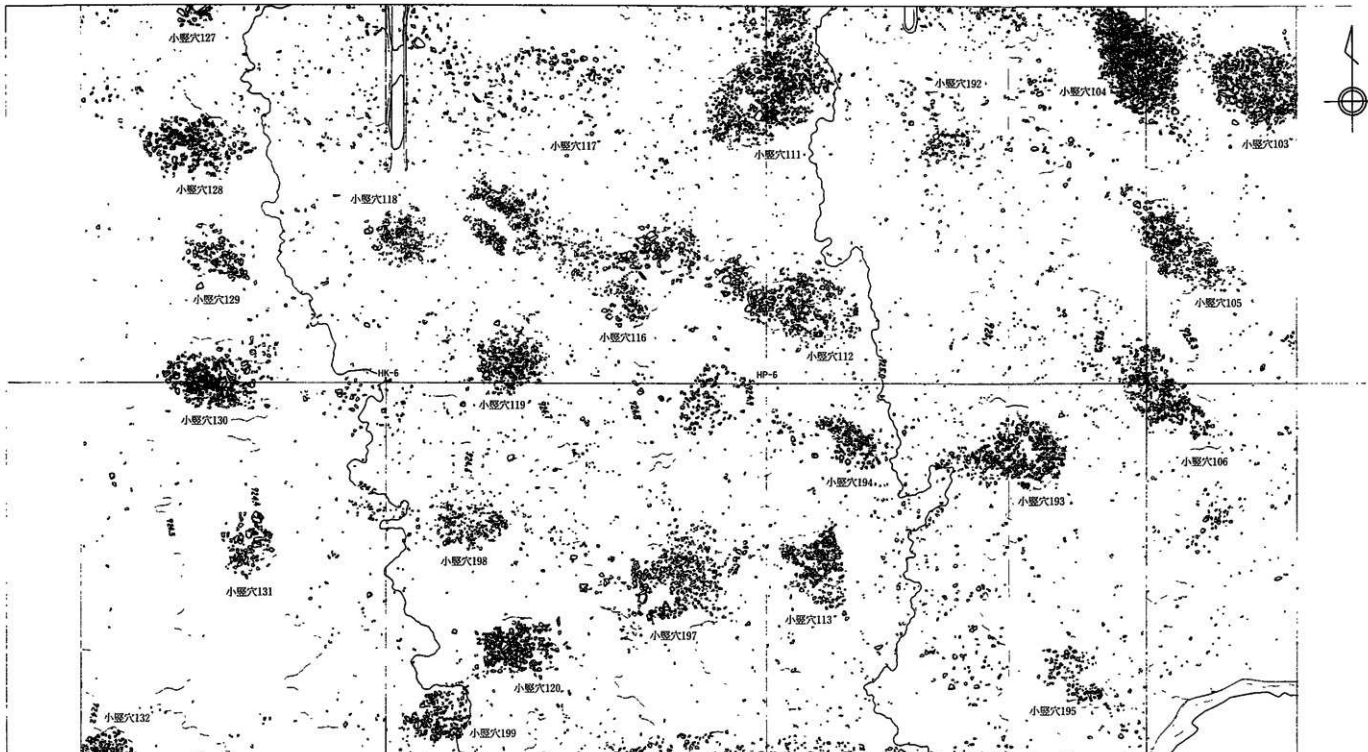
1：暗褐色土
2：褐色土に黄褐色土混じる

小竪穴199

1：暗褐色土　2：褐色土
3：黄褐色土

0　(1：60)　2 m

第30図　臼ヶ原遺跡 集石状遺構 (5)



第31図　集石状遺構分布図（部分）

0　(1 100)　10m

(4) 遺　　物

① 土　　器

陥し穴を主体とした遺跡であるため土器の出土は稀で、細片ばかりである。図示すべきものは見当たらないが、遺構外で縄文早期終末の土器片（天神山式）が採集されており、陥し穴出土の土器（前期 中越式が多い）とそれほど時期差がないことが注目される。

② 石　　器（第32図）

白ケ原遺跡からは17点の石器が出土している。このうち、遺構から検出された石器はすべて小形の剥片石器類で、定形石器は出土していない。ただ、およそ3/4の10点が楔形石器であることが注目される。

ア 楔形石器類（1・2・4・6～8・10～13）

両極打撃とそれから派生する各種の剥離面を有する遺物を一括した。チャート製が4点（1・9・11・12）と黒曜石製（2・4・6～8・13）が6点ある。これらのうち2は両極剥片、13は両極石核とすべきものであり、他も利器と見なす材料に乏しい。ただし、7には上面に二次調整が施されている。

イ 二次加工のある剥片(5)

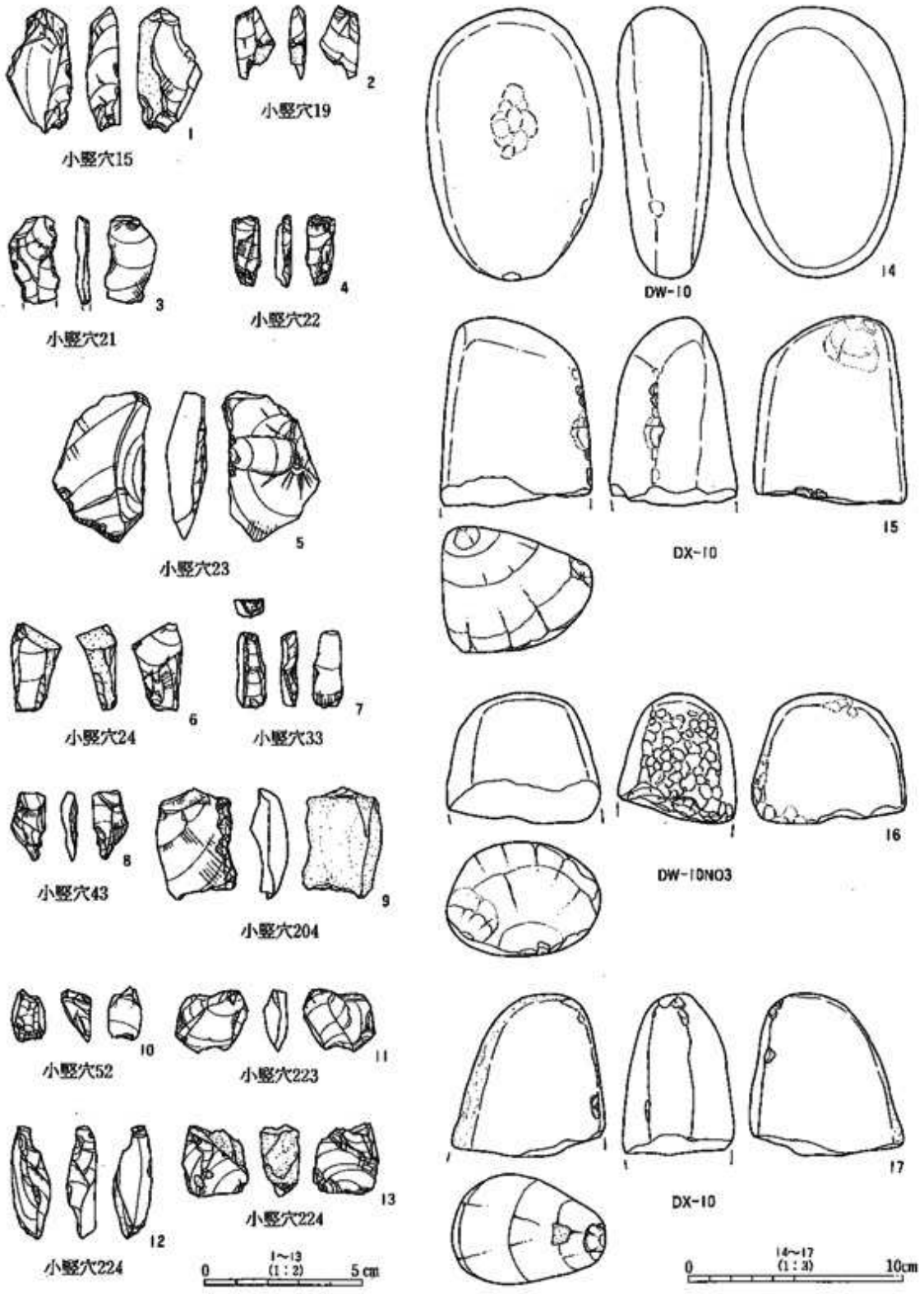
黒曜石製の横長剥片を素材とし、剥片の末端から主剥離面に大きな剥離が1枚施されている。剥片の打面と右側縁の背面側には、主な掻き取り動作による微細な剥離が連続している。両者は連続していることから、同一の刃部と見なすことがでる。なお、微細剥離の出現部位の違いは縁辺角の大きさの差である。

ウ 使用痕のある剥片（3・9）

全て黒曜石製で、縦長の剥片の側縁を刃部に利用している。双方とも微細剥離は打点を持たない曲げ剥離が優勢であることから、刃部を立てて使用されたか、柔らかい被加工物に対して用いられたと考えられる。

エ 磨石類（14～17）

全点が遺構外検出である。凹石（14）は安山岩製で正面上部と下部の敲打の後、器体全面が擦られている。磨石の3点は両側ないし片側面が面取りされており、16は側面を敲打によって形成している。いずれも欠損しているが、事故の可能性のある16以外は明らかに切断されている。ま



第32図　白ヶ原遺跡 出土石器類

た16と17には切断面に摩耗が観察できる。磨石は全て凝灰岩製である。

4. 小 考 察

(1) 陥 し 穴

臼ケ原遺跡から検出された小竪穴177基のうち、村道南側に分布する集石状遺構を除く純然たる小竪穴は62基。このなかで陥し穴と分類されたものは46基で小竪穴の74%にあたる。原村で過去に調査された陥し穴は、南平遺跡等で検出されている中世と思われるものを除くと、報告されているものはわずかに26基(うち8基は臼ケ原遺跡の一次調査)で臼ケ原遺跡の特殊性が際立つ。

圃場整備事業や大規模開発にともなう発掘調査が大々的に展開しつつある現在、各地で陥し穴の検出が相次ぎ、研究・考察もさかんに行われているようであるが、時間と紙数の関係から他の遺跡での調査例を参考にしている余裕は殆ど残されていない。このため本格的な論考は後の機会に譲り、本遺跡の事例に限って、簡単な考察を試みた。ご批判・ご叱正をいただければ幸甚である。

覆 土 の 分 類

3.(1)での事実記載でも述べたが、本遺跡から検出された陥し穴の覆土は概略3種程に分類が可能である。覆土の差はその陥し穴の埋没過程、あるいは埋没時期の差を反映していると思われるが、人為的埋没と自然埋没との明確な判別が可能でないうえ、共伴する遺物も希薄であり、とりあえず検出時点での色調の差を基本として分類し、考察を進める事にする。

発掘現場で読み取れた覆土の差は以下のごとくである。

1類　はっきりした黒ボク土状の黒色土を覆土上層に持つもの。小竪穴16等

2類　ローム層が腐植によって汚染され褐色化したような覆土のもの。小竪穴18等

3類　検出困難なほど地山と覆土の差が小さいもの。覆土中層は黒色土がみられるものが多い。小竪穴207等

以上のような分類のもとに陥し穴の分布状況を示したものが第33図である。一目で気付くのは2・3類としたものが列の中に多く、列を離れた北側は1類ばかりで2・3類は殆ど分布しないことであろうか。また陥し穴列のなかでは近接して隣あう陥し穴が同じ覆土に分類されないことも特筆されよう。このことは陥し穴が1基として切り合っていないこととあわせ、覆土の差が時期差を示していることの傍証になると思われるが、本遺跡のなかで他に帰属時期を明確に捉えられる遺構が存在しなく、覆土の差異をそれらとの比較によって明確にできないため推測の域を出ない。

ともかく2・3類とされる覆土と地山の差が小さい陥し穴が列の主体をなしており、3類のは

第33図　陥し穴の覆土別分布図

っきりした黒色土を覆土上層に持つものは、列のなかでは２・３類の間隙を埋めるような形で分布し、また列以外の地域にも広がっているという事である。

陥し穴の列はより密集した南側と、それほどでない北側の２列に分けられそうであるが村道下および村道南側の状況を考えると南北２列の分割はやや勇み足の感もしないではない。またこれら陥し穴列を離れた北側では列ははっきりしない。他の遺跡では陥し穴の間隔が10数mという列も確認されているようなので、狭い調査区の中だけのデータではやや根拠に欠けるが、間隔の広い直線的でない列を想定してみてもやや難がありそうで、何より陥し穴の長軸方向が一定しない。では軸方向はどうか？

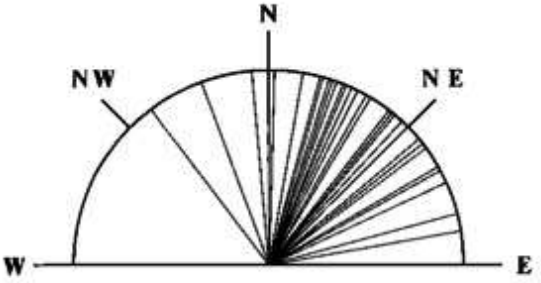
陥し穴の軸方向

全陥し穴の軸方向を図にしたものが第34図である。殆どの陥し穴が北東－南西方向に軸をとることが明らかであるが、これを列に属すものとそうでないものに分けると第35・36図のようになる。列をなすと思われるものは軸方向がそろっているが、列から離れたものはかなりのばらつきがみられ、その違いが明確である。

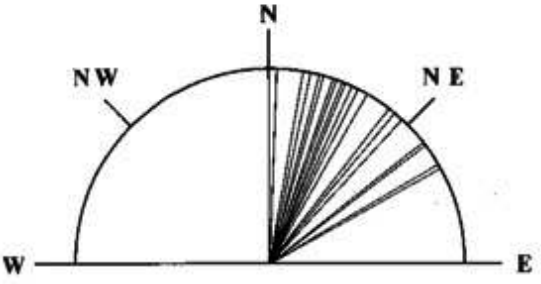
軸方向が揃った陥し穴と、そうでないものがあることは疑いようのない事実として、なぜ北東－南西方向に揃わねばならないのだろうか。臼ケ原遺跡は丘陵と丘陵の中間にある平坦地に立地しているが、原村は村全体が八ヶ岳の山麓であるから、当然ながら水平に近い平坦地はどこにもなく、臼ケ原遺跡も平坦ではあるがゆるやかな斜面である。この斜面に対して陥し穴の軸はどのような関係にあるのか。

第39図は村道北側の調査区のそれも西半分のコンター図である。大変狭い範囲であり、耕作や村道の開削等で変化してしまっている部分も大きいと思われるが、この図を見る限り、平坦と思われた調査区にも小規模な尾根が認められ、列をなす陥し穴はこの尾根筋に沿って並んでいるようである。また等高線に対して軸がどのように振れるかという傾斜方向に対する傾向はあまりはっきりしない。基本的に尾根筋に平行するとすれば等高線に対しては一定方向に軸が向くはずであるが必ずしもそうなってはいない。むしろ列方向に対して直交する陥し穴の軸を意識しているのであって地形に対する軸ではないと思われる。つまり陥し穴を築いた人々は列を尾根に平行させること、列に対して軸を直交させること念頭に置いていたと考えられる。

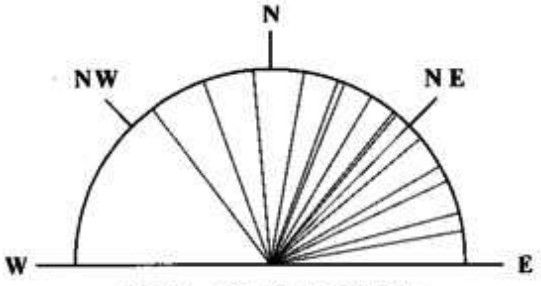
列をなすものは上記のような規則性を持つとして、それ以外の列から離れた陥し穴については今のところよくわからないというのが本音である。小竪穴15や16のように傾斜方向に沿って掘られているものが目につくが、全体的には地形に対して特定の在り方を示しているようには思われない。ランダムに散在し、ランダムな方向に軸を取っているように見えるのだが、そうでないとすればやはり列を想定するべきだろうか。いずれにせよ現時点では留保せざるを得ない。



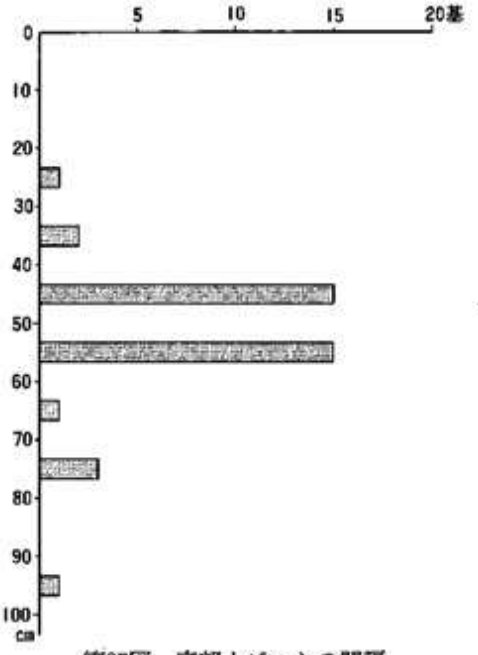
第34図　全陥し穴の軸方向



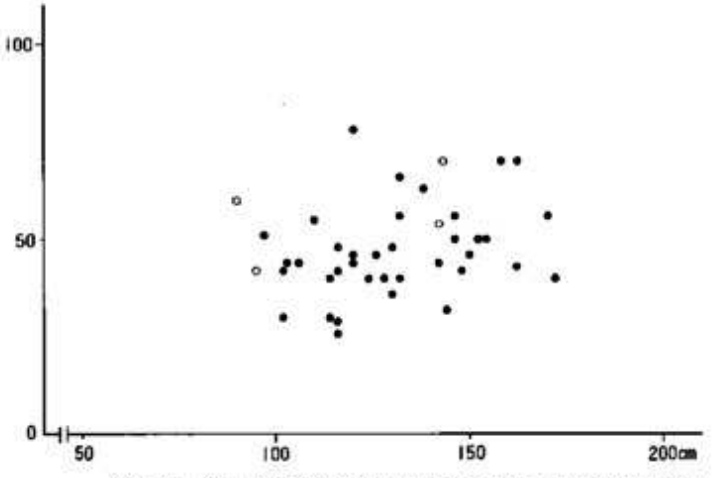
第35図　列内陥し穴の軸方向



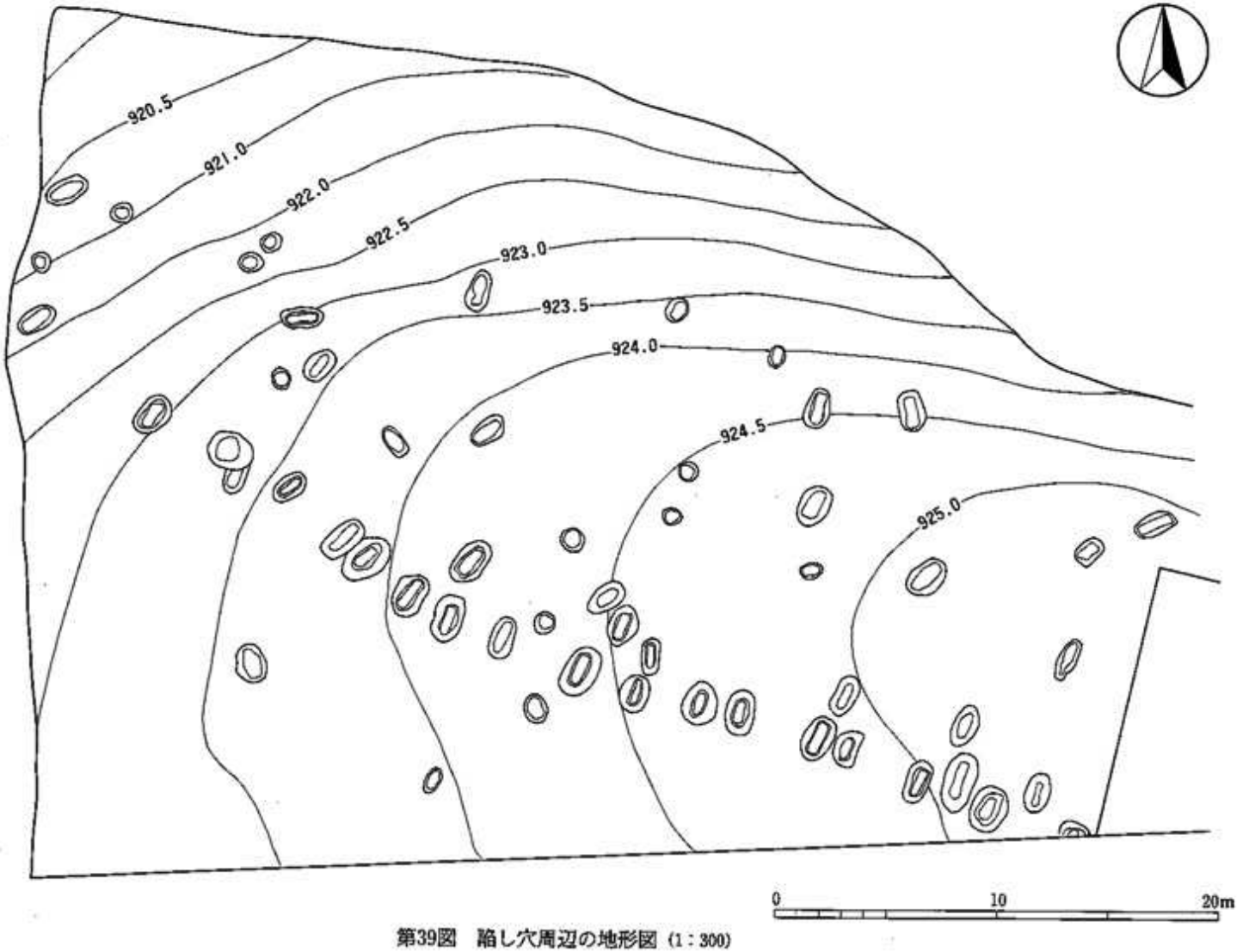
第36図　列外陥し穴の軸方向



第37図　底部小ピットの間隔



第38図　陥し穴底面の規模（黒点2穴タイプ，白抜1穴タイプ）



第39図　陷し穴周辺の地形図（1：300）

形態的分類

本遺跡から検出された陥し穴は基本的に底部に2個の小ピットを持つものが殆どであるが、少数ながら1穴のもの、例外的に無穴・4穴のものも確認されている。また規模・掘り込みの深さ等にもかなりの差異が観察される。そこでまず底部のピットの数に注目したのち、形態の差にも言及したい。

2穴タイプの陥し穴は38基、1穴タイプは4基でそれぞれ陥し穴全体の79%と8、7%を占める。この2種の陥し穴の分布状況をみると（第5図）1穴タイプのものは列をなす陥し穴群のなかには1基も存在せず、すべて列を離れた北側に散在していることがわかる。たった4基だけなので形態的な傾向をとらえることは難しいが1穴タイプは平面形が長方形に近いものが多く、2穴タイプに比して小規模のように思われる。また掘り込みもやや浅いようである。いづれにせよ他の遺跡でみられるような平面形が円に近い1穴タイプは検出されていない。

2穴タイプは底面の規模・壁の形態等にやや差異がみられる。上面での形態・規模についてもかなり変異が認められるが、埋没過程での崩壊・変形が予想されるため今回は取り上げない。第38図は底面の規模をグラフ化したものであるが、まず短軸の差が長軸のそれよりも少ないことが読み取れる。長軸にはかなりの長短があっても短軸にはそれほど差がないことが陥し穴の機能・用途の面でどのような意味を持っているのであろうか。また短軸40cm、長軸120cm付近に小規模な集中がみられ、この集団とその他の集団に分離できるようにも思われる。しかしながら特定サイズへの極端な集中は看取できず、同一形態で大小に分化したような傾向も現れていない。

次に小ピットの間隔をみると（第37図）間隔が50cm前後に著しい集中がみられ、この規模が本遺跡における陥し穴小ピットのスタンダードなありかたということができる。底面の規模との兼ね合いもあろうが、ここまで集中すると2穴タイプの陥し穴でもっとも重要な要素は形状や規模ではなく小ピットの間隔、すなわち逆茂木の間隔ということに結論したくなる。では逆茂木の間隔はそれほどまでに重要なものなのだろうか。このことについては後に述べるとして、壁の形態について分析を進めたい。

陥し穴の壁の形態は埋没過程での崩落や植物の根による変形を免れず、本来的な形態とは掛け離れた状況になっている可能性が高い。現場での調査時点から壁の立ち上がり方に差があることは気づいていたが上記の理由によりそれほど注目しなかった。しかし新旧関係が明確な小竪穴21と220においてはっきりと差が現れたため、やや不確定な要素が多いことを納得した上で分布状況をみることにする。（第5図）するとやはり列をなす陥し穴に段のある壁が多くみられ、列から離れるとストレートな壁のものが目立つ。覆土の差と壁の形態差が一致すれば大変興味深いが、現実はそれほど単純ではなく、はっきりとした傾向は読み取れない。しかし列の北側に1類の陥し穴が多く、このうちのほとんどがストレートな壁である。このことから両者には正の相関が濃厚であると言えよう。また1穴タイプには段はなく、すべて1類の覆土である。

以上、覆土・軸方向・底面の形態等について概観したが、明らかになった事柄を列挙すると以下のようになる。

・陥し穴列は尾根筋に並行するかたちで構築されている。

・列に属す陥し穴は列に直交する方向に長軸をとる。

・２穴タイプでは底部の規模によりも小ピットの間隔が重要らしい。

・底部の長軸よりも短軸のばらつきが少ない。

小ピットの間隔についてはやはり狩猟対象として特定の獣、あるいは一定の大きさに成長した獣を意識した結果と考えたい。縄文時代から現代に至るまで主たる狩猟対象がシカとイノシシであることからして、そのいずれかに絞られるが、跳躍力を考えればイノシシか。しかし原村付近には現在シカが多く温暖地を好むイノシシは分布しない。いずれにせよ現状では対象獣は不明である。底部の短軸の傾向も同様の意味と理解している。すなわち一定の幅をもった細長い小竪穴が陥し穴として好適であり、意識されているのである。それはやはり対象獣の体格が一定だったからであろう。そう考えると壁の形態差もおぼろげながら理解できそうである。段をもつものは当初から一定の幅の細長い穴を意識したもので、この段は壁の崩落の結果か、あるいは壁上半部にあった竪穴の幅を一定にする施設が抜去されたか腐朽したかによって現在みられるような形態になったと想像される。また段を持たないものは底部にまで達する上記のような施設があったと考えられ、これについては他遺跡で硬質のロームブロックを使用した例が知られている。

時期的分類と列の意味については全く手が出ない状態である。仮に覆土の差を時期の差に置き換え、１類が新しく、２・３類と古くなるとした場合、当初から列をなしていたものが、のちに列ばかりでなく、より北側の地域へも広がったと考えたくなる。また１穴タイプと２穴タイプを考えた場合、当初２穴タイプばかりであったものが列の部分は２穴タイプを配し、より北側には１穴タイプを構築するようになったと想定することもできる。いずれにせよ現段階ではそのように考えることもできるという状態でしかない。また、わずかな遺物の示す時期は縄文早期終末から前期前半まで差があり、陥し穴の時期は当然それより古いとしか述べようがない。

陥し穴は以前から列をなす場合が多いことが知られており、ある程度まとまった数とかなりの距離をもって機能するもののようである。臼ケ原遺跡の陥し穴が列に対して直交する方向に軸を取ることから推して単に獣道に沿って掘られたとは思えず、やはり追い込み猟のような組織的な狩猟形態を考えなければならない。近年縄文時代の狩猟について、これを当時における文化的社会的本質ととらえ、大陸にみられるトナカイ等を対象とした北方狩猟民の民俗例等から誘導柵と陥し穴を組み合わせた、組織的かつ大規模な特殊化した狩猟を想定する向きもある。今回の臼ケ原での発見は興味深いが、がそのような論考に対してどのような意味を持つのか現状では不明であるとしか言いようがない。

以上、簡単かつ単純に考察した結果を述べたにすぎない。今後も資料の収集を重ね縄文時代の狩猟の実像に迫るべく、努力を続ける所存である。

(2) 集石状遺構

白ケ原遺跡の村道南側では、重機による表土剝ぎの段階から耕作土中に礫がみられたが、耕作土直下の黒色土中には非常に多くの礫が含まれていた。礫は大小さまざまで、直径数cmのものから人頭大、はては一抱えもあるようなものまで見られ、当初は調査区の南側の小河川（せぎ？）の氾濫の跡かと考えていた。

ところが調査区が広がるにつれ、礫の密度に濃淡が現れ始め、検出をかけると島状の集石が多数確認された。このため阿久遺跡等から発見されている集石をともなう土坑かと思い、かなり慎重に調査をはじめた。しかし調査が進むにつれ数々の疑問点が生じ、結局のところ最後まで人為的な遺構か自然の営力によるものなのか判断のつかないまま調査終了となってしまった。

一応、検出されたすべての土坑の平面図・土層図を作成し、ラジコンヘリによる全体写真も撮影したが、はたしてこの土坑の性格を決定づけるに足る記録を残せたかどうか、はなはだ疑問である。整理時点でも詳細に検討・考察する余裕がないため、調査時点で気付いた点を２、３述べてみたい。

礫の在り方

一見どの小竪穴も似たような礫の集合にみえるが、一抱えもあるような大礫が幾つか集中しているようなものははっきりした落ち込みが認められると共に、大礫は表面近くに浮いたような状態でみられ、下層には小型の礫が集まっている傾向があるように思う。また検出面には礫の集中がみられるものの、比較的小型の礫ばかりのものははっきりした落ち込みは観察されず、地表に礫を集めたような状態のものが多い。

小竪穴の形態

形態的にはさまざまだがやはり楕円形のものが多い、また河川の流路に近い形態のものもある。人為的か否かは別としてもはっきりした円形のものはまずない。

底部の形態

はっきりした落ち込みが認められるものは礫の密集している部分を覆土と仮定して掘り下げたが、いわゆる平坦な底面は１例も観察されなかった。地山の黄色土層（２次堆積性のローム層？）を底部とすると半球状のような丸底の竪穴になり、かつ地山にもかなりの礫が含まれているためこの礫まで取り去ると上面で検出したものよりもかなり拡大した竪穴になってしまう例が

ほとんどだった。

また落ち込みが観察されないものは底部に残る褐色土を取り去ると小さな凹凸が多数現れ、植物の根による変色部分を調査したような状態となった。

礫の分布範囲

礫は村道南側に広く認められるが、巨視的には帯状に分布しおり臼ケ原西遺跡の尾根裾部でも礫が見られた。陥し穴の分布する村道北側には小規模な尾根状の高まりが存在するため村道南側は臼ケ原南遺跡がある丘陵とに挟まれ、帯状の凹地となっている。

礫の分布する範囲では純然たる砂やはっきりした埋没流路は検出されなかったが、現在水田灌漑用の小河川が流れていることから河川の氾濫等による礫の集積も考えられる。

今のところ原村内では大石遺跡で発見された配石状礫群が臼ケ原遺跡の例にもっとも類似しているが、関連は明らかでない。

今後、資料・類例の増加に期待するとともに、関連諸科学の成果・知見の収集につとめ、この特異な集石の正体を明らかにしたいと思っている。

なお、この集石に対する疑問点をまとめると以下のようになる。

- 遺物が検出されない。一片の土器、一個の原石すらない。
- 関連をうかがわせる遺構、施設がみられない。
- 掘り込みがはっきりしない。明確な土坑底は観察されず、砂礫を取り去ると半球状になるものもある
- 観察される層序はきわめて漸移的で地山との差が明確でない。やや明確なのは礫の粗密である。
- 礫の大きさにまとまりがない。大小の礫がランダムに入っていて集石ごとの差も大きい。とにかく阿久遺跡等で確認されているような大きさの揃った礫の集合体ではない。
- 平面形がふぞろい。円形～楕円形のものが多いが帯状のもの、アメーバ状のものも目立つ。

第2表　集石状遺構礫重量 (1)

小竪穴 103　　礫総重量 1285kg　　総個数6123個

礫重量(kg)	~0.5	~1.0	~1.5	~2.0	~2.5	~3.0	~3.5	~4.0	~4.5	~5.0	~10	~15	~20	20~
個　数	5760	253	50	21	10	6	6	5	2	1	7	1		1
数量%	94.1	4.1	0.82	0.34	0.16	0.09	0.09	0.08	0.03	0.01	0.11	0.01		0.01

小竪穴 119　　礫総重量 413kg　　総個数2371個

礫重量(kg)	~0.5	~1.0	~1.5	~2.0	~2.5	~3.0	~3.5	~4.0	~4.5	~5.0	~10	~15	~20	20~
個　数	2240	114		15		2								
数量%	94.5	4.5		0.63		0.08								

小竪穴 120　　礫総重量 474kg　　総個数2261個

礫重量(kg)	~0.5	~1.0	~1.5	~2.0	~2.5	~3.0	~3.5	~4.0	~4.5	~5.0	~10	~15	~20	20~
個　数	2105	58	77	10		5	3			1	2			
数量%	93.1	2.5	3.4	0.44		0.22	0.13			0.04	0.09			

小竪穴 129　　礫総重量 239kg　　総個数1330個

礫重量(kg)	~0.5	~1.0	~1.5	~2.0	~2.5	~3.0	~3.5	~4.0	~4.5	~5.0	~10	~15	~20	20~
個　数	1246	67	7	3	2	1	3			1				
数量%	93.7	5.0	0.52	0.22	0.15	0.07	0.22			0.07				

小竪穴 131　　礫総重量 293.5kg　　総個数1430個

礫重量(kg)	~0.5	~1.0	~1.5	~2.0	~2.5	~3.0	~3.5	~4.0	~4.5	~5.0	~10	~15	~20	20~
個　数	1304	89	21	11	2			1			2			
数量%	91.2	6.2	1.4	0.77	0.14			0.07			0.14			

小竪穴 132　　礫総重量 202.5kg　　総個数1584個

礫重量(kg)	~0.5	~1.0	~1.5	~2.0	~2.5	~3.0	~3.5	~4.0	~4.5	~5.0	~10	~15	~20	20~
個　数	1563	14	4	2			1							
数量%	98.6	0.88	0.25	0.12			0.06							

小竪穴 141　　礫総重量 232.5kg　　総個数1582個

礫重量(kg)	~0.5	~1.0	~1.5	~2.0	~2.5	~3.0	~3.5	~4.0	~4.5	~5.0	~10	~15	~20	20~
個　数	1496	75	6	2	1	2								
数量%	94.5	4.7	0.38	0.12	0.06	0.12								

第2表　集石状遺構 礫重量 (2)

小竪穴 142　　礫総重量 935kg　　総個数6281個

礫重量(kg)	～0.5	～1.0	～1.5	～2.0	～2.5	～3.0	～3.5	～4.0	～4.5	～5.0	～10	～15	～20	20～
個　数	5917	252	67	12	11	2	7	3	4	2	3	1		
数量%	94.2	4.0	1.1	0.19	0.17	0.03	0.11	0.04	0.06	0.03	0.04	0.01		

小竪穴 146　　礫総重量 374kg　　総個数2543個

礫重量(kg)	～0.5	～1.0	～1.5	～2.0	～2.5	～3.0	～3.5	～4.0	～4.5	～5.0	～10	～15	～20	20～
個　数	2429	94	17	3										
数量%	95.5	3.7	0.67	0.12										

小竪穴 156　　礫総重量345kg　　総個数2594個

礫重量(kg)	～0.5	～1.0	～1.5	～2.0	～2.5	～3.0	～3.5	～4.0	～4.5	～5.0	～10	～15	～20	20～
個　数	2100	345	77	38	7	5	3	2	4	2	7	2	1	1
数量%	81.0	13.3	3.0	1.46	0.27	0.19	0.08	0.08	0.15	0.08	0.27	0.08	0.04	0.04

小竪穴 158　　礫総重量 206kg　　総個数798個

礫重量(kg)	～0.5	～1.0	～1.5	～2.0	～2.5	～3.0	～3.5	～4.0	～4.5	～5.0	～10	～15	～20	20～
個　数	576	140	51	7	17		4	1	2	1	5	1		2
数量%	71.0	17.5	6.3	0.88	2.13		0.50	0.12	0.25	0.12	0.62	0.12		0.25

小竪穴 172　　礫総重量 247.5kg　　総個数1377個

礫重量(kg)	～0.5	～1.0	～1.5	～2.0	～2.5	～3.0	～3.5	～4.0	～4.5	～5.0	～10	～15	～20	20～
個　数	1254	90	16	8	1	2	1	2	1		1	1		
数量%	91.0	6.5	1.16	0.58	0.07	0.14	0.07	0.14	0.07		0.07	0.07		

小竪穴 193　　礫総重量 280.5kg　　総個数1612個

礫重量(kg)	～0.5	～1.0	～1.5	～2.0	～2.5	～3.0	～3.5	～4.0	～4.5	～5.0	～10	～15	～20	20～
個　数	1555	45	6	3	2		1							
数量%	96.4	2.3	0.37	0.18	0.12		0.06							

V　臼ケ原西遺跡

1. 位置と環境

臼ケ原西遺跡（原村遺跡番号98）は、柏木区の南西、中央自動車道の諏訪南インターの北東約3㎞の、長野県諏訪郡原村柏木9323-1番地付近に位置する。

臼ケ原遺跡は東側に、史跡阿久遺跡は約300mを隔てて西側に接しており、前沢遺跡は大早川を隔てた対岸に位置している。

この付近は八ヶ岳西麓にあたり、東西方向に細長く発達した大小様々な尾根状の丘陵がみられる。その一つである大早川左岸のやせ尾根上にいくつかの遺跡が分布しているが、臼ケ原西遺跡は最も下流側に位置している。これより西は約1.5km先でフォッサマグナの西縁である糸魚川－静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られる。

本遺跡の発見は新しく、平成７年度に村教育委員会で実施した「県営圃場整備事業　原村西部地区内における埋蔵文化財緊急分布調査」の折りに土師器等を発見したことにはじまる。
しかし、大変小規模の尾根であり遺跡の立地としてはあまり良くない。

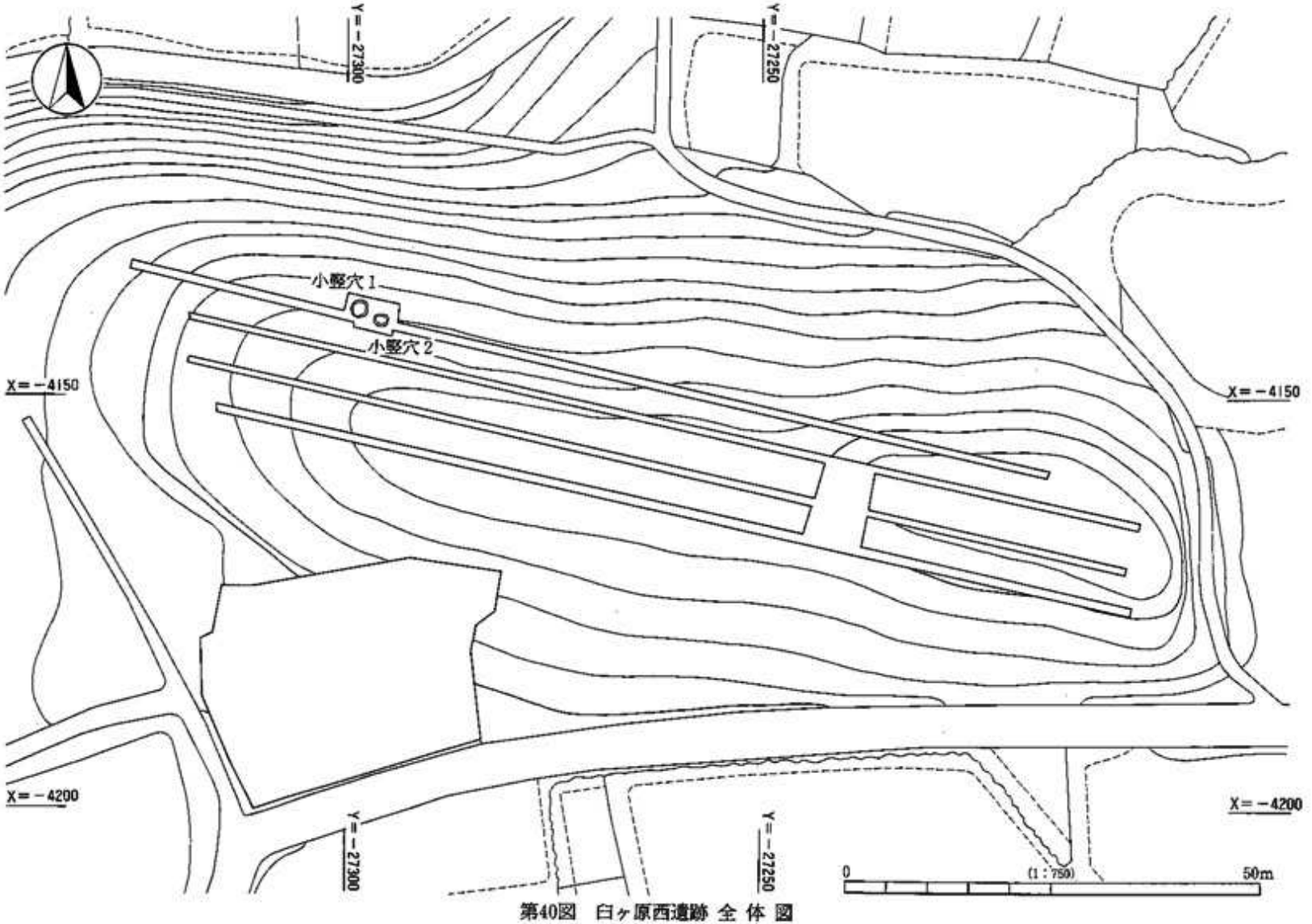
発掘地点の地目は山林、畑であり、畑地は桑園として利用されていようである。尾根上の黒色土の堆積は薄く、畑地の耕作土は黄褐色を呈していた。

2. 土　　層

第　図に示すように遺構の分布が希薄と考えられた尾根上にはトレンチを入れ、遺物が採集されていた斜面の畑地部分は平面発掘を実施した。土層は地点によって異なるがおおむね以下のように観察された。

尾根上部　Ⅰ層　黒色土。腐植を大量に含む。締まりなく20～30cmの厚さ。
　　Ⅱ層　褐色土。Ⅰ層からⅢ層への漸移層。締まり弱く厚さ10数cm。遺構検出面。
　　Ⅱ層　黄褐色土。いわゆるソフトローム層。

斜面部分　Ⅰ層　黒色土。斜面上部では薄く数cmだが、斜面下部では１m近くになり大小の礫を含む。
　　Ⅱ層　褐色土。Ⅰ層からⅢ層への漸移層。斜面上部ではわずかにしか確認されず、斜面下部では20cm程度の厚さがあり、大小の礫を含む。
　　Ⅲ層　黄褐色土。ソフトローム層。大小の礫を多量に含む。



第40図　白ヶ原西遺跡 全 体 図

3. 遺構と遺物

検出調査した遺構は時期不明の小竪穴2基が尾根上部から発見されたのみである。遺物は尾根上部のトレンチでは若干の石器と原石、斜面部分では縄文土器破片を1点得たにすぎない。

小竪穴 1 (第41図 PL18)

尾根上部のトレンチに輪郭の一部が検出され、周辺を広げたところ小竪穴と判明した。覆土は単層で褐色～暗褐色の締まりのよい土が堆積していた。掘り込みが浅いためややはっきりしないが壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦でほぼ水平である。壁、底面等に特別な施設は見られなかった。遺物は発見されなかった。

小竪穴 2 (第41図 PL18)

尾根上部のトレンチで小竪穴1を検出中に輪郭の一部が検出され、周辺を広げたところ小竪穴と判明した。覆土は上層に黒褐色土がみられ自然堆積の情況を示しており、検出は容易であった。掘り込みが浅いためややはっきりしない。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦でほぼ水平である。壁、底面等に特別な施設は見られなかった。遺物は発見されなかった。

遺構外出土の遺物

土器　図示していないが、斜面部分から堀の内式の土器片が1点採集されたのみである。

石器　(1～3)

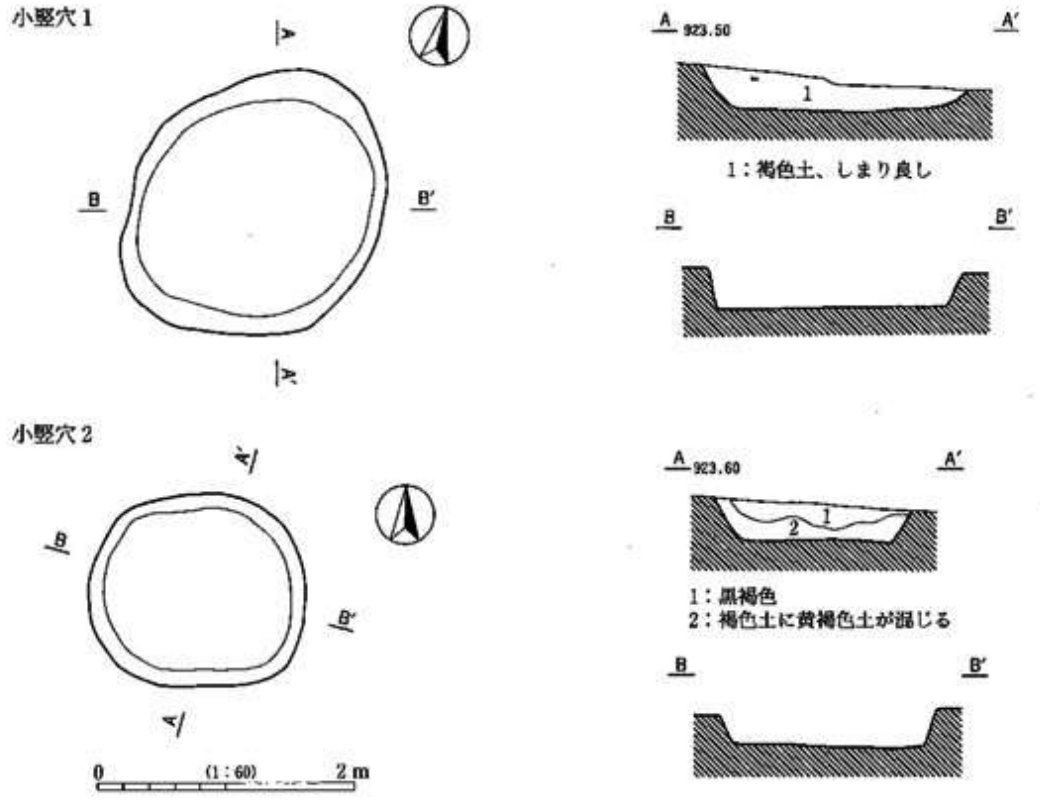
すべてトレンチ内出土である。1は二次加工のある剥片で黒曜石製。両側辺にノッチ状の剥離が施され、さらに下端裏面に使用痕である薄い平坦剥離が連続している。

3の磨石は多孔質安山岩製で、全面に顕著な摩耗が観察できる。なおこの石器は器体が分割された後、切断面に連続調整が表裏両面から加えられている。ただしその調整には刃部を作出するような意図は窺えず、形態の復原が目的だったとも考えられる。

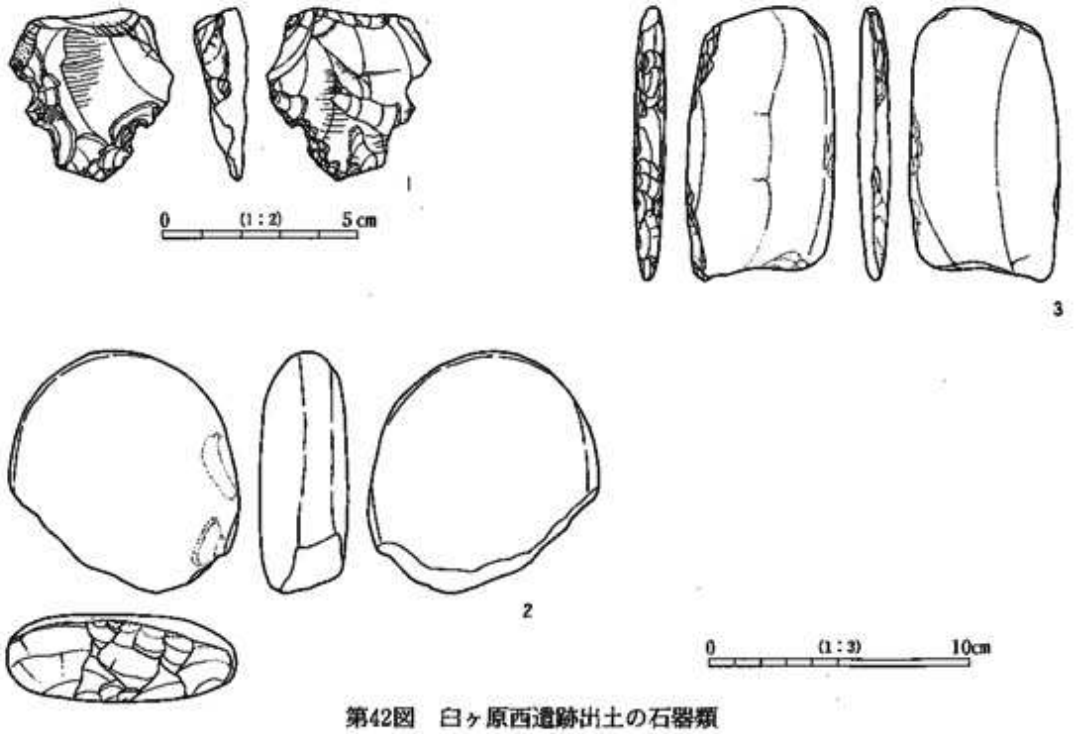
2の横刃形石器は凝灰岩製で、横長の板状剥片を長方形に成形し、長辺の一辺を刃部といている。刃部以外の調整は急角度、短辺の一方は急角度の調整で内湾気味に成形されている。刃部の調整は急角度から通常の角度で行われているが、調整面は摩耗により原形が失われる。

4. まとめ

当初尾根上部からは縄文時代の陥し穴が、斜面部分からは平安時代の住居跡が予想されていたが結果は上記のとおり小竪穴が検出されたに留まった。小竪穴の帰属時期は不明であり、小竪穴を築いた人々の集落がどこにあり、本遺跡とどのような関係にあったかは今後の研究課題である。



第41図　白ヶ原西遺跡 小 竪 穴



第42図　白ヶ原西遺跡出土の石器類

VI 臼ケ原南遺跡

1. 位置と環境

臼ケ原南遺跡（原村遺跡番号101）は、柏木区の南西、中央自動車道の諏訪南インターの北東約3kmの、長野県諏訪郡原村柏木9473-1番地付近に位置する。

臼ケ原遺跡、臼ケ原西遺跡は北側に、史跡阿久遺跡は約100mを隔てて西側に接しており、前沢遺跡は大早川を隔てた対岸に位置している。

この付近は八ヶ岳西麓にあたり、東西方向に細長く発達した大小様々な尾根状の丘陵がみられる。その一つである大早川と阿久川にはさまれたやせ尾根上が遺跡である。両河川ともこれより西は約1.5km先でフォッサマグナの西縁である糸魚川ー静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られる。

本遺跡の発見は臼ケ原遺跡調査時に念のため入れたトレンチに小竪穴が検出されたことにはじまる。このため当初は臼ケ原遺跡南尾根地区と呼称していた。調査の結果、平成10年度の圃場整備事業の対象外の地域にまで遺跡が広がっていることが予想されたため、本年度はトレンチ調査を主とし、破壊が免れない一部地域のみ遺構の調査を行った。またその詳細については来年度一括して報告する予定である。

発掘地点の地目は山林、畑であり、畑地は普通畑・桑園として利用されていようである。尾根上の黒色土の堆積は薄く、畑地の耕作土は黄褐色を呈していた。

2. 土　　層

第43図に示すように遺構の分布は希薄であり、また広大な地域にわたっているため土層は地点によって異なるがおおむね以下のように観察された。

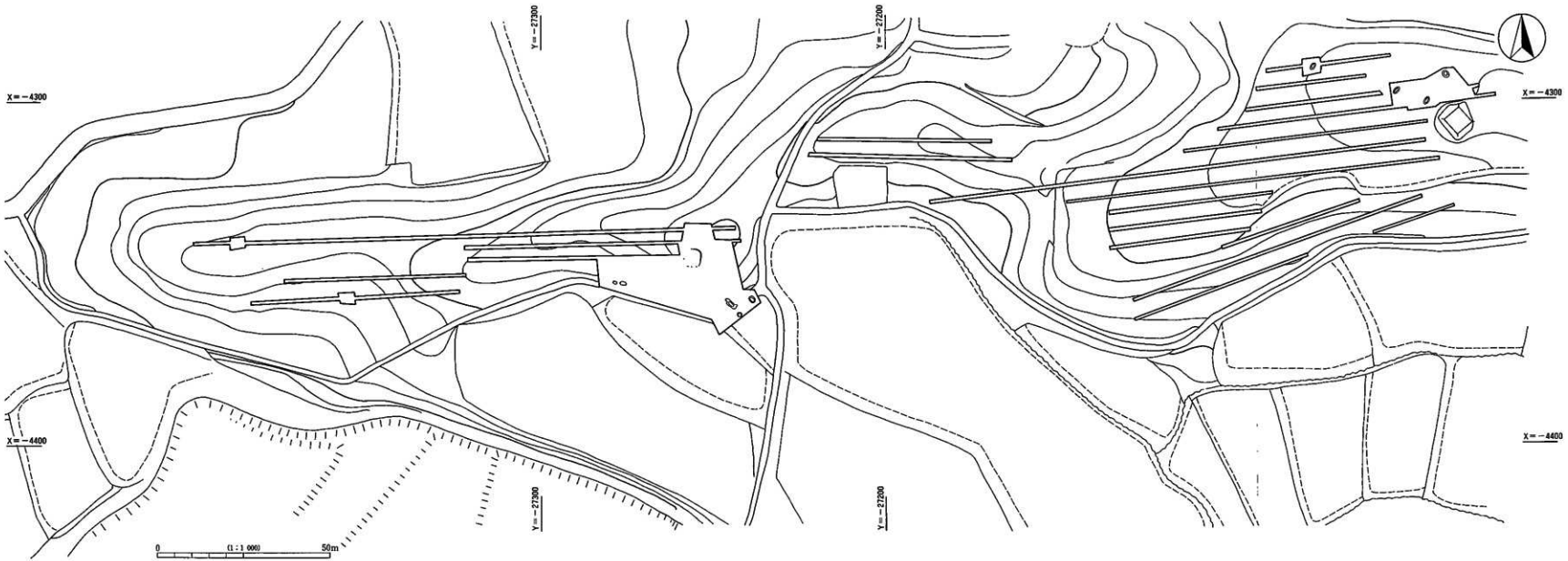
Ⅰ層　黒色土。締まりなく20cm程度の厚さ。山林部分では腐植物を多量に含む。

Ⅱ層　褐色土。Ⅰ層からⅢ層への漸移層。締まり弱く厚さ10数cm。遺構検出面。

Ⅲ層　黄褐色土。いわゆるソフトローム層。

3. 遺構と遺物

検出調査した遺構は時期不明の陥し穴が4基、集石炉1基、縄文時代中期の住居跡1軒である。このほか時期不明の小竪穴を5基ほど調査している。



第43図　白ヶ原南遺跡 全 体 図

またトレンチからはわずかな土師器、灰釉陶器の破片も検出されているが、これらに伴う遺構は発見されなかった。来年度に調査を見送った遺構は住居跡だけでも２軒以上あり、今後どのような遺構が発見されるのか大変興味深い。

4. ま と め

当初予想していなかった地点からの遺構造発見が相次いだため、やや当惑したが、考えてみれば、原村での遺跡立地を見直させるような重要な発見である。本遺跡は臼ケ原西遺跡以上に幅の狭い、いわゆる痩せ尾根に立地しており、一般には人々の生活の痕跡などまず考えられない場所である。また西は阿久遺跡、北は臼ケ原遺跡に接しており、これらの遺跡との係わりも予想される。来年度の調査に期待したい。

Ⅶ 結　　語

平成８年に始まった「県営圃場整備事業　原村西部地区」も本年度は３年目にあたる。昨年、一昨年の大規模な集落跡の調査に比べ、今年度は遺構数も少なくやや余裕を持って調査ができたのではないかと感じている。しかしながら、年を追うごとに破壊され減少してゆく遺跡を思うとき、はたして破壊に見合っただけの調査による成果が残せたかどうか、当事者として慚愧にたえない面もある。

反省の意味を込め、現場での調査をふりかえり、今後にむけての課題を明らかにしつつ結語としたい。

前　沢　遺　跡

尾根上の部分はすでに破壊されており、斜面部分にも遺構は希薄である。現集落に近接した地域が遺跡の主体部と考えられ、今後の個人開発等による蚕食的な破壊が予想される。縄文、平安とともに原村では数少ない中世の遺物も検出されており、大切に見守って行きたい遺跡である。

臼ケ原遺跡

残された課題は大きく２つある。ひとつは陥し穴についてであり、未調査地点での陥し穴の連続性の見きわめと、周辺遺跡の中での臼ケ原遺跡の位置付けの問題である。狩場として機能していた範囲がとらえられれば当時の狩猟の実像にせまる絶好の資料となるばかりでなく、縄文社会観を変えるほどの新事実を提供する可能性さえある。また周辺遺跡との関連からは陥し穴の最大の弱点ともいえる時期決定に重大なインパクトを与えることができると信じている。

ふたつめは集石状遺構の解明である。近接する阿久遺跡の集石等とは異なっているものの、全く関連がないとはまだ言い切れない。注意深く類例を探していきたい。

臼ケ原西遺跡

遺跡は圃場整備によって完全に消滅したが、尾根上の小竪穴は永久に記録される。今後もこのような小規模な遺構に対しても初心に帰って取り組むつもりである。

臼ケ原南遺跡

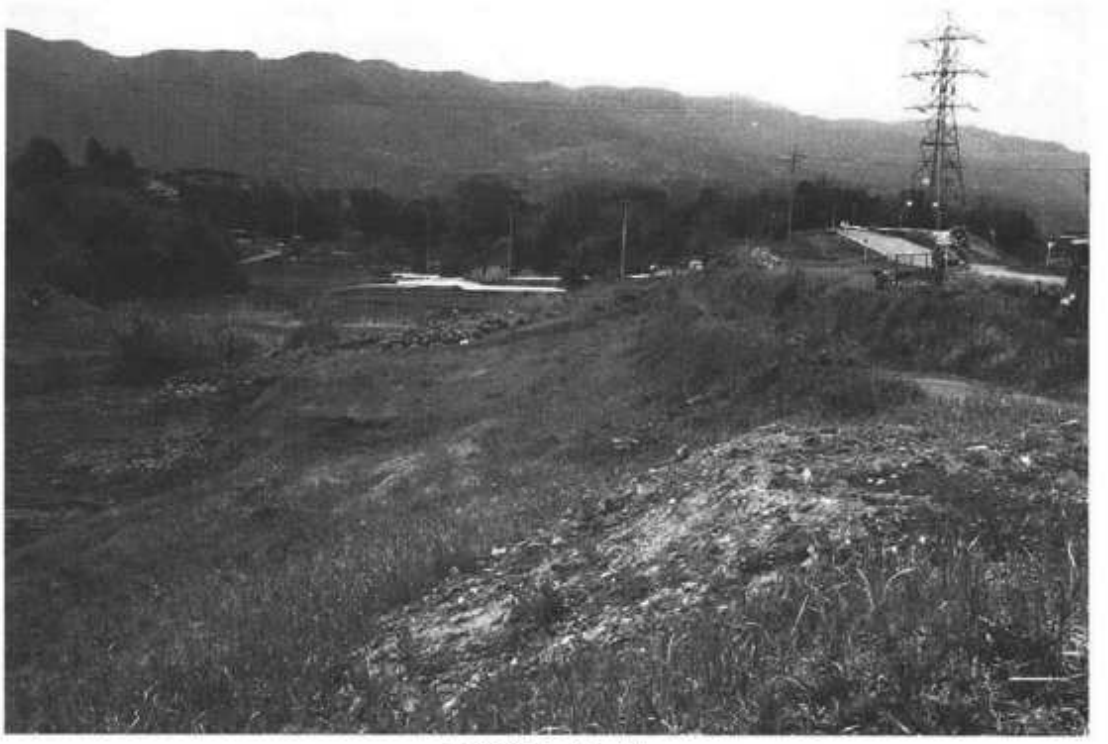
従来考えられなかった地形に立地する遺跡である。来年度の調査に期待している。

最後に、関係者各位ならびに調査にたずさわられた方々に厚く御礼申し上げる。

写 真 図 版

写図1　前沢遺跡

前沢遺跡　臼ヶ原からの遠景



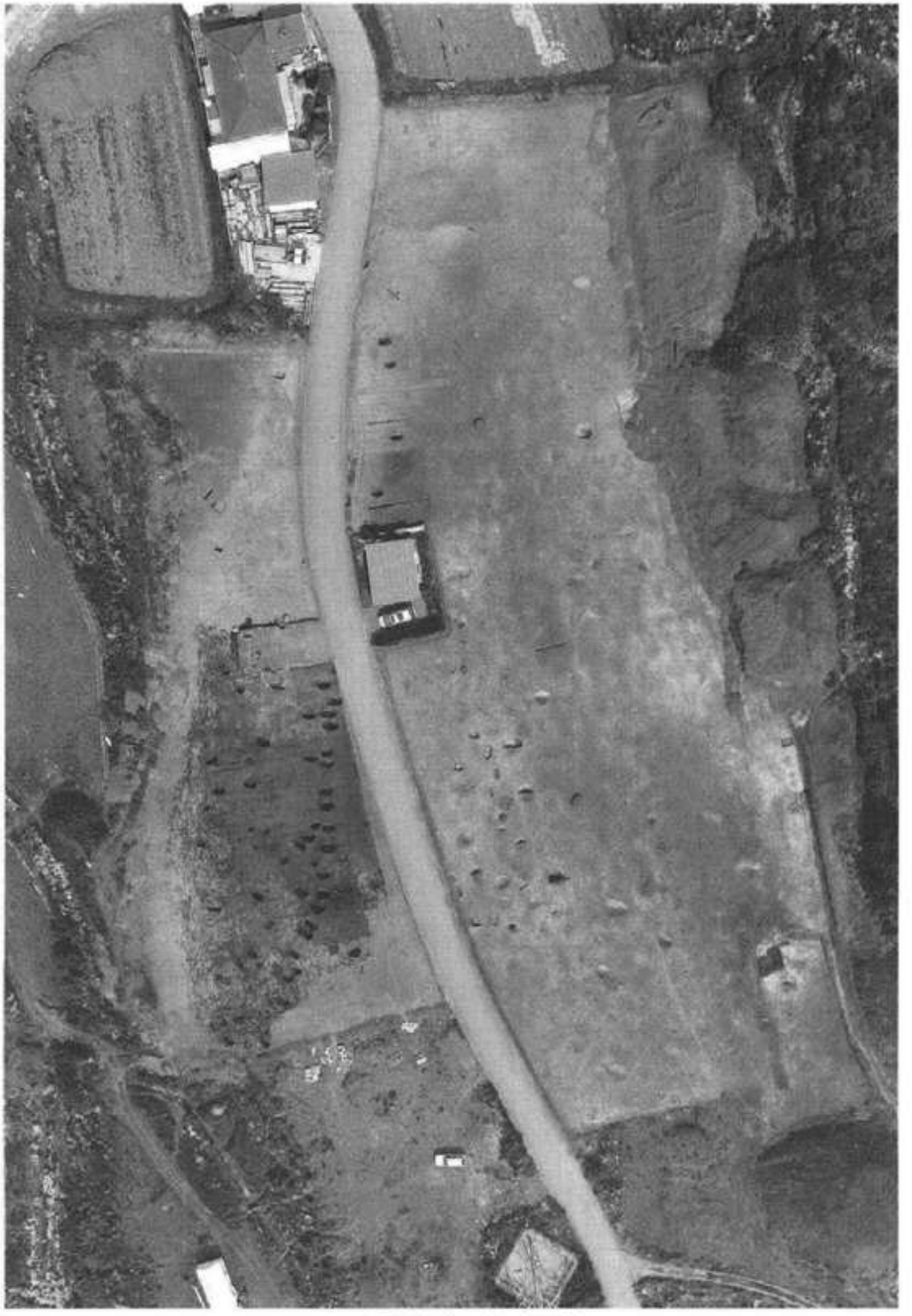
前沢遺跡　近　景

写図2　前沢遺跡

前沢遺跡　斜面トレンチ調査風景 (1)

前沢遺跡　斜面調査風景 (2)

写図3　白ヶ原遺跡



白ヶ原遺跡　東　部　全　景

写図4　臼ヶ原遺跡

臼ヶ原遺跡　前沢からの遠景

臼ヶ原遺跡　調査前の現況

写図5　白ヶ原遺跡

白ヶ原遺跡　発掘風景(1)

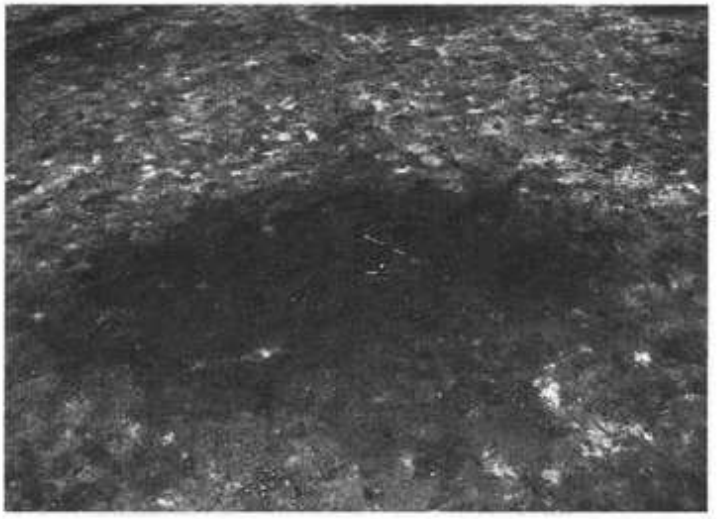
白ヶ原遺跡　発掘風景(2)

写図6　白ヶ原遺跡

陥し穴

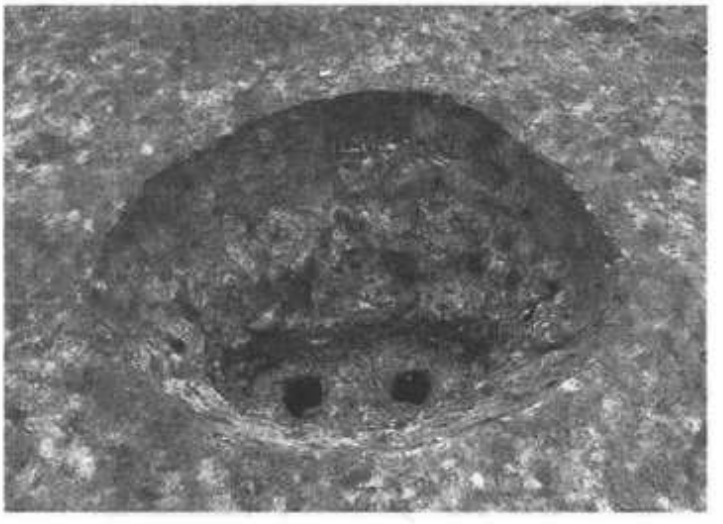
小竪穴12

検出面



断　面

完　掘



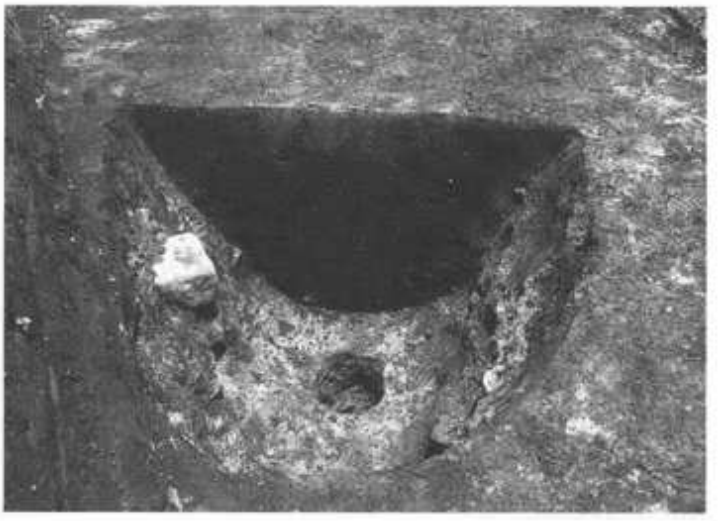
写図7　白ヶ原遺跡

陥し穴

小竪穴207

平面

断面



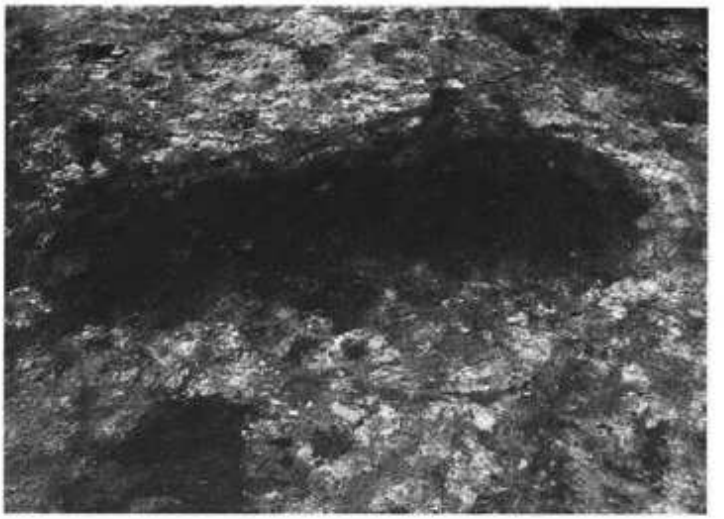
完掘

写図8　白ヶ原遺跡

陥し穴

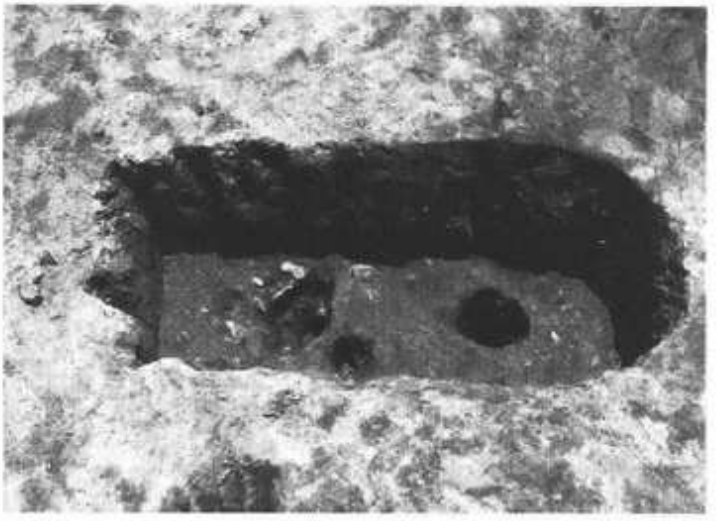
小竪穴32

検出面



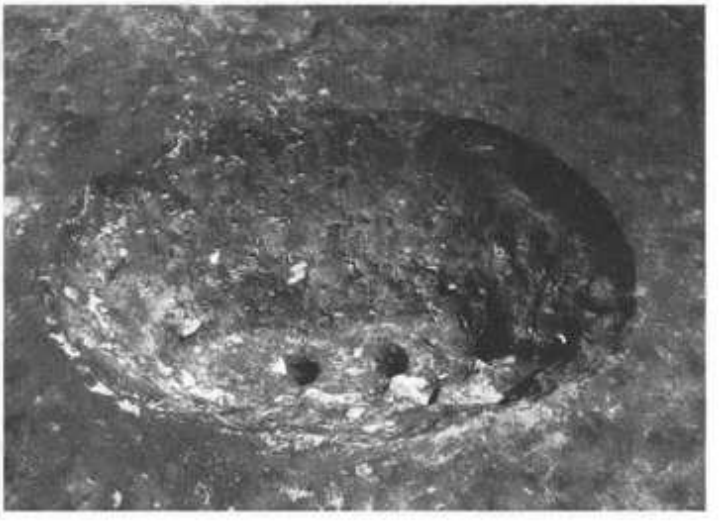
断　面

完　掘



陥し穴

小竪穴11



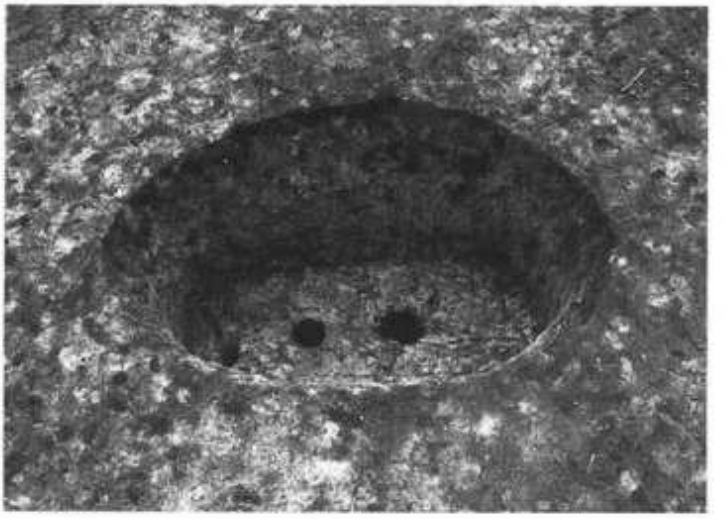
小竪穴19

小竪穴220

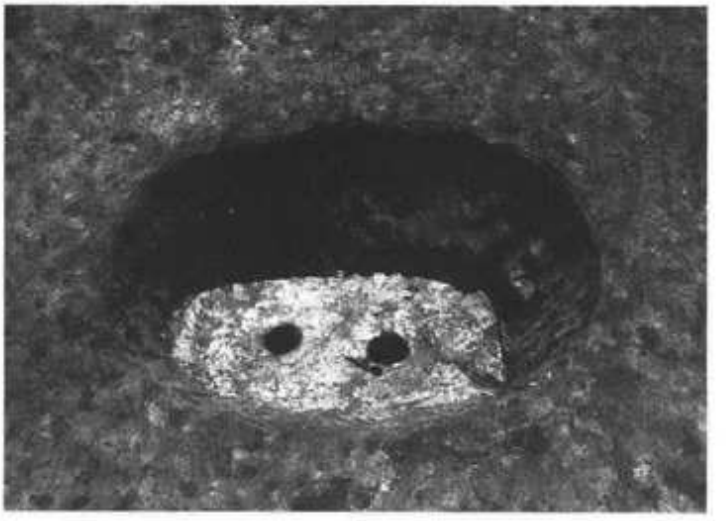
写図9　臼ヶ原遺跡

写図10　白ヶ原遺跡

陥し穴



小竪穴13

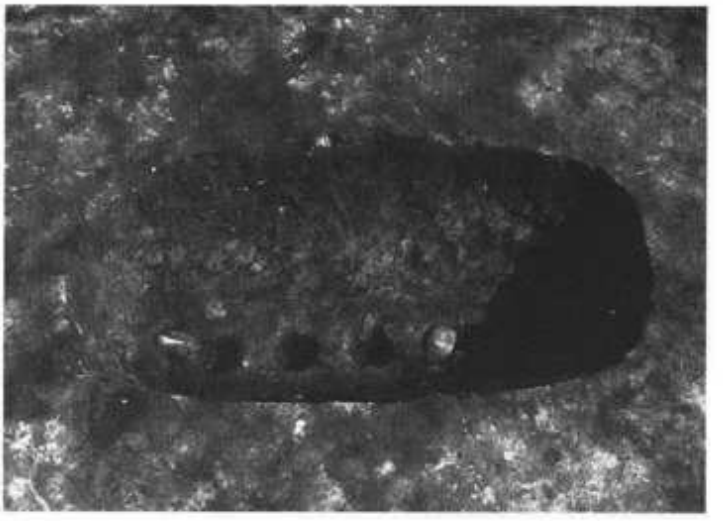


小竪穴14

小竪穴15

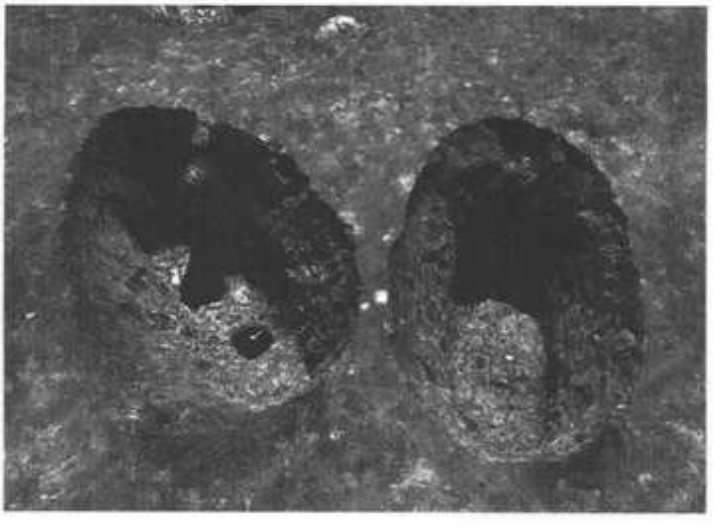
写図11　白ヶ原遺跡

陥し穴



小竪穴21

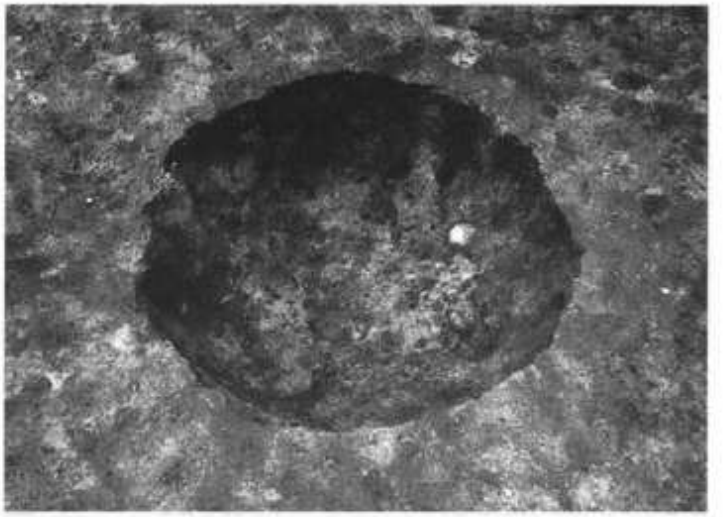
小竪穴201



小竪穴18（右）
小竪穴24（左）

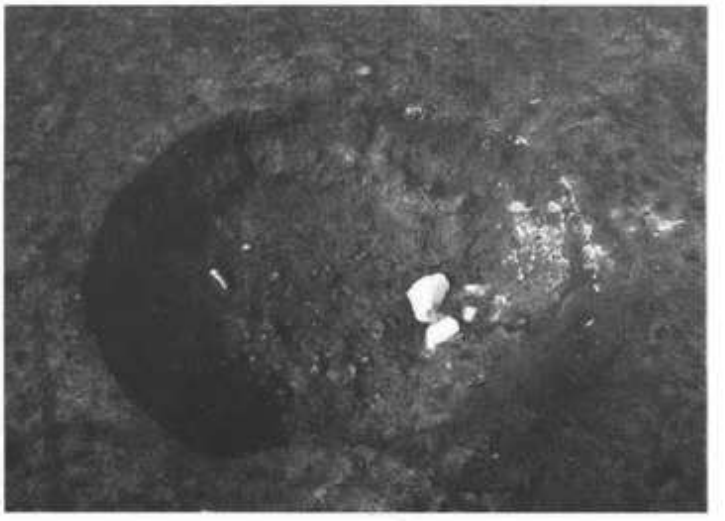
写図12　白ヶ原遺跡

小竪穴



小竪穴54

小竪穴57



小竪穴62

写図13　臼ヶ原遺跡

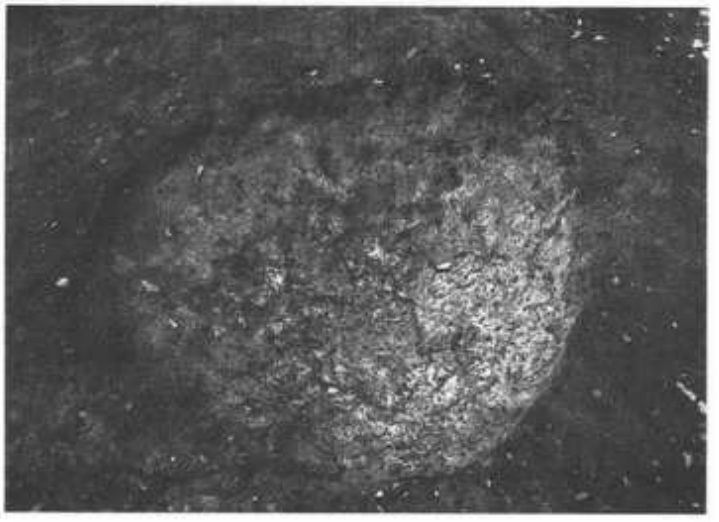
集石状遺構

小竪穴69

平　面

断　面

完　掘



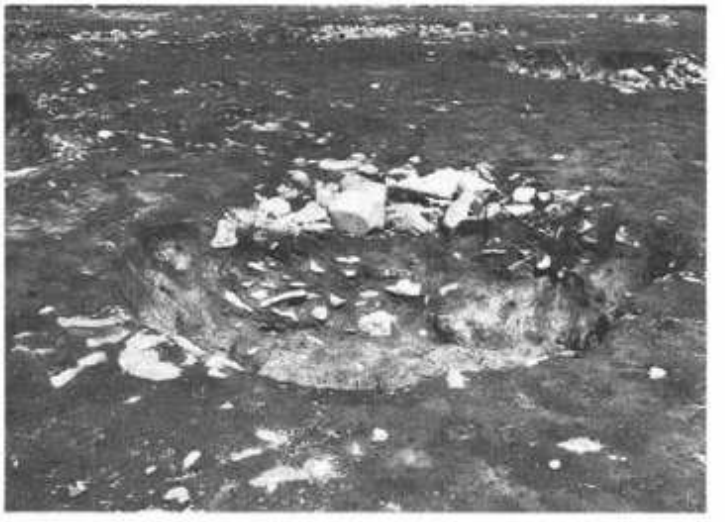
写図14　白ヶ原遺跡

集石状遺構

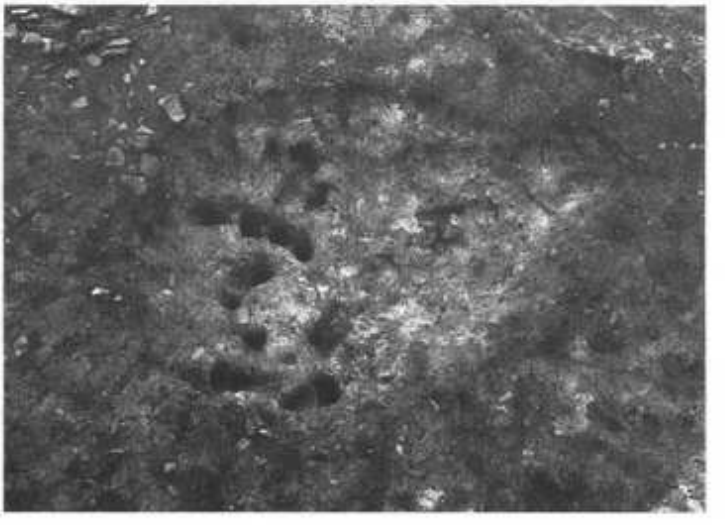
小竪穴81

平　面

断　面



完　掘



集石状遺構

小竪穴104

小竪穴128

小竪穴131

写図16　臼ヶ原遺跡

集石状遺構

小竪穴105

小竪穴107

小竪穴111

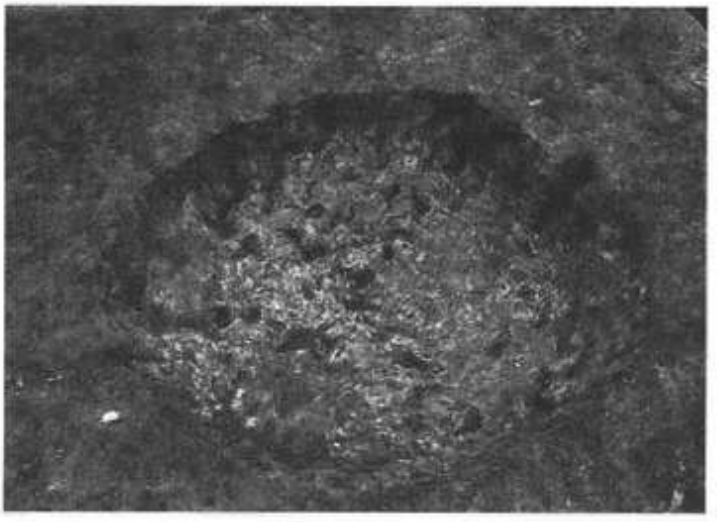
写図17　白ヶ原西遺跡

白ヶ原西遺跡　前沢からの遺景

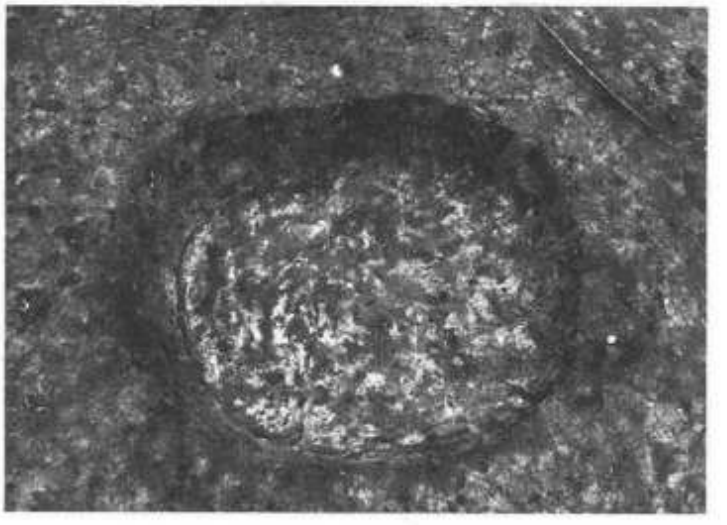
白ヶ原西遺跡　近　景

写図18　白ヶ原西遺跡

調査風景



小竪穴1



小竪穴2

写図19　臼ヶ原南遺跡

トレンチ調査風景

発掘調査風景

写図20　白ヶ原南遺跡

トレンチ調査風景

トレンチ調査風景

報告書抄録

ふりがな	まえざわ　うすっぱら　うすっぱらにし　うすっぱらみなみ
書名	前沢・臼ケ原・臼ケ原西・臼ケ原南遺跡
副書名	平成10年度県営圃場整備事業原村西部地区に先立つ緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	原村埋蔵文化財　49
シリーズ番号	49
編著者名	田中正治郎
編集機関	原村教育委員会
所在地	〒391-0104　長野県諏訪郡原村6549番地1　TEL　0266-79-211
発行年月日	西暦1999年3月

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m²	調査原因
前沢（まえざわ）	長野県諏訪郡（ながのけんすわぐん）原村柏木（はらむらかしわぎ）	3637	12	35度57分50秒	138度12分00秒		1757	平成10年度県営圃場整備事業原村西部地区
臼ケ原	〃		17	35度57分45秒	138度12分10秒		8830	
臼ケ原西	〃		98	35度57分40秒	138度12分00秒		1422	
臼ケ原南	〃		101	35度57分35秒	138度12分00秒		2577	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前沢		近・現代	溜		
臼ケ原		縄文時代早期・前期	陥し穴46	土器、特殊磨石	陥し穴の列状配置
臼ケ原西			小竪穴2	黒曜石	
臼ケ原南		縄文時代早期・中期	住居跡、陥し穴	石皿、土器	

原村埋蔵文化財49

前沢・臼ケ原・臼ケ原西遺跡

県営圃場整備事業原村西部地区
に先立つ緊急発掘調査報告書

発行日　平成11年3月

発行　原村教育委員会
〒391-0192 長野県諏訪郡原村
TEL 0266-79-2111

印刷
製本　もえぎ企画書籍
〒394-0043 岡谷市御倉町2-21
TEL 0266-22-4892

886.4
896.8
882.3
890.1
904.3
869.8
887.7
890.9
892.7
894.2
897.6
889.7
905.5
898.8
907.5
896.7
892.0
913.5
897.0
906.0